

雪見る眼ポインセチアに転じけり  
激しさを増せる小雪は脈搏つかに  
注連の白初雪の白招じけり  
初雪を降らせる空の奥をみる  
初雪をはたけり鳥の発つやうに  
降り出して脇目もふらぬ雪となり  
降る雪の弱りて隙を見せにけり  
降る雪の意地を失くして水雪に  
降る雪の意地無く地べた濡らすのみ  
乱るとき大いに乱れ細雪  
つままない雪が小雨になるなんて  
初雪の変はり果てたる雨雫  
新雪のこれっぽっちがなほ瘦せる  
新雪のこれっぽっちが解けて水  
雪止んであつけらかんとしたる空  
不意にくるものは雪にて安んぜり  
地震・颱風・津波来し年逝かせけり  
大津波年の最期に控えしは  
雪隠に雪気ひしひし小晦日  
水雪の冷えを濃闇に持込めり  
夜の雨と云へど雪冷えもちみたり  
水雪に水っぽくなる街の景  
数え日の日暮れて雪脚蘇る  
母が見せ子の瞬ける初氷  
あらたまの航跡太く曳きにけり  
雲間より日の抜け落つる冬の海  
冬の海一光芒を遺しけり  
冬の海なほも火の島浮かべをり  
暮れさうで暮れぬ零下の水平線  
花アロエこんなに長けて釣民宿  
電話子機電池が切れて日の永し  
買洩らすもの未だありて小晦日  
行く雲の日当りながら小晦日  
小晦日買ひ足すものはメモにして  
水仙のこもり香正月迎ふ家  
空半ば閉ざす雲あり小晦日  
小晦日地はうるほひて雨の跡  
七福神正月迎ふ玄関に  
日暮れんとする町川に再び雪

何やっても中途半端に年の暮  
煤の日の妻に替はりて日めぐり繰る  
四方囲む山にも気性初山河  
俳諧の古格に遊び読始  
小つごもり大つごもりも雪予報  
古俳句の息の大いさ歳旦吟  
洪鐘（おおがね）に甘酒年を迎えけり  
大晦日まだ起きてゐて隣の灯  
年の夜の家々の灯の明るくて  
たまさかの雪に見舞はれ福寿草  
大つごもりさむし前々日も雪  
正月の帰省空港大写真  
怪人二十面相枯木の合間より  
いつ降ってもおかしくない空首すくめ  
止みては降る霰の雨の大三十日  
植込みにしゃらんしゃらんと初みぞれ  
みぞれては森羅万象奏でけり  
大三十日昼過ぎたうたう降って来ぬ  
石門の上にかばかり初霽  
凹凸の路を均して初霽  
庭石を庭石らしく初霽  
玉あられ転がり込んで松葉の中  
通り魔のやうな霰に遇ひにけり  
耳おほふ昼の霰となりにけり  
松飾り霰を発止と受けとめて  
霰受く八つ手の音の大きかり  
雪のあと雷とはとんだ大つごもり  
簡単に了はらぬ年よ除夜も雪  
暮れながら雨脚速め除夜のくる  
大三十日雪のみならず迅雷も  
太平洋側にも積もる年の雪  
大年の雨暮れながら迅雷も  
鴨のこゑ雨に寂び寂び暮れてくる  
大年の雨のこのまゝ上がらぬか  
路地濡らす雪のあと雨大三十日  
光り落つ軒端の雨滴大三十日  
大年の雨滴に宿る夕あかり  
まだ止まぬ雨除夜詣だうしやう  
年の夜の雨の匂ひを立たす闇  
大年の何気なく来し海の端

ぼつつりと除夜の街灯点る路地  
手料理に常の晚酌年の夜  
とるとろと除夜のしば口独り酌む  
年の夜の孫の手手持ち無沙汰なる  
手酌してをればほろほろ雪が降る  
手酌してほろ酔気分除夜がくる  
愚は承知ながらも浮かれ大三十日（大三十日愚な  
り元日猶愚なり 子規 あれば）  
除夜の鐘撞き出すまでの歌の宴  
熱唱に六十余州年忘れ  
年の夜を一新人の歌唱力  
新人の中の新人除夜熱唱  
厨妻これは囊と聞き分けて  
年の夜を更かす蜜柑の皮積み上げ  
年の夜を洗濯の妻ごころうさん  
除夜浮かれ明の自動車ソングかな（小林明）  
はつはるを唄ひて三味線テンツルシャン  
雪のあと雨となる除夜やや温し  
年の夜を踊る火影に立木影  
除夜詣雨にうるほふ地を踏みしめ  
年の夜の雨は止んだか月でたか  
妻  
弾き納め電子ピアノをぼろぼろん  
年の夜の電気毛布を入れにゆく  
年越蕎麦練臭さが顔にくる  
年越蕎麦練の骨をもてあます  
年越蕎麦終の数なるこの三人（みたり）（母・妻  
・吾）  
除夜の妻やつと片づけ了へ来しと  
をかしき程しこたま着込み除夜詣  
大寒気目鼻は防ぎやうもなく  
防寒服しやつちよこばつて歩きけり  
胸を張る防寒服に往き遇ひぬ  
坂上の鐘を撞き出す除夜零時  
参道の歴然とあり除夜篝  
除夜のくる坂を蹻音からころと  
くらやみに立木のこぞる年の夜ぞ  
昔もやどすんどすんと除夜夜番  
水を張るバケツが一つ年の家  
除夜篝火の粉の竜を放ちけり

年の火の楯の芯から爆ぜにけり  
年の火に面を焙り背を焙り  
年の火は囲める人の股を透き  
年の火の火の粉繰り出す杜の空  
背焙れば叩くが如し年の火は  
天空に光芒抜け除夜の星  
除夜篝団扇太鼓にさ揺らぎて  
年の夜の火の粉拳がれり松が枝に  
早咲きの紅梅透けり除夜篝  
除夜零時過ぎの水舎に水鳴りて  
若きらにカウントダウンの冬花火  
護摩火の炎真一文字に年立てり  
寺々の鐘重ならず除夜零時  
除夜詣面提灯いろにかな  
鈴しゃんと太鼓はどんと除夜詣  
除夜の月杜随一の銀杏の上  
除夜の空ひろらに白雲渡しけり  
若人に除夜のコンビニ灯を煌々  
除夜過ぎの新聞店に灯の煌々  
乾坤の一突き月の除夜の鐘  
大つごもりの一番の鐘撞けり  
除夜の鐘カウント係侍らせて  
除夜の鐘余韻の闇を背にしたり  
日めくりと時計机上に除夜過ぐる  
ここに逝くオリンピックのありし年  
初刷を寝床に引き込み読めるなり  
初刷の神奈川新聞分厚かり  
古葉書挟みある本寅彦忌  
音ゆるく囊に果のありにけり  
合併に失くなる地名年新た  
柿の蒂つくねんと年明けにけり  
高梢に鳥のゐるゐる大旦  
初日影鴨に動きの見えにけり  
初鴉大きく反れるモノレール  
初日の出江に散らばれる鴨染めて  
初日影砂浜に我倒しけり  
初日待ち渚にボーイスカウト等  
のぼり切り初日は常の日となりぬ  
ダイバーのスーツ干しあり初日影  
よき齡とりて雑煮の鶏の味

初詣鳩と日向を頷ち合ひ  
初詣櫛常より華やぎて  
葉を残す櫛もありて初詣  
詣で人その後絶えし初詣  
こんな日がいままで続く初詣  
初鳩の落葉煽りて降り立ちぬ  
初詣櫛残る葉戦がせて  
合併に町名失すと記し賀状  
屠蘇祝ひ岳父は元氣を与ふ人（九十五歳）

● HAIKU200501sono2

俳諧の詠み初め風の四日より  
しるこより雑煮齡といふことか  
去年よりも言葉少なし雑煮椀  
風流の始め太箸下ろしけり  
おてもとといふ太箸のつけ始め  
お正月迎ふ太箸前にして  
四日はや暖房音のおと確か  
節料理田作り残しはや四日  
黒豆の重も尽きたかはや四日  
三ヶ日何處へも行かず玻璃の内  
四日の雨路しめらせて上りけり  
四日の空明るくならんと勤めけり  
妻勤め吾はその留守守る四日  
田作りの凹凸なせるは時化の海  
しんねりと指につめたき切山椒  
先づは彩それから香り切山椒  
戸を開けて空気入れ替ふお元日  
四日の陽隣の二階の物干場  
朝まだき登音のゆく四日の路地  
初空を見てみてこくりと首鳴りぬ  
初空に漂へるもの探して無し  
初風を頬に当てんと外へ一歩  
年を越す鴨ある海に初明り  
初晴れにひとつ体操でもせんか  
注連飾かさりと日暮れ早めけり  
太鼓橋その上よりの初景色  
古池の亀の見渡す初景色  
一塵も止めぬ鴛鴦の身だしなみ  
晩酌に子持ち昆布かこりやいいや  
庭石の少し高きに初景色

数の子や三日も果の音と聞く  
詠ひ方こそせすんな歳旦吟  
詠ふなら土性骨より歳旦吟  
誰はばかり無き元旦の早寝かな  
ありあはせのものでよろしい年の酒  
身を沈め風の四日の日の出湯に  
濁り酒すんと酔ひて初夢など  
枝先のはや凍みをらん楓の木  
精一杯遊んで三日の雀かな  
彼のひとの決まって佛画年賀状  
年賀状いざこの寺の佛描く  
だいそれた初夢をもう見ること無し  
真横からこれはまさしく四日の陽  
ぞろぞろと四日の夕陽に塾退く子  
初売の赤旗風に高鳴れり  
三日の陽昏るるを惜しむ鳩ならねど  
初売のすずらん通りころりんしゃん  
初売の街頭突っかけてであるく  
煤の日の立読み駅前書店にて  
駅前にタクシー屯はや四日  
紙幣（さつ）出す音四日のキャッシュカードかな  
初空に鳶は居らぬか居りにけり  
鳶がこゑ落とす四日の団地かな  
正月の墓地青草を眼にしたり  
手袋の落ちてゐる路さう云へば  
郵便夫四日の風を突っ切りて  
参道に見るべきものは初雀  
氷らずに年を迎える阿字ヶ池  
鉄脚に初日のジェットコースター  
家鴨のこゑ池を巡る五日かな  
坂のぼる下駄に三日の響きあり  
鎌倉に一度出たきり三ヶ日  
水ぎぶぎぶ使ひ四日の皿洗ふ  
常の日に戻る四日の空を鳶  
雑木吹き四日の半端ならざる風  
車庫入れに四苦八苦しぬ年賀客  
消防団倉庫の脇の松飾り  
場所替えてポーズをとらす春著の子  
正月の鴨の見る方大きい音  
餅に飽きバリリとやりぬクラッカー

三ヶ日おだやか四日風吹いて  
風あると思へば絶えて四日の陽  
蘇鉄の実手にして戻る初詣  
群れずともよきものを汝(なれ) 初雀  
耳聾す五日の風の雑木山  
疾風に背と背寄せ合ひ寒芹摘  
正月の人を怖れぬまだら鯉  
翳のごと母がつきそひ春著の子  
枯園の中押し移る春著の子  
正月の家鴨に鴨に餌をやる子  
正月の鴨より猛きこどもごゑ  
水鳥の鼻筋東風を吹き分けに  
風音の街を擦り抜け四日かな  
花舗の前水びたしなる四日かな  
日を遍く正月の松優れたり  
初東風の音立て渡る槇の空  
二日から甲羅干しせる池の亀  
亀の首二日の空へ差し伸べて  
忙しげに御用始の日の真鴨  
くきやかに鴨の曳き初め水脈一筋  
太鼓橋登りたさうな春著の子  
大蘇鉄とは大らかな恵方寺  
風に鳴る雑木の中の寒椿  
葉叢より顔覗かせて八百椿  
俳諧の神にまみえん夢始  
乗初の電車ごとんと走り出す  
初夢は尿意に断たれ跡かた無し  
コンビニの繭玉一寸つつきみぬ  
輪飾やつつ走る風押さる人  
輪飾の飛んで門柱より一間  
一才児つついてをりぬ鏡餅  
妻の座は何と云はうか鏡餅  
家々の飾は反りて乾び来ぬ  
好天の裡に了りぬ三ヶ日  
● HAIKU200501son03  
窘(たしな)めるやうに数の子一粒づつ  
ぎこちなき歯の噛み合はせ小殿原  
伊達巻のめでたき彩を太箸に  
歯のたたぬ田作りを敬遠す  
数の子を噛む義歯の音それなりに

大木に対す五日の懐手  
公園の枯木に引っ掛かりある夕陽  
うすうすと五日の薄日雑木林  
鳩翔ってしまひ一木寒げなり  
大寒の斧の刃先が見ゆ曇天  
公園の五日の砂場に犇めく子  
賀客らの人気攫ひて末子珠海(しゅう)  
晚酌も五日過ぎれば常の酒  
風吹けば風に歩合はせ春著の子  
首筋は寒さの急所マフラー締む  
マフラーを首筋に当て離されず  
鳶滑る空にゆとりの五日かな  
年の酒いささか過ぎて軽んず言  
鉛筆削りごりごりと冬休  
国道にあらあら五日のゴミの嵩  
ゴミ漁りをるよ五日の大鴉  
犬の糞る土ある路地の五日かな  
残りものに福めくみかん五日かな  
最後よと出され五日のみかん哉  
昇天をまぬがれみたり日向ぼこ  
御大(おんたい)逝く俳壇明けて初霞(昭和俳人  
次々鬼籍に入れば)  
平成より昭和懐かし飾海老  
暁紅に変哲もなき木々回春  
近世武相名所めぐりを読初めに  
松とれし介護用品売場に陽  
庭石に、(ちゅ)と正月の蠅居るよ  
松とれし公園常の子の遊ぶ  
七種の公園の鳥よく啼くよ  
幼らの影踏み遊び松の内  
疾風が起こせる寒の牡丹の芽  
雑煮椀人参殊に目出度けれ  
宮鳩の脚を縮めて寒げなり  
差し歯にちよと扱いくき雑煮餅  
青きもの交せて七日粥といふ  
日当たりよき二階に五日の干布団  
堂縁にごろんと太注連松納  
初鳩に割って入りたる女の子  
掃初や子の部屋に充つ漫画本  
初湯して湯気の真中に寿老人(銭湯)

生け垣の向うをささと初箒  
日の暮れてゆくのが判る白障子  
水仙が元氣で年始の岳父の家  
輪飾の干反り具合も五日経て  
仰ぎゆく旧知の街の凧のそら  
はつはるの不二屋のぺこちゃん春著被て  
歳時記の例句古ぼけ見ゆ六日  
前方に五日の空をあふぐのみ  
濡れ縁にいつもの猫が来て五日  
年賀客腰を上げたる障子に日  
五日かな日のつらつらと櫂の秀  
慳食な鴉来て啼く大枯木  
慳食なこゑ放つ鳥裸木に  
年の火の焚き跡も早五日経て  
母訪ね晴れの五日のヘルパーさん  
五日の雲五日の海のうへにかな  
菊鉢の冬至芽浴す五日の陽  
うなばらの上に五日の雲広がり  
電柱に五日の鴉常の面（つら）  
五日かな海風受けて走る雲  
五日の雲光撒きつつ洋上を  
煌めきつ漂ふ雲も五日かな  
餅腹にかがよふ雲も五日ぶり  
足許に五日の街のつむじ風  
風出入り四日の旅行代理店  
金柑に少し日差しの衰ふか  
けんちん汁伝はる寺の総枯木  
眉の辺の少しかゆくて五日かな  
産土の石と枯木に五日の陽  
顎に当つ電気カミノリ五日の髯  
常連は躰一つで来て初湯  
着膨れ聞く湯屋の石鹸別料金  
銭湯の淑気漲る川景色  
初かすみ湯屋の硝子の四枚戸  
初湯殿かくし処を先づさきに  
番台と四方山話ちゃんちゃんこ  
小寒の空を仰ぎて西東  
小寒のこゑ聞く空に雲こごる  
迷ひ入る小路のごとし寒の内  
人前に押し出ださるごと大寒

寒さ急梅育むによかるべし  
湯呑より白湯立ちのぼる五日かな  
海よりの旭五日の柱染め  
さるすべり大樹五日の陽を返す  
路地抜けゆく子のこゑ学校始かな  
飽食に鏡開をせずなりぬ  
小寒や殖えし萁に胃の重し  
冬麗の眼鏡の球（たま）に小さき瑕  
松過の玻璃の汚れを見す日差し  
通り過ぐ木々が険しく見ゆ小寒  
谷戸尽し鎌倉に聞く笹子かな  
日延ばしにせぬこと大事寒雀  
羽搏ちては凍ることなき夫婦鶴  
何やかや云ひては海鼠に手を出しぬ  
振り向いて何處に失せたる帰り花  
いの一 番石屋の臘梅咲き出して  
実時の文庫（ふみくら）跡地梅早し  
なまはげの案内せし君初夢に（故縄田屋朗々）  
紫に裸木描くや太っ腹（孫 美雨）  
お年賀に七種籠など如何なもの  
柚子も入れ七種粥の真似事す  
古漬の味またよろし松過ぎて  
松過の白菜漬に甘味あり  
玄関にこれ置いたらと福寿草  
餅づくし見る見るうちに三日過ぐ  
最上川べりに捨てられ古竹筥  
飛んでゆく消防車なし年の暮  
スキーせる人を羨しと思はずよ  
力学の原理に適ふスキーせよ  
焚火して何だかゆとりのやうなもの  
日向ぼこ五臓六腑を折り畳み  
日向ぼこ瘦軀長身折り畳み  
えらさうに聞こゆる咳が出てしまふ  
新暦五日目にして繰り忘れ  
クリスマスカードことしも出し忘れ  
クリスマスカード日系三世より  
鳴り物入り日蓮さんの寺の除夜  
地の凹凸凹の処へ夏みかん  
霜焼の菊の葉臙脂朝日差す  
湿気取る炭を五年も放つたらかし

火桶より火桶の見ゆる牡丹園  
三箇所に火桶設え牡丹園  
埋火に手をかざし合ひ牡丹園  
遠近の牡丹に目遣り火桶に手  
駕鴛映す水の最も美しき季  
大根の値の跳ね上がる年逝かす  
水仙に斜めに差しくる日の角度  
今日中に了らす仕事日短  
酢豚酸し正月料理に慣れし口  
十二月孫の応対板につき  
こだはりの解けるがごとく三寒過ぎ  
山妻の厚着茶化して寒からず  
目に見えぬものの日脚の伸びをらむ  
鈍物にも等しく一陽来復す  
三冬をマスクせずして過ごせるか  
けふまでは手袋なしで済ませ来し  
マスクして見えてくるもの己が分（ぶん）  
東方に強く瞬くイヴの星  
松過の星を数ふる一つづつ  
全天に松過の星瑞々し  
● HAIKU200501sono4  
仁王よりその太注連を畏みぬ  
物足りし思ひに二日の空のあり  
手毬唄に還るその過去その又過去  
繭玉を揺らす手を待つごとくなり  
真つ先に朝日の当る初曆  
繭玉を助つ人旅先おみやげ屋  
垣伝ふ目白が一羽とは妙な  
「国芳 曉斎なんでもこいッ展だい！」展  
荒ぶ世の春をどっこい曉斎展  
きな臭き新春早々曉斎展  
曉斎が呼ぶから来たぞ新春展  
曉斎の諷刺棘持つ新春展  
曉斎の拳骨啖ふ新春展  
曉斎の信徒屯す新春展  
雑煮椀鱗一片舌の載せ  
松過ぎてよりぞ奔流なせる刻  
戻り賀状の一つや二ついや五つ  
恵方道ゆけば常より雲眩し  
留守居して残り福めくみかん剥く

さきざきに両親（ふたおや）同道春著の子  
鎌倉を昔に戻す羽子の音  
昔も今も笑ひは同じ福笑  
ふさはしき所に納まり飾羽子  
後（うしろ）から来る人力車梅早し  
人力車抜く人力車梅早し  
ぼっぺん持つ古女房を想像す  
健やかな心臓たれと破魔矢享く（一病あれば）  
替鷲のご利益こんなところにも  
風に幅ある石畳初詣  
若水と思へば両手にねんごろに  
石段をずずいと見上げ初詣  
初詣こんなところに一樹根  
お正月様の神慮を鳩も持つ  
暖房の要らぬをながなが日差す居間  
水つ洩出るに任せる齢なり  
とつぷり暮れ七日の闇になつてゐし  
酒粕にちびりちびりと七日の酒  
点々と大つごもりの雨後の星  
日本はこれからだうなる大三十日  
ここまでの酒と区切れる大晦日  
只空を眺めてゐても大晦日  
撞き始む除夜鐘坂の上ならむ  
除夜篝火の粉を挙げて楢くづれ  
寺々の鐘撞く遊び大三十日  
駄目押しのごとく撞くなり除夜の鐘  
両耳が莫迦になるまで除夜の鐘  
年の外に追ひ遣らるごとく除夜の鐘  
年の夜の鐘でも撞こか天然寺  
大年の午後何せむと家離る  
夫婦にて撞ける除夜鐘なほ響く  
除夜の鐘浅く撞きたる若夫婦  
知り合ひの誼もて撞く除夜の鐘  
除夜の鐘撞いていささか誇らしげ  
除夜の鐘綱の引つ張り具合かな  
除夜の鐘に顔染まるまで蟹で酒  
くれなゐに顔染まるまで蟹で酒  
たらば蟹年酒大いに進みけり  
たらば蟹能取の宿で酌むごとし  
松過ぎの牡蛎のバター焼きこつてりと  
蟹の肉せせる腕をあやつりて

松過ぎの酒一合で納まらぬ  
松過ぎの空を雨雲もて蓋す  
日記兼ね家計簿妻の初日記  
松とれて心機一転鶯のそら  
雀らも群れをつくりて正月す  
正月を祝ぐ金魚草うひうひし  
ちよつとした油断の一つ春の風邪  
正月花笑ひさざめく珈琲店  
正月や前へ前へと進むのみ  
六日もなれば空ゆく常の雲  
山妻に何もて報ゆ小正月  
正月の絶えて人無き路の果  
妻起つて正月花に水を遣る  
暮れ際の雲を見てゐる二日かな  
廻るべき所廻りて三日の酒  
除夜詣疲れが残り床の中  
元朝の煙草を買ひにポテポテ着  
二日の陽誰も採らない橙に  
女正月過ぎの或る昼ピザ焼いて  
電気ストーブ小部屋に合はせ小サイズ  
部屋隅に凋む風船松過ぎぬ  
松過ぎの洗濯物に差す薄日  
軽んずるものを軽んず夢始め  
正月の諷詠先づは空ゆく雲  
福寿草蕾むは切れ長仏の眼  
正月に立てては崩す旅プラン  
小寒の胃の腑に納まる煮こんにやく  
日月をはるかなものに福寿草  
思考力鈍る厚着はせんでおこ  
出で立ちは頭寒足熱探梅行  
初日影取り込みソーラーハウスかな  
葉隠れてふ処し方ありぬ水仙花  
句を敲き敲き歩きぬ水つ涙  
正月晴れ正面に不二見える筈  
黄房水仙けふはお休み小学校  
校庭に影曳く水仙日曜日  
日曜の鎌倉の朝冨え返る  
制すもの制さるるものサッカーす  
競るサッカー時計は動く時は減る  
初東風にフオワードトップスピードに乗る

新春の蹴球（サッカー）魂激突す  
高校の新春サッカー観戦す  
獵犬のごとく切り込み初ゴール  
覇を競ひ九州男児サッカーす  
鏑迫り合ひサッカー風はアゲインスト  
監督も夢追ひつづけサッカーす  
覺見え十日戎の寺はそこ（本覚寺）  
初戎乾びし風が吹きにけり  
福笹に当り矢紛れなかりけり  
寶船こんなところに戎笹  
戎笹乾びし風にかつき来ぬ  
初戎がへりの人の漫ろ顔  
寺に入る入口二つ初戎  
福笹の大福帳が風に舞ひ  
紅白の幔幕巡らし初戎  
偽小判出回る世にして初戎  
福笹に吊らるゝもののおもしろや  
真つ赤か十日戎の日暮れ雲  
寒雲の燃え尽きてをり呼ばる間に  
茜果つけふの一切了はらせて  
茜雲一転寒氣募らす雲  
頼朝墓所寒し黙々詣つひと  
寒ム空は承知只々歩くのみ  
大塔宮を目標せる水つ涙  
青木の実神域しんと澄みわたり  
階の冬苔一つ紋章めく  
寒禽の潜めり護良親王廟  
青木の実鎮まる護良親王廟  
親王廟日陰育ちの青木の実  
梅早し紅葉が谷といふところ  
谷戸畑の日向いっぱい猫柳  
猫柳咲いたよ咲いた春よ来い  
冬ざるる平屋ばかりの二階堂  
石たたき二階堂川遡る  
梅を見に人出ぬうちの瑞泉寺  
凍む板碑早梅の白きはだたせ  
冬紅葉階（きざはし）掃ける竹箒  
紅梅の老木にして薄日向  
三椏を讀へるこゑのほのぬくし  
禅林に蓄む三椏なまめかし

三極を見てみて何も始まらぬ  
三極にはてなと首を傾げ佇つ  
三極をじつと眺めて寺を辞す  
冬日差どこもく地藏の堂畳  
肅々と勤行始まる霜柱  
冬桜ほちほち咲けば風の添ふ  
花細かければ近寄り冬さくら  
冬桜淡ければ風相応に  
虫害に枯れし桜と指させる  
勝手口出でしところに冬さくら  
ともすれば風に消え入る冬桜  
梅咲いて方代無心乞ふた寺  
正月寺方代さんに遭えさうな  
冬紅葉削げて鎌倉石の段（きだ）  
大霜にくたんなりぬ庭椿  
梅数輪みすぼらしとも瀟洒とも  
梅数輪日陰を更に寒くする  
わが梅に人寄り来ればそこ離れ  
蓄む梅なんぞ見に来た覚えなし  
一斉に咲く梅よりも人の数  
紅梅のたった五輪に馳せ来し路  
漢らのあぎと突き出し谷戸の梅  
見すごして過ぎし野梅に立ち戻る  
鎌倉の寺から寺へ梅日和  
ささくれてみしは梅が枝わが心  
木の許を離れば梅が咲いていた  
梅の木は距離とつてみる木でありぬ  
寒ければここ程々に次の寺  
梅を見てむつつり歩く只歩く  
はやばやと谷戸は戻り白む梅  
月の谷戸梅一色に尽きてをり  
涸れ川を見て首すくめ寒く行き  
廃寺跡板碑さむざむ佇つてをり  
鎌倉に多き廃寺と凍て板碑  
鎌倉の細路地鴟の渡る路地  
量り売りせる紹興酒初商  
買初めの紹興酒壺ついて来し  
リュックに挿す破魔矢の尖に注ぐ日矢  
段葛破魔矢と破魔矢すれ違ふ  
七福神詣片手に地図もつて

ポンチョ被て弾初めストリートミュージシャン  
旧正の諸鳥啼ける向ひ山  
本山の荒ぶる樹根初日影  
生初めのあらしいとうの香に染まる  
この寺で又遭ふ茶色の毛糸帽  
受験当日早朝祈祷むめの花  
祈ぎ事の数ほど天満宮の梅  
社務所にて若きが求む受験絵馬  
探梅行枳殻垣の横通る  
梅咲いていつも日向の天満宮  
一団のサッカー少年初祓（大塔宮）  
寄り道の官幣中社の梅早し  
しろがねに著莪は睦月の日を返し（妙本寺）  
山椿その懐を一羽発ち  
紅白の盆梅あしらひ小衝立  
厄詣帰りの飯店古老肉（すぶた）食ぶ  
階に見合ひて閻魔詣の客  
階を一斉に攀ず初詣  
銀髪に破魔矢いとよく映えにけり  
誕生日横浜に出て海猫の海  
手本に見す石鹼玉吹きとちりけり  
● HAIKU200501sonos  
紙袋一つ提げ来てお焚上げ  
お焚上げ煙かげるふをなせりけり  
宝船めらめらと燃ゆお焚上げ  
木と藁の焰のいろのお焚上げ  
お焚上げ白くふすぼる福だるま  
輪飾りの炎のまんまるくお焚上げ  
お焚上げ風に紛れて戻りけり  
斯く枯れてカラスザンショウ鳥寄せず  
寒雀来よと雑木の枝空けて  
小鳥小舎ふくら雀の群れ降ろす  
海光の遍照枯枝枯幹に  
冬潮の向きありありと相模灘  
枯篠みな風強ければこの形  
正面の不二に対せり水つ漣  
磯よりの風の間口に鳥賊千せり  
のたうつて若布冬濤頭擡ぐとき  
時化をると突堤叩く石たたき  
寒椿越しに海見ゆ小坪寺

松飾り括り浜小屋とんど待つ  
荒るる海見つゝ睦月の磯日向  
おどり来る冬濤時宗の寺のさき（海前寺）  
初吟行鉛筆もて指す洋上富士  
正月の鳶丹沢と肩竝べ  
丹沢に雪うなばらにうねる浪  
椿落つ小坪の蟹の横這い径  
逗子消防第七分団とんど守る  
磯山に枯れて日を浴む大接骨木  
冬萌を踏んで小坪の磯鴉  
身の幅の小坪の小径東風と抜け  
アロエ咲く小坪の坂を郵便夫  
東風吹く中あみだくじめく小坪の路地  
雲菟むところ三日の風の不二  
舟小屋の飾左義長待ちみたり  
初東風に辯財天の旗の鳴る  
おてんと様通して畑の梅咲ける  
寒鯉は黎明の色つと動く  
初景色近場の不二の見ゆる山  
成人の日も過ぎ雨滴結ぶ木々  
採血にごてごて着込む腕まくる  
朝よりの雨の左義長案ぜられ  
左義長を渚に待てる水っ漬  
これしきの雨ものかはとんど燃ゆ  
どんど火にわが家の飾一燃えに  
袋提げ人集ひ来るとんど焼  
爆ず竹の鈿相搏つとんど焼  
飾焚き火の壁そこにイつごとし  
飾焚き手渡すものつつましく  
風変りとおんどの火の粉浴びにけり  
左義長に遅れて袋提げ来る者  
妻の首すくめどほしよ爆竹に  
爆竹の今か今かがバンと鳴る  
風もてぐすひいて待ちをりとんど焼  
選ばれてとおんどの火懸け小学生  
左義長の係に手渡す神のもの  
風下モを避けてとおんどの輪の外れ  
燃え足らぬ左義長なれば海風来  
左義長の組み方念が入りみたり  
左義長の火を掻き長靴履きのひと

左義長の人垣爆竹音に揺れ  
とんど火を囲む人の輪三箇所に  
顔そむけどほしとおんどの火の壁に  
福達磨燃ゆる火中に何念ず  
福だるまあはれ煙と化す深空  
崩れざるところもやがてとんど焼  
マンションの人も加はり飾焚き  
眼が痒くなりて左義長果つるかな  
自転車の荷台に飾左義長へ  
遠の浜さいと見てゐる鴉かな  
左義長へ消防団員トビ担ぎ  
左義長の火懸けの役は千支の子ら  
紙と木と祭の國のさいと焼  
上着脱げば左義長の灰零れけり  
左義長の煙浜這ひて海上へ  
左義長の煙浴ぶ男の子顔むつと  
左義長の藁灰渚に張りつきて  
渚までまろび来るなりさいとの灰  
消防夫けふは燃やす日どんど焼き  
鳶口が何本も出てさいと焼き  
竹鳴るは節破る音さいと焼き  
確信はなけれどそれは四十雀  
四十雀の白と灰色ちらちらす  
団子に柄つけし形に四十雀  
四十雀止まるその枝にすぐ飽きて  
四十雀来さうな日なり庭覗く  
寒禽の立去るときこのゑでありぬ  
もう一羽遅れ貌出す梅の枝  
よく見れば番でありぬ寒の禽  
一立木賑はず寒の雨滴かな  
笹子来と妻が覗きて吾が覗く  
ミニチュアの電車住宅初景色  
灌木の結ぶ雨滴を見て睦月  
寒の内入院し居ると角の婆  
冬萌えのところどころに雨の浜  
酒弱くなりし朋どち初吟行  
枯山に腐葉土作りの男かな  
櫟落葉選りては腐葉土作りかな  
脂肪ある桜はむかず腐葉土に  
細き音に何促すや連れの鴨

雨の午後ホットカルピスなど飲んで  
月旦評ゆき過ぎと知る筆寒し  
評言を選び硝子のごとき人  
紹興酒の空甕梅の投げ入れに  
買置き煙草の尽きて寒の内  
徳利を盆に寒九の廚より  
笑初め地獄太夫の下絵かな（国芳 曉斎展）  
しやりかうべばらばら寒の曉斎展  
骸骨の相撲に興じ新春展  
太夫と骸骨美醜の応酬新春展  
国芳の野次着膨れの身に沁むよ  
はつはるの国芳戯れ画漫画風  
御用始の東京に出て並天井  
寒木瓜は雨にまみれてなほ赤く  
年の鐘撞くにも人間模様かな  
常磐木に目が浮ついて初詣  
大寒の雨滴飛ばして鶉翔てり  
鶉が来て啄む雨の実南天  
ぶるといふ音して鶉に鶉の来る  
浦風や椿見てゐる堂日向  
蟹の墓正月花に松が枝も  
● HAIKU200501son06  
真水うまし舌を鳴らせば寒の音  
水差しに水滴ちゆける音も寒  
酷寒と蛇口ひねればさう聞こゆ  
庭石の五、六あるきり寒日向  
余談して焙り干し諸硬くなる  
成人の日の諸星の華やげる  
旧正の星それぞれの光り方  
寒明けとふんぎりつけるやうに云ふ  
銭湯の淑気放てる不二あふぐ  
独り酌む目にほうれん草寒の内  
雲にまだ夕栄のこる良寛忌  
ヤットウと武道始の警察署  
庭に出づこゑの弾みて寒日向  
ポストまで日向を選びて寒日和  
口中に砂糖の甘味寒日和  
花保ちのよき花ばかり寒の墓地  
猫がまだ己押さへて寒の日々  
伸ばしきる猫のずん胴寒日向

番で来る目白を心祝ひとす  
日向ぼこよいしよと起てば目がさまよひ  
全うに冬日の差さぬ庭虚ろ  
寒日和猫の目線とぶつかりぬ  
癩つよき大き鳥来る寒日向  
猛鴟のこゑ聞き流し校正す  
臍まがりラジオ聴きをり寒日向  
庭石に上擦つて差す冬日かな  
冬の蠅見直す素早き翅使ひ  
気のつけば寒中の影つきつきり  
庭石をあたたまむ冬日雀は来ず  
寒の日に透けて水性ボールペン  
泥亀公園枯木半身夕栄えて  
寒の空途中まで来て豹変す  
さむざむとも暮るるかや街の樹々  
乾燥諸焙れば月（ルナ）の隕石孔（クレーター）  
寒晴れの見上げて猫の爪研ぐ木  
寒晴れの止まったままの雲を見て  
寒晴れの幹照りに照る落葉樹  
寒晴れの棘のある木と棘なき木  
寒の空瞳孔絞るごと戻る  
ラジオ川柳聞き大寒を引きこもる  
大寒のラジオは皮剥（はげ）を取り上げて  
冴ゆる日の紙面に鳥の影瞬く  
大寒のあんかけうどんふうふう吹く  
痩せ猫の背中ごとごと冬三日月  
海象（セイウチ）のごとき雲出て大寒暮る  
何たること大寒の酒切らすとは（妻へ）  
大寒の妻の提げくる一升瓶  
陶器のごと空に置きたる寒の雲  
大寒の現れては消ゆる白湯の煙  
大寒を忘れてゐたり日向道  
寒晴れの雲ある刻と無き刻と  
寒晴れの形よろしきちぎれ雲  
寒中を咲き通す花物好きや  
大寒にびくともせざりさるすべり  
気のせいか年々薄き冠雪不二  
雑煮餅幾つと問はれ一つ半  
洗顔の蛇口震えて寒の声  
硬直し国道ゆけば寒の声

寒月にあぎと撫ずればとげとげし  
大寒の夜を閉づビロード地のカーテン  
大寒の緑茶を菓のごと戴く  
大寒の長き残照雲受けて  
寒茜己に返る木々の梢  
大寒の薄黄尽くして空燃ゆる  
大寒の玻璃通す陽にうたた寝す  
乾燥諸妻の手のあく暇待ちて  
唯寒きだけの二月の俳誌来て  
二月号雪を被りし牡丹の絵  
水仙の香を包みたる新聞紙  
大寒のサボテン咲けるサンルーム  
大寒の空昏れゆくか紹興酒  
大寒の昏れゆく空を一亘り  
川に目を空に目を遣り寒一色  
暮れて来し雑木の空の寒一色  
大寒の陰しき空に日の果てぬ  
大寒と思へぬ雲の軽さかな  
大寒の動かぬ雲を透く陽かな  
大寒の日の退き際の迅きこと  
ぬくき日に葉を忘れ咲く冬ざくら  
大寒のでこずり着込む常古着  
敗荷のごとき起居を寒の内  
大寒の目を上げ下げし樹上樹下  
大寒のつんつるの貌鴉に向け  
たまさかの不二見ゆ町の枯木空  
大寒を突つ立ち日浴む木々の群  
大寒を一日過ぎし空のあを  
松を松たらしめ寒の曙光す  
寒暁の新聞取りてすごすご入る  
寒暁の新聞強（こわ）し取り落とす  
大寒の空を閑居の玻璃越しに  
寒晴れに正体晒すものばかり  
自然薯のハナガサそこを掘れとこゑ（ハナガサⅡ  
さく果）  
自然薯のハナガサ枯るゝものの裡  
自然薯の土より貰ふ味に癖  
痩せ土にゆっくり育つ自然薯（いも）が佳し  
自然薯の髭を焙りてとろろ汁  
さう云へば受験期曇天埋む雲

おお寒むと躰こすりて起き出しぬ  
寝床より飛び出すさまは寒雀  
電気毛布先づ強そのあと適温に  
電気毛布スイッチ切つてさて寝ねむ  
電気毛布入れぬ温度に斑のあり  
鳩膨る大寒そこに見るごとし  
ふくらはぎ其処に爪先当てあたたむ  
焼諸屋街に出没きのふけふ  
呟いて海鼠に独り合点酒  
寒海苔を肴に酒はまだ飲むぞ  
うはづつて大寒の酒「もう半合」  
とんとんと石段上り札納  
行先の急にふさがる冬日影  
めつぽふな青空十日戎の鶯  
大寒の日に額あたたためてゆく図書館  
枯るる夜のラジオ放送おぼんです  
大寒の並木針なす浅黄空  
マフラーの柄見つ車中東京まで  
頤撫でて髯が気になる暖房車  
冬波の緑湛えて厩橋  
雀頭上をひゅんひゅん鶯替日和かな（亀戸天満宮）  
藤棚の繕ひ鶯替日和にて  
木鶯皆こち向き木鶯納め箱  
大島紬でんと着込みて初天神  
鼈甲の根付も売れり初天神  
鶯替や破格の鶯が先づ売れて  
ひょうきんな目をした鶯の替えらるる  
懐に滑り込ませて木彫鶯  
華やぎは赤と緑の木彫り鶯  
境内を時計廻りに初天神  
太鼓橋藤の名所の枯れ一望  
菅公にゆかりのもろもろ初天神  
太鼓橋こぞりわたれる初天神  
薬吹かる紅梅の名は紅千鳥  
鶯替の列の後尾はここですか  
マスクして鶯替待ちの列に入る  
鶯替待つ列の後尾にそと躡きぬ  
これみんな鶯替を待つ人の列  
禿頭鶯を替えむとやつて来ぬ  
大木の樟の真みどり初天神

船橋屋出店張りだす初天神  
紅梅に鳥居を配し初天神  
くねくねと藤の老木初天神  
納め鷺大小よくも並べたり  
納め鷺大の側には大の鷺  
鷺の目が集まってをり納め箱  
額冴ゆ齡五歳の菅公像  
初天神金の鈴引き負けじ  
寒最中日を浴みてをり絵馬の鶏  
鷺の絵馬その鷺替えの日なりけり  
携帯の懐中鷺も売られをり  
控えゐる巫女一並び天神花  
初天神一寸気を引く干柿屋  
新紙幣（さつ）にて木彫の鷺の初穂料  
文鎮の神牛購ふ初天神  
鷺替え待つ頭もてかぞふる列の人  
人の頭の団子並びに鷺替待つ  
藤は枯れいま梅の季初天神  
鷺替に間に合ふ梅の一分咲  
臘梅の淡光太助燈籠に（塩原太助石燈籠）  
ボウボウと枯れ木国産マッチの碑（国産マッチ創  
始者 清水誠の碑）  
横十間川（よこじゅっけんがわ）に日が射し芦枯  
らす  
横十間川の芦叢枯れきりて  
藤棚の今は枯れどき船橋屋  
初天神戻りの藤いろ紙袋  
葛餅と木鷺の包み提げて帰途  
ひやかしに鼈甲細工屋初天神  
鷺替の戻りがてらをうなぎ屋に  
うなぎ屋の座敷にあがる皮ブーツ  
梅遅し湯島天神女坂  
初商女坂下味噌漬屋  
透けて見ゆ寒梅越しに女坂（湯島天満宮）  
女坂ゆるゆるのぼり初天神  
戻り来て黒龍のごと梅の幹  
三段の盆梅の鉢初天神  
梅が枝の先つぼのうへ天神社  
湯島天神女坂下うぐひす来  
初天神女坂ゆく梅の坂

初天神女坂下易者ゐて  
湯島天神背高木鷺の梅文様  
通り抜け通路幾つも初天神  
幼な等の書を貼り出して初天神  
寒日向実盛坂を黙々下る  
水つ凍神田明神詣でけり  
青木の実つやつや銭形平次の碑（神田明神）  
明神裏梅の稲荷の幾社  
おみくじロボット神田囃子に浮かれつゝ  
聖堂の楷老大樹枯れ極む  
竹箒五本枯れ枯れ学問所（湯島聖堂）  
地を搏つ音聞きつけ別の椿落つ  
学問所裏のふらここ枯るる中  
回廊の屋根にも落葉学問所  
湯島聖堂葉が落つ堀に回廊に  
携帯電話（けいたい）かけ金魚のやうに避けゆく  
者  
坂なりに枯木の高むニコライ堂  
ニコライ堂囲む枯木の梢明り  
湯島の鷺亀戸の鷺戴き来  
賞与に縁切れし身寄するショーウインドウ  
手を出せば鳩の駆け寄る七五三  
七五三境内痩せて木の根っこ  
● HAIKU200502sonoi  
初曆十日も経てば繰り忘れ  
芦原の総枯れ中途半端なし  
天を突くメタセコイヤのことん枯れ  
左義長の煙の薄黄に空くすむ  
俎に煮らるるまへの寒蜩  
寒蜩少し音を上げ煮らるるか  
笑むごとく寒の生水湧いてをり  
酷寒の夜を起きあても仕方なし  
極寒の深夜放送ラジオ寄席  
深夜放送志ん生のこゑ凍て割れて  
はつはるや菅原文太の若者観  
志望校八つまで書かる受験絵馬  
志望校一辺倒の受験絵馬  
山妻に謂はれるまゝに口雪ぐ  
寒ければとんがり勝ちに売り言葉  
節分の待たるる日々でありにけり

垂線を新たに引きて椿落つ  
もくれんの冬芽日を受けやや眩し  
片づけ魔なじりしことは柵に上げ  
鹿のごと度忘れ思ひ出す目つき  
頭を叩き思ひ出すこと初笑  
枯れを統べ則天去私のメタセコイヤ  
度忘れに助け舟出すみかんの座  
寒夜起ち暫し尿（しと）出す遊（すき）びごと  
種痘跡六十余年経し腕  
走り根の瘤兀々と寒詣  
寒欄のこれはお手柄大蕾  
寒欄の瑞々しくて暗紫色  
風邪の身の何處かひくひく起ち上がる  
迷ひなき起床が凡て寒払暁  
凍る夜を膝さすりつゝ起きてゐる  
膝さすり寒さをこそぎ落とす妻  
観梅の風強ければ足勇む  
風邪ひきし証はずしり重き腰  
手にとりし萎びし蜜柑灯の貧し  
揚げものの蒜に芯ありて寒  
熱爛を遣れば街燈点りゐし  
傷つけんばかりに梅が枝青空に  
寒梅の枝の抉れる青き空  
蒜を油で揚げて寒の酒  
形見分けのごとく配られ熟れみかん  
押せば凹む終のみかんの面白や  
斯く熟れて重しみかんのなめし皮  
掌に触れてみかんのなめし皮  
こまごまと灯弾く食後の熟れ蜜柑  
界限で一、二の容姿石屋の梅（小松屋石材店）  
亡き主の目利きのよくて石屋の梅  
通るたび主偲んで石屋の梅  
たまに干す布団に冬日載り呉れず  
伊予柑の出番とばかり店頭に  
四囲一切枯木真直ぐ歩みゆく  
少しづゝ日高く枯木ばかりの日々  
日は雲を抜けて枯木の淋しめば  
雲抜けて日差し枯木にぱつと射す  
莫迦にせしその湯たんぼが恋しき夜  
湯たんぼの復活聞くや嬉しけれ

庭に出て枯木の上の雲居月  
氷るもの見たく訪ひし池に鴨  
鼻紙を使ふ妻見てさては風邪  
電気毛布爪先までは温めずよ  
干柿や今月一日残すのみ  
寒き家居干柿のごと縮込まり  
干柿の種子が出て来てこの薄さ  
我がたつき何に依り立つ冬の虹  
声のんで唯寒行の只中に  
如月の簡に過ぎたる見舞状  
寒天のいつもながらに明くる彩  
寒暁のいつもながらに明くる空  
白み来る空のあはひを北風駆けて  
わが好む寒暁のいろ樹の皮に  
寒暁の雲一掃の天つ風  
明けの空そそる枯木と星と風  
空の端といふがありあり寒払暁  
寒暁の雑木を研げる星と風  
空の端の浅黄に滲む氷点下  
寒茜までは間のある星と月  
心字池隅から隅まで氷るとは  
ぴしぴしと枯木打つ風本ぐもり  
布団いま面蒼白本ぐもり  
お月さま坐り給へる芒のうへ  
ドアの鍵穴妻の臍めき暖かし  
夜蟬啼くは後悔に似て忸怩たり  
● HAIKU200504sonoi  
金沢文庫  
咲き溢る桜の幅の門前みち  
花人の足腰叩き健在と  
道にちる落花と谿にちる落花  
花を観る高さ肝心端山みち  
花霞それに花眼も加はりて  
妙齢を早過ぎ端山のやぶれ傘  
端山より我が家へ移すやぶれ傘  
春の草ちぎり投げ上ぐ子の三人（みたり）  
青き踏み脚力おぼつかなき齡  
じゆくじゆく沈む足許芹を摘む  
水底の足跡窪にひそむ蝌蚪  
山の地味我がものとしてすみれ草

花描く眼花と画帖を行き来して  
枝垂桜けふの日色をうち交へ  
大石の昼行燈にさくらは似  
日の色の甘茶浴びけり灌仏は  
鯉に伍し亀の泳げる仏生会  
前山を正面に据え花筵  
この谿を吉野と思ひ花見酒  
傾ける日は幹を見て花山中  
花の横木の芽もぞもぞしてをれり  
あらあらと云ふ間に殖ゆるすみれ草  
山の道乾きて鳴れりすみれ草  
踏みゆけばぼこぼこ鳴れり齋道  
池一つ漣湛え花御堂  
花御堂人を集めてをりにけり  
づかと寄る四辺の一つ花御堂  
住職は頑固なお人紫荊  
花祭持回りとす鄙の寺  
順番が巡り来りて五香水  
花見んと来しリハビリに気散じに  
花の山東を向いて西向いて  
花人の足どりとなる称名寺  
林間に風の道ありちるさくら  
花筵蟻が上つて来たりけり  
花明り透けに透けたる仁王門  
酔どれのそれぞれと散る花を  
がらがらを押してきよろきよろ弥生の子  
山風の吹き傷めたる花の枝  
太鼓橋統べて全き花の景  
荒つぽき風が吹くなり花は九分  
花奪ふ風に尻尾のあるごとし  
翻る夜風の見ゆる花雪洞  
大風に吹き散る花と雪洞と  
花明り越しに小波明りかな  
発つ鳥の羽音を残す花懐  
朝桜禽かい潜りかい潜り  
初桜ほころぶ花に白日差  
日曜画家絵筆に含ます花のいろ  
夜ざくらの軽さ浮雲ながれをり（称名寺夜桜）  
夜ざくらの下ゆく道のいや白し  
夜ざくらを口あんぐりと開けてみる

夜ざくらを仰げる首のぐらぐらと  
大風に夜ざくら転ぶこともなし  
夜ざくらを弄ぶ風尽きもせず  
夜ざくらの浮かれ出でたる夫婦もの  
夜桜の雪洞高くここ低く  
たんたんと咲く夜ざくらに飛行音  
ゆらゆらと団子花めく夜のさくら  
夜ざくらや雲入れ替はる風の空  
大方は咲ける桜とふりあふぐ  
夜桜の雪洞ここから称名寺  
昼からの風衰えぬ夜桜狩  
吹き抜ける風小気味よき夜桜狩  
ある時は吹雪くが如く春鶯（平潟湾）  
一斉に発つ春鶯もれもなし  
半袖で砂場遊びの弥生の子  
原色のふらここの板赤青黄  
柳の糸すらり簡略極めけり  
花の下ベルのよく鳴る三輪車  
舟小屋の間抜ける風干若布  
一湾に舞ひては降りる春鶯  
夕照橋干潟ぶんぶん匂ふかな  
岩壁沿ひ夏潮の小さく引く  
牡蠣殻に早夏潮のひた押しに  
十日程花遅れたり建長寺  
石畳真直ぐ伸びて花白し  
三椏の呆け尽くしぬ一塔頭  
この度も訪へる鎌倉紫木蓮  
大藁屋枝垂桜も膨らみて  
ゆすら咲き万葉仮名の菓子処  
初花のこよなき白と石畳  
いっぽんの初桜山展きけり  
建長寺 回春院  
諸葛菜巡らせ尼ぜの起居かな  
藁葺の鐘楼蝶を招きたり  
山畑の夕冷帯びぬ諸葛菜  
くろぐろと鯉の頭の上水馬  
塔頭は階（きざはし）の上花三椏  
おのづから生えしと指せる諸葛菜  
ここ最も奥まる塔頭濃山吹  
碑の丈の高さに諸葛菜

鎌倉の歩き始めの紫木蓮  
下駄履の作務僧春筍抱えくる  
流るるも瀬に止まるも沢椿  
空切つて鳥の横腹木の芽谿  
先っぽの花の淡々初ざくら  
山椿零れ放題幼稚園  
本堂は芽木に囲まれ甘茶寺  
洪鐘（おおがね）に飛花の当たりて落つところ  
鮮しき椿を拾ふ切通し  
塔頭の椿打ちたり石畳  
椿落ち載りそこねたる石畳  
真上より覗いて足れりチューリップ  
夕ずけばここまですぼむチューリップ  
はこべ咲く路地のここまで海の風  
町川に載る日輪と花明り  
携帯電話受く足許につくしんぼ  
一寸口尖らせて云ふスイトピー  
茹であげてこれっぱかりの芹となる  
エナメルの靴先に飛花踊る道  
塵少し交えて花の風が吹く  
公園に二つの木馬朝ざくら  
花少し遅るゝ公園桜かな  
花は花子供はこども滑り台  
滑る子の眼中になし花吹雪  
花冷えの駅に点字の運賃表  
沿線の花に急かされゆくごとし  
突風を誘ひて花は酣に  
先づこんなところ櫂の芽吹きとは  
櫂の芽まだ早ければくすみあて  
ばたばたと玻璃打ち花の埃風  
郁李や早め早めとなる起居  
見積の話しながら花ミモザ  
● HAIKU200504sono2  
苺食うべ考え事は別にあり  
苺食べ了へし匙置き硝子の音  
苺潰す硝子の皿は乳白色  
同窓会は昨日のことよ大朝寝  
匙よりもずんと大きな苺であり  
土筆の吐く煙に妻の怯みもす  
とびつきり遠くにとべる飛花一つ

くろもじの値札に唸る植木市  
山妻の買う気そそれり山椒苗  
這ひあがる亀の濡れづめ仏生会  
厨棚摘み来し土筆寝かせあり  
振り向いて遠の桜をたぐり寄す  
吾があとを継いで妻また飛花追ふ眼  
球根五箇百円也のチューリップ  
花もそれなり五箇百円のチューリップ  
馬車道に衆目集むチューリップ  
まぼろしの嘗ての干潟ゴム草履  
気に入りは唇いろのチューリップ  
春落葉地名に残る舟溜（富岡八幡宮）  
一升瓶真中に据えて花の宴（鳥見塚）  
花見衆持ち込む小ぶりの瓦斯ボンベ  
桜狩唸る屋台のバッテリー  
落花見て淋しくなれば膝抱ふ  
空らのバスバス停通過花の昼  
夜ざくらに酔ふて地に置くコップ酒  
接収地名残の桜咲き出せり  
花見酒酔いのすすめば嫁談義  
地に展ぐ空の青さの花筵  
飛花つとつとと奔れり筵の上  
諸注意の呼び掛けお花見県警車  
靴脱げる処が玄関花筵  
走り根の出っ張り避けて花筵  
花埃立てて花人その犬も  
花人とその犬飛花を浴びゆけり  
飛花浴びて熱演つづく一輪車  
遠ざかる船を呑み込む春霞  
吾が視野の真中にかかる春の船  
タンカーのひねもすのたり春の湾  
墓のうへ痩せ古柿の柿若葉（直木三十五の墓）  
ぼうたんの年寄りたれば人の丈  
林間の風に濛ふ花見人  
夜遊びの始め雅の桜より  
夜ざくらを遠ざかりゆく雲一朵  
音なさぬ飛花に侘びしき募りけり  
鯉撥ねし音の鎮まる若草に  
石組の石を押すなり花筏  
大熊手湯屋番台のその上に

さみどりの芽木に紛れず山桜  
了る花沈めて山のうすぼんやり  
夕風の吹き納まりぬ花の山  
花房を花房が押す花あらし  
里山の風うち返す花の尾根  
日永さの日の差す湯屋の脱衣籠  
出づ人に先を譲りて湯屋暖簾  
地味よくて緋桃咲かするなぞえ畑  
シロモジといふ木のありぬ山遊び  
風任せ山の枝垂桜（しだれ）は手を入れず  
海風のここまで大島櫻かな  
震えゐる彼岸桜の花小振り  
さざめける大島桜は浪の白  
谷越えの山風見える山桜  
花返す風が起りて尾根つづき  
戦ぎつつ萌ゆる樺の芽櫟の芽  
花季の宿木不粋と云ふ勿れ  
耕しの畑の四方に桃低し  
蝌蚪容れて空缶朽葉臭き水  
行き来して源平桃の何處撮らん  
尾根に沿ひ廻る大風山桜  
桜吹き上げて里山越ゆる風  
山風のぶちあたりては花揺する  
花嵐尾根を伝ひて風は逃げ  
土筆摘む母の手覗き込むをみな  
花のいろ一味違ふ隣谷  
櫟の花序垂れ初めぼつぼつ芽吹く山  
紫木蓮呆けて花は大雑把  
つくしんぼいやにある処無き処  
白靴のその先地獄の釜の蓋  
群れ成さぬ杉菜は見るに値せず  
群れ成さぬ杉菜を軽々しく見をり  
問はれてもちんぷんかんぷん若葉の木  
見栄えよく一列植えのチューリップ  
妻共々昼の土筆の袴取り  
接收の月日を苔づく桜見て  
奇禍に遭ふ蜥蜴に鈍く日の差せり  
一人入る百禽囀る森の奥  
桜見て旅塵を落とす磧の湯  
長官邸苔づく桜何を見し（横須賀海軍鎮守府）

汐風にゆくてゆくての夕桜  
くろもじの宿す雨滴を払ふ南風  
鉾泉湯あとから効いて花の雨  
窓開けゐて吾も若葉の湿りもつ  
この道の先達あらかた逝き杉菜  
一瑕無き桜なりしがたうたう降る  
降られてはためらひゐたる桜花  
山吹を打ちて雨脚強まり来  
雨癖のこれからつくよ著莪の空  
くろもじ若葉雨降ってよし晴れてよし  
花散らしの雨がたうたうやって来ぬ  
いちにち雨心に烟る花を観て  
昨日一昨日出かけてよかった花の雨  
晴るゝ間を見歩き悔なし花の雨  
忙しきよ花よ蝶よと俳諧は  
胡瓜苗けふ雨なれば明日植ゑん  
● HAIKU200504son03  
おん母の筍飯に食旺ん  
残り花こぼれ尽きざる寺領の閑  
貌あおる木の芽谿風老いまだし  
花筏風に破れて仕舞ひけり  
俳諧の深みにはまる紫荊  
大荒れの風にポピーの首垂れて  
残り花夕づくほどに風荒れて  
からすのゑんどう燈台までの道長し  
寺町の空のにごれる紫荊  
飛花舞はず風の一変フォルテッシモ  
花過ぎて花咲くまへと同じ空  
花過ぎの風の行方はもう追はず  
花競ふ春ともなりて鉢殖やす  
ひょうたんの苗をこかして春疾風  
いつの間に殖えゐる鉢や日永し  
こぼす砂糖捨てんとするに庭の蟻  
市が立ち春の苗木に散財す  
植木市立つや神社を間借りして  
春の旅ことし見送り苗木買ふ  
妻が植ゑてクロバナロウバイ実生の芽  
立読みの春の園芸雑誌かな  
あぢさゐの新種いろいろ世につれて  
アネモネやいろいろあれど合はぬ鉢

花粉症マスクといふはとんがりて  
愚図ついで降る日曇る日貝母咲く  
新築の家成りレッドロビン垣(カナメモチの一種)  
桜薬もて雨水の筋つくる  
植うるなら若木の裡の八重櫻  
その廻り巡りて桜まんまるし  
花一角缺け出ししどろもどろかな  
空耳に盈ち盈つ花のせりふかな  
もみぢ葉にさも似て花屑零せし掌  
風絶えて花の納まる容かな  
花屑を零して別れ惜しみけり  
眺望の出来過ぎてをり花の谿  
日は闌けに闌けて悶々八重櫻  
天塞ぐばかり悶々八重櫻  
湘子逝く馬酔木も花の鉦打ちて  
花屑にゑくぼ生まるゝ午の風  
一色に地べた彩どる桜薬  
春宵の蘭花譜繰れば生まる風  
土いじり了へてつくづく侘しき掌  
球根を植え込みし掌の皺みぬて  
ふらここの次は砂場に長あそび  
花散らし辛夷精根尽きしさま  
なめくじり昨夜歩きしか銀の道  
馬鹿晴れの潮吹ばかり穫れ干潟  
薬踏んでありとしもなき春愁ひ  
春愁ふ吾が骨格を医師と見て(レントゲン写真)  
その一枝空を蹴上げて連翹は  
病人に個室大部屋春逝けり  
花了へし海棠の空愚図つける  
緋つつじに岩相あらはなる山麓  
石楠花の透さざるもの無かりけり  
石楠花に五臓六腑を透かれたり  
石楠花に心の臍病む身の透くや  
遠目にも桃と知らるる一戸あり  
緋つつじを植え込み了へし掌の乾ぶ  
緋つつじと鳳凰堂を映す水  
春宵の手酌馴れたるひとり酒  
風五月遊び来し子の砂落とす  
花寝る牡丹を風のよるめかす  
道端に放り出しあり草刈鎌

気紛れな風に吹き戻さる飛花も  
ぐい呑の手重りゆかし春の宵  
落椿抛り込みあり焚火跡  
八重櫻足懈く道戻りけり  
夕風に揉まるる桜ここから帰路  
石楠花の真盛りを過ぎ紅からず  
しゃぼん玉掌に受けこそばゆし  
茎立やこの頃多き物忘れ  
茎立の登りつめたる花薄黄  
春昼の醤油の沁みるおかか飯  
八重桜綻ばす日のぼつかばか  
土古ぶ鉢を返せば太みみず  
ゆらゆらと河原撫子水明り  
句鳥お経の如く読み下し  
まっただうな実つけぬまるめろ咲き出せり  
代蛙一雨あってもよささうな  
寝返りて春曉の骨鳴らしけり  
つれなくも風素通りす残り花  
鉢植えのサフィニアペチュニア殖えるにや  
妹が姉に伍し吹くしゃぼん玉  
ぶるぶると俵形してしゃぼん玉  
突き出せる子の掌に大破しゃぼん玉  
賑やかに牡丹桜の花吊る茎  
姉真似て妹飛花に差し出す掌  
介助者も牡丹桜の日に浴す  
牡丹植う鉢そのまゝにして昼餉  
落花拾ふ即ち己慈しむ  
八重櫻曇天塞ぐ花の嵩  
このところ曇りづくめの八重櫻  
しろしろと牡丹桜の道乾く  
ふくよかさ牡丹桜と云ひつべし  
● HAIKU200504sono4  
ざり落ちし路肩もろとも濃山吹  
くろぐろと桜薬降る雨後の土  
小肥りな躰を伸ばしなめくじり  
チューリップ紅経て萎え花黝みたる  
仏生会かぐるき鯉の頭の寄り来  
実山椒これは雌かと苗木指し  
実山椒これ葉山椒その苗木

腰の丈妻の所望の葉山椒  
紫蘇苗買ふ葉数多きが決め手なり  
嗅いでみてこれと決めたる青紫蘇苗  
万全を期し買ふ苗木一つは予備  
熊のごと往き来し苗木を物色す  
購買欲くすぐる苗木は猫柳  
彩どりを考え春植えグラジオラス  
球根のよしあし見当つけて買ふ  
檸檬樹下いちめん茶色木の芽屑  
戻り妻五月蠅（さばえ）を入れて仕舞ひけり  
家居して五月の蠅の入り初め  
せせる蠅そこは網戸よ出でられず  
厨・居間五月蠅（さばえ）一匹追ひかけて  
その翅音虻と思へば五月蠅（さばえ）なり  
玻璃折々叩く五月蠅（さばえ）と家居して  
踏青の妻の大敵紫外線  
植木市薔薇前にして施肥講釈  
トネリコの育苗講釈植木市  
迷ひ込む五月蠅の行方何處なる  
迷ひ蠅魚を焼けば其処へ来る  
曲がる術知らぬ五月の蠅なりけり  
君子蘭立派に咲けば讚へたき  
芍薬の蕾弾けば固し固し  
茎立や素なる生活（たつき）にいつか慣れ  
桜愛づ頭を東塔の空に向け  
春疾風それに倍する花吹雪  
坪花壇苗木植えどき挿し芽どき  
桜苗木何處に植えよか庭手狭  
屋上に屋架す庭木植えにけり  
嫣然と牡丹桜の苗木花  
球根植う深さ物差し持ち出して  
胡瓜苗育むための培養土  
自転車の荷台に胡瓜の培養土  
曇天に鬱勃として八重櫻  
牡丹は絶頂極め主は入院中  
盛りの牡丹危惧する程の雨でなし  
雨に土馴染ませ挿し芽の床作り  
我が家のいの一の沙羅若葉  
球根に土被せやり土ぼこり  
花種をみんな蒔き了ふ掌が淋し

花吹雪いちどにそんな急かずとも  
芍薬の嫩葉を打ちて雨をちこち  
夫婦もの桜のうしろに廻り込み  
沖は今何の漁季か浜大根  
日和のこゑ仕上がり近き千若布  
山吹に響（とよも）しよどみなき山水  
糸柳水鏡して川ほとり  
一雨ごと春の遠のく山明り  
バスで行きその日帰りの桜狩  
小干潟に朝夕ひたにひたに寄す  
泥靴をそこらの酸葉もて拭ふ  
御首（みしるし）を風に撲たれしチューリップ  
落花風のまにまに東奔西走す  
根芹まで最短距離の畦をゆく  
高みに咲く枝垂桜を遠まきに  
一八の白きに雨の家居かな  
君子蘭咲けば持ち出す庭表  
頑なに口閉じ雨のチューリップ  
衝立の向うよりこゑつつじ寺  
牡丹の藁まで濡れて雨上がり  
一盛りこれより雨の牡丹かな  
弾け初む雨の牡丹もまたよかり  
雨の日に菊の挿し芽の園芸書  
けふの雨もつてぼうたん総崩れ  
旅に得しみめよき石と桜貝  
しろしろと物日の一八咲きにけり  
牡丹の獅子奮迅に風絶えず  
二歩三歩至近にしたる紅牡丹  
蛇の消ゆ草のそこだけ薄びかり  
水際いつも家鴨の居りて寺日永  
蜥蜴消ゆ刹那響も飛ぶごとし  
牡丹に牡丹気圧され咲く苔庭  
大寺の広庭つつじ恍とあり  
桜薬降らせて雨の粗くなる  
桜薬降る只中に入り楮顔  
半島のこの空豆を箸にせよ  
十葉に著我に雨音身ぢかなる  
生りもののくさぐさ並べ植木市  
一日ごと彩を蓄へ谷戸桜  
春荒れに一杖欲しき翁草

徒然なるままにけふ過ぐ翁草  
定年後の日はいや永し翁草  
若葉越え若葉の谿に蝶沈む  
石楠花の烈火訪ふたる山荘に  
満天星の花つきよき年幸あらな  
ウオーキング若葉曇りを妻の伴  
一病と道中ことしの花に遇ふ  
あけすけに見ゆ藤棚を藤浪馳せ  
軒先に藤棚真横一文字  
庭の贅鉄砲百合を瑠璃鉢に  
茄子・胡瓜苗植え了へて手がかさかさ  
毛虫ひそかに事運びしが発覚す  
発覚即処刑柩の垣毛虫  
毛虫出づこと触れ回る遇ふ人毎  
去年毛虫山茶花垣を喰へば先づ  
毛虫つくこと筒抜けに生け垣越し  
蚊いぶし吸ひ脚をじたばたじたばた蚊  
焚火守焚火ぼこりを眉につけ

● HAIKU200505sonoi

市民農園自然生作るへそ曲がり  
市民農園じゃがいも取り組み易きとて  
芋畑の土の匂ひに蟻の憑く  
みみず棲むことが上出来腐葉土と  
こきまぜて自家製腐葉土太みみず  
腐葉土作り大学構内落葉もて  
太陽に真近き丘のレタス畑  
腕組みし男見下ろすレタスの出来  
柳の下ギター独奏大道芸  
葉ざくらの野毛を経巡る大道芸  
花了へし凡庸な町車窓より  
桜葉散り込む運河風抜けり  
萬若葉吹く風クラブ10カラット  
競馬あり大道芸あり野毛五月  
大道芸見ながら路地店心太  
伊勢佐木町ブルース薄着のソックリさん  
五月空中国雑伎足業芸  
大道芸背伸びしてみる五月晴れ  
古扇子開閉大道将棋かな  
アコ響かせゴッドファーザー南風の街  
注文を聞きつつピエロの風船芸

ミドリガメ齡取る毎に獐猛に  
吾見上げ亀の子鼻をツンと立て  
回遊のどれがイシガメどれがクサガメ  
図説して教育園の四十雀（目黒 自然教育園）  
地にも鴉森は鴉の営巢期  
鴉交る森を埋めて椎密集  
子育ての森の鴉を横目で見  
胡散臭きものに鴉も十葉も  
新緑の森の掃除屋徒鴉  
アカシデの花序の緑の万灯籠  
がまみみの花の真白に雨あがる  
何處推してその名貫ひしシモバシラ（シソ科）  
いかり草何處に錨を隠しをる  
おととと森の小径の垂れ毛虫  
すんと長け風に飄々はるじをん  
かきつばた蕾むしようぶの露払ひ  
車椅子順路もありてしようぶ園  
クサガメをパステルで描く沼五月  
水無月の膝に小振りな写生帖  
擬宝珠の葉の上ありく蟻その他  
薫風に擬宝珠は葉を重ね合ひ  
鼻立てて亀の泳げり薫風裡  
梅雨水輪クサガメ鼻を没しけり  
かきつばた巡り三々五々の風  
つつつと水輪連ねてあめんぼう  
写生位置こと決めたる杜若  
目を移すかきつばたよりかきつばた  
くにやくにやと毛虫踊れり糸の先  
おおばぎぼうし浅き緑に雨予報  
二人静零す花屑葉が受けて  
雨零しずりて古き卯木の実  
十葉にも名札自然教育園  
シロダモの若葉が森を明るうす  
らしようもんかづらばたばた雨零す  
梅雨入の雨のしょぼしょぼとぼしらが（いね科）  
二人静ひよこひよこ来てゆったり観る  
山道の一層冥く宝鐸草  
亀泳ぐ水も緑に太鼓橋（小石川 後樂園）  
水彩に如かず若葉の後樂園  
雨降ればもうめちやめちやに未草

黄緑の絵具溶きをり五月闇  
椎匂ふ日中友好会館裏  
新緑にメリハリつけて塔描かん  
後楽園池に蓋する未草  
曇日の一彩深きかきつばた  
椎繽紛後楽園の築地塀  
若楓緑の暗幕垂れるたり  
藤棚のするする繰り出す後楽園  
著我の花静寂を鳥と頷ちけり  
レンガ道古き葉落とす常緑樹  
干潟現る沖をはるかに同窓会  
夕立の一気呵成のそれが来た  
ずぶ濡れに雨のペチュニヤぺったんこ  
腋芽搔きトマト臭さが移りけり  
きうり苗ナメクジ容赦せぬつもり  
ひまわりの発芽土くれ撥ね退けて  
母叱る後悔苺の酸味ほど（認知症）  
都忘れ日々色深め認知症  
芯の無き生活（たつき）送りて苺酸し  
見る者を見返す自画像花ガベラ  
団子虫蛞蝓同居鉢の底  
鉢退けられあらはづかしのなめくじり  
紫蘭咲く要は氣持の持ちやうと  
モナリザの笑み湛ふかに花屑窪  
女傘初お目もじのあめんぼう  
ひいふうみいみつばつじの葉の三つ  
大木の盆栽にせん菊挿し芽  
搔きどきがありて今しも松の芯  
園芸書見てのち松のみどり搔く  
若夫婦の家の二階のミニ幟  
喬木を一丁跳び細身の黒揚羽  
蜂の子は筒花が好きもぐり込む  
蜥蜴そろそろ蟻はせかせか庭の昼  
パンパスの旗指物を雨急襲  
● HAIKU200505sono2  
けざやかに義母（はは）昏睡の間のつつじ  
青葉青臭しまさかの脳出血（五月十七日 義母  
新城千代逝去）  
汝が家の芯のひまわり忘れまじ（故義母 新城千  
代）

都忘れ色薄る目を汝の逝けり  
植込みの都忘れを枕花  
はつなつの庭花加へ枕花  
こそつくは五月雀か北枕  
雪の下平屋に棲みて平屋に死す  
薫風の吹き抜けるごと汝が一生  
子雀啼く平屋の曇り硝子越し  
雀呼ぶ汝が声紛る青葉風  
青嵐まだ吹き足らぬまゝ通夜へ  
話続け夏めく茶の間に汝が口調  
鳥の餌台五月雀がけふも来て  
茄子苗植う穴掘りかけて逝かれけり  
遣されし義父（ちち）に青葉の夜のながし  
柿の花ひとり男が遣されし  
大往生と云ひて云はれて青葉の夜  
姉が守り妹が守り卯月の父  
卯の花月上げ下げ供養の水と飯  
遣されし義父を守らんとひまわり植う  
山梔子や後悔といふ後手踏んで  
汝が植えし松葉牡丹も服喪の日々  
松葉牡丹咲くらん四十九日頃  
朝顔植う千代朝顔もありぬべし  
骨壺と新樹の中を戻りけり  
朝顔の本葉八つが芯止めどき  
朝顔の双葉本葉と喪の日過ぐ  
納骨の日どり決まれり万緑に  
万緑や四十九日はすぐに来て  
喪籠りの日々緑陰に居るごとし  
青葉の夜義父連れ合ひに先立たれ  
火葬場に待たされてゐて新樹かな  
火葬場のすっぽり埋もれ夏木立  
新樹見て火葬の火力ふとおもふ  
白土耳古桔梗服喪の一日目  
かほる百合墓地の話に移りけり  
汝に代はり小鳥の餌を初夏の朝  
巨輪朝顔汝に見せばやの苗植うる  
仏壇に声掛け枇杷を下ろしけり  
蝸牛四十九日を待つ許り  
夜は明けて茄子畑々と納骨日  
緑さす座敷精進おとしかな

ルピナスの風折れ義母を悼む日々  
鏡台も遺品の一つ五月光  
庭の百合仏壇の百合納骨日  
上段の百合の供華より傷み初む  
主逝く厨の玉葱発芽して  
つれなくも又朝が来て喪の卯月  
遺されし義父とチフスの話して  
ぼつりと義父チフスの寝物語かな  
会葬過ぎ三日見ぬ間の青トマト  
傷みし供華整えをりぬ夏座敷  
白百合や遺影に落とす独り言  
一つ間に笑まふ遺影と夏布団  
雀啼く平屋の家の明易し  
明易の佛に供ふ飯の湯気  
はつなつの花を絶やさじ新仏  
喪の家の明易ければ鳥のこゑ  
骨壺の一つ置きある夏座敷  
会津出の汝を弔ふに会津の冷酒（さけ）  
気安さの千代さん無き家明易し  
千代さんと呼ばれし汝の逝く卯月  
焼香の感極まりて百合のまへ  
甦る汝でで虫の背をこづく  
はらからに四十九日の雲の峰  
雨続く日々いつせいに藪からし  
ひやひやと夜の手が触れて眠草  
痴呆病む母が手に触れ含羞草  
たてつづけ金時山の遠郭公  
葉を愉しみ花を愉しみ擬宝珠は  
金魚草金魚を殖やすごとく剪る  
朝顔苗ヘルパーさんへお裾分け  
厨より話に加はる五月妻  
うなづいて答へるときの瞳の涼し  
苗箱の苗薫風に泳ぎけり  
湯屋のれん少し高めに夕風起つ  
湯屋出でて漫ろ忍冬匂ふ道  
親指がまざまざありて枇杷すする  
喉佛大のころころ枇杷の種  
さくらんぼ下ろす遺影に断りて  
枇杷の種落とせば木の音したりけり  
一様に寿命は伸びて心太

認知症なる語諾ひ枇杷すする  
認知症病みて熟れ枇杷滴らす  
枇杷滴るこんな筈ではなき母に  
認知症枇杷食（お）す吾にもその気あり  
その手入れ簡単なればゼラニウム  
虫共の鼻も曲らんゼラニウム  
太蚯蚓踊り出でたる祭月  
恥部を見る顔付きをして蚯蚓見る  
一呼吸二呼吸して蜥蜴見る  
うち霽れて臯をわたる蜥蜴かな  
軟体の蜥蜴は水のごと流る  
金魚居ぬ鉢とは知りつ覗きみる  
金魚居ぬ大鉢臯月の雨水溜め  
総領の甚六にして蝸牛  
ガーデナー朝から蛞蝓退治かな  
なめくぢの所業リンチに値せん  
償いは石もて撲たるなめくぢら  
地に足をつけて実結ぶ紺茄子  
蚕豆は乳母日がさで育てられ  
いつまでもこどもはこども瓜の花  
足裏の砂地ほこほこ青芭蕉  
双葉もて朝顔苗は翔びさうな  
朝顔の定植土器（かわらけ）いろの鉢  
なめくぢは極刑草鞋虫は放免  
植え替えし百日草の一日目  
ペゴニアの花殻なめくぢ捕るごとく  
日に搏たれ強き花にてゼラニウム  
植うるにも都合のありて向日葵苗  
ひまわりの遠縁にして梅雨ダリア  
杜若橋を渡れば橋が見え  
シンブルがベスト臯月の装身具  
燕くる挿し絵のごとき街に橋  
ぐんぐんと伸びる青茎はや仲夏  
六月の植木鉢をばちばちん  
盗人もギョツとするらんジキタリス  
庭草もはや夏草の勢いを  
朝は麵麩パセリに添えしマヨネーズ  
早生りの胡瓜に気づく朝のこと

夏の星挙げて葉を閉づ合歓若木  
ひたひたと雨くる大山蓮華かな  
花樽雨にむらさき花薄れ  
浜昼顔砂丘は白き雨を吸ひ  
日雷母が正気に戻るとき  
土均し朝顔あんどん作りの鉢  
眠草なんなら君も触れてみな  
神妙な顔して求むおじぎ草  
液肥与ふペチュニア・サフィニア・ロベリア鉢  
雨二日降って崩るる鳳仙花  
古漬胡瓜茶漬けの候となりにけり  
孫の名を付して育てる七夕竹  
孫二人なれば七夕竹二本  
藪からし濡れてするする昇る天  
梔子を愉しむそんな齡来て  
朝顔を種子より育て萎ふ苗も  
おじぎ草辞書繰りみれば一年草  
一物のごとく胡瓜のぶるさがり  
ヘエと云ひ葉下の胡瓜覗きゐる  
郭公を開きつけ薄の仙石原  
園芸の真似事で虫捕りて捨つ  
でで虫がけふは胡瓜にとりつける  
土ゆがむ朝顔苗のポリポット  
来客に可愛がられておじぎ草  
愛嬌よく玄関先のおじぎ草  
あぢさゐがのさばり出して家の裏  
眠草突つく処がなくなりぬ  
萩の葉を金蠅蹴って飛びにけり  
更衣日和の風と云ふべかり  
バルコニーマサイの矢尻鉢に活け(ミニプランツ)  
更衣首にほくろの女かな  
茅花茅花と茅花の靡くやうに云ふ  
合歓の花咲いてベティの長睫毛  
屯して青柿のまだみそつかす  
だんご虫愛づる姫君梅雨の庭(孫 美雨)  
姉妹交互に手出しねむり草  
梅花卯木ほとほと雨は止まざるよ  
生身魂拵大鏡を取り出して  
飯支度お手のものなる生身魂  
生身魂達者なものよ朝は麵麩

卯の花月明けきる迄の新聞読む  
早起きす朝顔苗が待つてゐる  
大ふくべ仏の説法せるごとし  
水に浮く形も彩も夏落葉  
葉が八つ朝顔苗の鉢上げどき  
いちにちの半ば居眠り生身魂  
高齡のもう起きて掃く夏落葉  
明易の起居のもの音二階より  
やつと霽れ風船かづらでも植えん  
莫迦をみる初生り西瓜承知で買ふ  
吾が一つ覚えの臺灣バナナ買ふ  
納豆の風味のアボガドとろける夏  
彼の家の彼の人のこゑ夕若葉  
晩酌や家の戸開けて夕若葉  
酔ひは今六腑を巡る夕若葉  
一升瓶頼もしき哉夕若葉  
金魚掬ひ愉しきものにして回顧  
河原撫子雨に搏たれて一揺れす  
茶花とし一枝乞はるゝ夏つばき  
夏つばき蕾のぼつんぼつんと雨後  
ベコニアに雨がとろとろ降りにけり  
アカンサス育ち過ぎてはもてあます  
つきあひにも距離といふもの百日草  
訃報来て質す消息花ぎぼし  
一生をこの平屋にて雪の下  
玄関で立話して風知草  
切り戻す菊は正直腋芽伸ぶ  
西洋朝顔丈夫と聞けば二つ買ひ  
響きよくブルーヘヴンといふ朝顔  
垣あれば西洋朝顔そこに植う  
鯉山椒教えて呉れし汝の逝けり  
鯉山椒会津の味と教え呉れ  
酔海雲にひとり想ふは汝のこと  
花卯木隔たるものは隔たりて  
花卯木おのづと隔たる朋ありて  
生り方も見てのとほりのミニトマト  
庭先まで来てゐる青梅雨風知草  
古めかしきものにも一目風知草  
思ひ出を肥やしに咲かず銭葵  
銭葵咲かせる主は元警官

ダリア咲かず家の真前泥んこ道  
天帝の召すまゝ逝ける花ぎぼし  
梅雨の近隣存らふる人数ふるほど  
柿若葉してお隣りの植栗家  
百日草植えてことしの暑を想ふ  
朝顔の苗蔓欲しきもの棒切れ  
首夏の園芸ハーブなんぞは植えまじく  
新趣向ネグンドカエデの夕若葉  
雨暗の厨に蚕豆茹でる湯気  
銀鈴の雨滴を止め合歓の花  
広葉より蠅の発着立葵  
昼顔や自転車でくる郵便夫  
青枇杷落つこんな細路地にも自動車  
青枇杷に思案ああでもかうでもなし  
返辞出すことにもくよくよして青梅雨  
劍崎当りが適當浜昼顔  
夏祭なれば散財縷紅草  
松葉牡丹丈夫が取り柄と応へつゝ  
大は小兼ねるといふかアマリリス  
アマリリスへたに動かぬほうがよい  
五十過ぐ妻頼もしきアマリリス  
物騒な世と何時なりしジキタリス  
石ころ道守一の蟻居やせぬか  
飛び納め梅雨を迎える前の蝶  
合歓の葉を眠らす奴がゐて愚か  
合歓の葉はちよつくら触りても閉じず  
今も在る嘗ての借家柿の花  
淡交といふ一雑誌布袋草  
青鳶や叙事詩展開せるごとく  
空木の香中途半端に目が覚めて  
青龍の鱗めくなり蔦青葉  
明け易く齡相応の目覚めなり  
明易の廁に籠もるアンモニア  
蔦塀に青龍一頭放ちけり  
ぼろぼろと青き枇杷落ち朋逝きて（悼 勝亦年男）  
熟れ枇杷や敢へて云ふなら人缺月  
朋の数またまた缺けて忍冬（すいかづら）  
青菽の広がる枝を絞りたる  
竹落葉四十九日を目前に  
竹落葉拾へり痴呆軽度の母

刈らんには若竹あまりにも見事  
若竹のこちらは剪りてそち残す  
来客は母の錯覚竹の秋  
風絞ると青菽を絞りたる  
九州は梅雨入と聞く花ダリア  
降る雨の真直葵に倣ふべく  
ゼラニウム野放しにしてこの洋館  
接骨院私道に紫蘭植え込みて  
雑俳を反面教師として紫陽花  
雨脚の強弱見ゆる額の花  
紫陽花や死に支度にも手本あり（新城千代）  
明易の娘が諾ふ死に支度  
一夜にして御空の天女花（おほやまれんげ）朽つ  
達者なる足腰ねずみもち咲けり（義父 九十六歳）  
老人のにほひそこはか女貞花  
薔薇吾に似合はぬ花と受け止めし  
雨烟り繡線菊ぼんやり咲くところ  
天井に階（きざはし）懸けて杜鵑花好き  
● HAIKU200506sonoz  
立葵前にしすつくと背を正す  
原っぱの茅花わいわい騒ぎ止めず  
海見るにここが一番山法師  
坂にして海原臨む山法師  
花合歓の坂うなばらを敷き詰めて  
根っからの音痴に生まれグラジオラス  
梔子の少し黄ばみて雨まみれ  
助産婦の廢れて和蘭あやめかな  
聖域を犯すと百合剪りにけり  
学童のじゃがたらいもの畑の昼  
野仏をそこに佇たせて釣鐘草  
ほたるぶくる悼みは時を経てうすらぐ  
石竹やいつか知恵つく女の子  
紫陽花寺女の足で五、六分  
紫陽花を包み込みたる一空間  
蝉しぐれ痴呆の母と禅問答  
十葉を引きて染む香の手を脱けず  
徒然に十葉引けば梅雨近む  
露草の白花ひよろり梅雨清浄  
十葉に染む掌饅頭ほおぼる時  
揚羽来て目線吊り上ぐ開港祭

あぢさゐのさみどり重ぬ安堵かな  
未草水とひかりのカピラ城  
波しぶき頬にウグイのつけば漁  
ひとまはり心大きく向日葵に  
虎尾草や雨上りたる山の景  
昼顔といへば突き出し湾の口  
毒だみや皆何處か病み葉漬け  
造成地ビル建ち始む姫女苑  
姫女苑さらりと風の吹く日なり  
この家で命全うしたき虹  
これからが思ひやられる百日草  
大好きが集まって来て五月山  
女貞花この路曲がる迄匂ふ  
木下闇曼荼羅図為す額の花  
人の和を宗とす教え水馬  
生かされて生くる御教え未草  
葉ざくらや日の斑を顔に胸肩に  
蜻蛉飛ぶ定期航路がありにけり  
草亀の鼻先掠め糸蜻蛉  
目で追ひて蜻蛉向き替ふその地点  
蜻蛉つるむ音のかさこそかさと墮つ  
もんどり打ち青筋揚羽翔べば夏  
ぎぼうしの聖域犯し竹の葉散る  
ぎぼうしの広葉より風起ち初めぬ  
万緑の入口に佇つ肩の冷  
ここに亦漫る歩きの蝸牛  
植木鉢退けなめくじり狩りにけり  
銭葵旧知あらかた居なくなり  
彼の夏のねぶた絵団扇眺めつゝ  
一昨年の去年の絵団扇重ねあり  
椎の香も今となりては嘘のやう  
四十九日須臾の間に来て柿の花  
死も風も予告なく来て燕子花  
横須賀に連なる浦の紫蘭咲く  
隧道を抜ければ要塞額の花  
花菖蒲葉にぶつかって風の吹く  
揚羽上昇半端な力ならざりき  
千屈菜の伸びて一寸又一寸  
虚空より翳被せくる黒揚羽  
南天の花支ふ茎間延びして

日の照りて雨後の葵の土蒸るゝ  
揚羽蝶何考へて横つ飛び  
階に階重ね団地の立葵  
行きずりの人にも午報立葵  
朝は先づ此処にしゃがみて百日草  
利子薄き貯金にも慣れ竹の秋  
降りて霽れ霽れてまた降る夏つばき  
どかと着き石垣島よりパインの荷  
アロハ着て沖繩帰り梅雨の便  
森閑と擬宝珠青を深めけり  
波の上を夏蝶八艘飛びめけり  
萬物の萌え出す中にみてひとり  
万端の整ひ山野萌え出せり  
さみどりに痩せて苔づく石狐  
水無月の木洩れ日厠の窓に差し  
じはじはと梅雨に入りけりバナナに斑  
夏萩のお先走りを愛でにけり  
夏蝶の8の字翔びに興じけり  
母こんな筈では真昼の鳳仙花（認知症）  
団扇絵の逆巻く濤の風受けて  
悲しみは追ひかけてくる鳳仙花  
朝顔の花の絞りのごとサンバ  
人々手に手に一鉢なんぼの青鬼灯  
市立ちて一鉢なんぼの青鬼灯  
朝顔の蔓先何を当てにして  
摘み尽きるなし青紫蘇の葉を用意  
花柘榴てかてかずぶ濡れ通しけり  
戒名の話に及び茄子の紺  
仏弟子としての戒名得て芒種（新城千代）  
銅鏡もて女人は粧ふ茄子の花  
中日にごたごたありて紅蜀葵  
郵便は一通女貞花の昼  
女貞花垣のつんつん匂ふ昼  
放射熱放つ舗装路立葵  
朝顔のお禮の白花嬉びぬ  
へブンリーブルーこの一花より咲き出しぬ  
瀟洒にてレンガ花壇の花サルビヤ  
上州の茎逞しき立葵  
時計草時刻むべく散髪屋  
梅花卯木木暗に模糊と目を開く

朝顔の鉢上げ午前費やせり  
抱かれて貰はれてゆく朝顔苗  
この寺の何と云っても白あぢさゐ  
鉢驚草返事は庭の方よりせり

夕顔の蔓巻き昇り棒の尖  
夕顔の蔓の漂流生まれり  
夕顔を這はす処を先づ決めて

● HAIKU200506son03

表こがし生きた証と云ふけれど（俳諧せることは  
・・・）

み仏の如く坐すなり布袋草  
纏はりつく雨はやっかい合歓の花

青山椒隈どり深く毛虫の貌

光沢が何より証拠なめくぢり

枇杷落ちに落ちて一向に上がらぬ雨

棒切れに8の字結びトマト苗

蝶の舞書体で云へば草書体

絵葉書に貝のイラスト夏見舞

炎天を山下清めく歩調

炎天を弥次郎兵衛めく両手に荷

萬（よろず）の葉青を深めて擬宝珠の季（とき）

雲中へやみくもに伸ぶ立葵

あぢさゐの地味に順じて応ず彩

なめくじにコスモスの苗丸坊主

モノレール窓に鷗と梅雨の湾

あぢさゐのことしここたく花芽の数

箱詰の熟るを待てるパイナップル

カシワアジサイ雨白め降る石畳

朝顔の卷蔓棚の網待てり

曇日の松葉牡丹はぼんやりす

朝顔蔓選り取りみどり棚の網

朝顔の掴まる処用意せり

箱植の朝顔同士絡み合ひ

ことし亦出て朝顔の新品種

那珂川の中流域の山女釣

青芝に血脈のごと立木影

いつの間に家古ぼけて棕櫚の花

前向きな姿勢をいつもあめんばう

烏瓜の種ふやかして十日経つ

朝顔の種子水吸うて水膨れ

思ひ直し七夕竹として生やす  
石畳かつんと打ちて夏落葉  
柿の花妻の実家に近く棲み

薔薇を剪るちよつと勇氣の要ることよ  
薔薇せいぜい三つも咲けば足る古木

夏落葉唐橘もその一つ

梅擬この粒花があんな実に

千屈菜の青葉植え込みつん抜けて

青梅雨や臘梅の葉の薄光り

山の蟻百合の蒼を上り下り

朝からの雨のめそめそ梅雨宣言

梅打てりへんな筋肉使ひしか

一日経て痛む百（もも）筋梅落とし

青梅の中の青梅選り漬け梅

青梅を漬けんと青き尻も拭き

濃く淡く伊万里の絵付あぢさゐ季

床の間に燕飛ばする落し掛け

平書院窓にゆったり青芭蕉

緑さす料理一品一品に

了見は聞いておくもの葛桜

願掛け杉山の緑に囲まれて

岩牡蠣と云へば象潟合歓のころ

旅に出たし蕎麦も喰ひたし郭公に

一彩づゝ朝顔の苗求めけり

夏萩の雨を零してさ揺るる葉

夏萩のあちらこちらの葉打ち雨

この雲行き雨ありさうな夏つばき

海の方明るき窓辺仏桑花

置き肥料五粒ほどを仏桑花

徒然に雨を見乍ら枇杷食うぶ

枇杷食うぶくるりと剥けて皮一枚

御神橋楓の葉透き日の光

掘割へ川逸れ皐月のどんこ舟

時の日に開く朝顔第一花

時の日の雨予報雨違ひなく

時の日に係はりもなく吾が生活（たつき）

格別の思慮なく時の日過ごしけり

スズメガの幼虫に妻腰抜かす

ヨモギスジハモグリバエの跡か是れ（菊）

種子蒔けば雨来ておしろい花の路地

しるがねの雨滴を抱き合歓葉叢  
へんな毛虫青山椒は曲ある木  
蝸牛すらすら登るさるすべり  
うまさうな葉に穴そもそも青虫は  
当地へは今日はた明日か走り梅雨  
傷跡のこんもり夏至の胸板に  
父の日の義父励ますを専らにす  
鉢朝顔喪中の義父に仕立てけり  
朝顔に朝顔の紺理屈抜き  
雨走り易き芭蕉の青葉かな  
きりきりとこれは厄介朝顔蔓  
朝顔の手当り次第絡む癖  
朝顔の蔓を剥がしにかりけり  
箱植えのこれは何の芽ちよぼちよぼと  
鶏頭の芽の何處をだう間引かんか  
がうがうとタイマーの入る夕薄暑  
梅雨寒の貌をなぞりて飯の湯気  
深鉢に梅雨寒玉子割り落とす  
合歓は葉をすっかり閉じて青葉闇  
パイナップル匂ひを嗅いでまだこれは  
パイナップル紛れもあらずこの酸味  
宅配の箱毎匂ふパイナップル  
生まもののパイナップルの匂ひなり  
けしからん葉を食いちぎる梅雨の虫

● HAIKU200506sono4

朝な朝なうち眺めゐて青トマト  
剥き甲斐あるそら豆にしてこれっぽっち  
樹に止まらず玩具蟬ではあるまいに  
手にへたと百円シヨップの京団扇  
扇面に濤立ち上がる京団扇  
ぷりぷりと音して茄子の挟み揚  
剥き売りのそら豆に錆雨後の街  
妙齡の羅終に振向かず  
茄子につく虫は一体凶鑑牽く  
立葵明日咲く蒼はこれとこれ  
仏桑花花殻葉巻のごと巻けり  
ひよひよと川原に川原雲雀の巢  
雲雀失せ川あるばかり利根堤  
朝顔苗近所に配る甚平着  
菓子零す家の中まで蟻の道  
朝顔の蔓の朝から徘徊す  
はんぺんを肴に父の日の晩酌  
そら豆に掛けし振塩何故溶ける  
父の日の鬚づら似顔絵ファックスより(孫 美雨)  
郭公にあやからん旅明日にして  
郭公や萇くゆらすその間も(仙石原)  
鳥が先づ目覚めて四方の五月山  
河骨の照りに照るなり貌蒸す日  
飛び込むは蛙ガガブタ覆ふ沼  
女の手武蔵鐙の葉をこづき  
濡るる葉の切れ込み深く樊噲草(ハンカイソウ)  
泡噴虫蜻蛉の発てる一草に  
虎尾草にそろそろ風の起つ木道  
激賞のこゑの挙がれり繡線菊に  
風上にノハナシヨウブを愛づるこゑ  
くろぐると太藺一叢落とす翳  
ノハナシヨウブ一町先の風が見ゆ  
太藺見て吾もゆらゆら揺れゐたり  
行々子もぐり込んだる菝つ原  
菝の間に浮き雲映す鉄気水  
行く野路のぼっかり展け青葙原  
木道ゆく葦の一葉をへし折りて  
黒くて小柄その蜻蛉の名を知らず  
泡噴虫金時山は暑に曇る  
雨意少し残る茅花の木道ゆく

灼け木道一人歩めば一人の音  
じつくりと腰据え魅入る川とんぼ  
筍は真竹裏年なりしと云ふ  
繡線菊にぼんやり道の続きをり  
疣取の木の花見上げ不審顔  
粗に密にあさぎの黄花雨の隙  
草っ原ノハナショウブの一本立  
つんつんとノハナショウブのさみだれ咲  
水蠟（イボタ）の花雨の匂ひの風が吹く  
葦叢に吹き込む仙石原の風  
木道を蜻蛉真っ直ぐ吾も真っ直ぐ  
英名は洒落ゐて夕菅デイ・リリー  
河骨に金時山から雨が来る  
イボタの花水は冥きを流れけり  
膝鳴らし起てる老人未草  
未草そこ離れんと立ち眩み  
すいすいと水の奔れば菖蒲また  
ゆつたりと水の流れに沿ふ菖蒲  
葉影又丸くその名も丸葉萩  
溝萩の茂り抉りて水の音  
あぎともて相槌打てるあやめ哉  
山法師乙女峠は雲を負ひ  
猿梨をうち過ぐこゑの上滑り  
けふ山は晴れて日の彩葉莢の彩  
いやに茎赤き沼草梅雨上がる  
オニシモツケじんはりけふは蒸す日なり  
夏の一草草蓮玉（クサレダマ）とは何たること  
梅雨深む湿生花園に草蓮玉（クサレダマ）  
団体客箱根空木の紅を愛で  
しゃかしゃかと仙石原の夏の虫  
木道のその先切れて夏の虫  
いくつもの沼渡りくる遠郭公  
夕菅をバックに撮すお二人さん  
木道を蜻蛉発たし発たしゆく  
風露草雨すれすれに落ち来たる  
蚊とんぼのぶらさがりをる谷地柳  
駒草の岩場岩場の岩の彩  
朱鷺草に溜息つけりうしろより  
湿原の彷徨ひ人に三稜（ミクリ）の花  
郭公の待たるる宿の朝ぼらけ

杉堀の匂ひ湯舟に青葉宿  
起際も寐しなも櫛青葉の宿  
百合の葉のハの字ハの字に岨薄暑  
蔓先は金時山へ藪からし  
桑の実を喰らひ戦時下当時のこと  
蕎麦待つ間蕎麦屋の鉢植岩煙草  
湯本にて羅バスを降りゆけり  
塔ノ沢提灯仕立の山小采（ヤマコブクロ）  
諸鳥のこゑを青嶺を閉ざす霧  
喬木の翳が剥がれて黒揚羽  
宿への道箱根空木の坂なりに  
大船の観音右に見て薄暑  
蒸す車中扇子ひらひらやってをり  
白き制服東海道線梅雨車中  
更衣車中見回し諾へり  
胸はだけゆく梅雨入を諾へり  
いやに白き土耳其桔梗は梅雨の花  
ポッチャンと跳ねしは梅雨の稚魚でした  
今年竹大磯は山迫る里  
背伸びして梅雨の海見ゆ国府津駅  
海を見て扇子パチパチやってをり  
燕見て大雄山線始発駅  
断崖にほたるぶくろの塔ノ沢  
羅も乗り来て箱根登山バス  
湯本駅川原燕が飛び込み来  
菖蒲に吾等入れて一枚撮り下され  
繡線菊にもやつと朝の来りけり  
篠折りて目まとひ払ひ暑を払ひ  
おはぐろの姿勢正して止まりけり  
湖尻への道をずんずん川とんぼ  
城へ急く用水に張る蜘蛛の糸（小田原城）  
気のせいとか箱根空木に雨ぼつり  
別荘地いきなり頭上でほととぎす  
万緑に目を剥く木造大黒天（小田原 板橋 宗福  
院地藏堂）  
梅雨の湯舟に銀座カンカン娘の唄  
往時の逗子サマータイムといふがあり  
立葵田舎銀座の賑ひめく  
白靴の足許見られゆくごとし

海風の吹き抜け茅の輪潜りけり（瀬戸神社）  
樟の木の頭の刈り込まれ夏祓  
蜘蛛の囀を作る夏越の只中も  
大茅の輪乾ける処と濡るる処  
菅拔の一見公務員風の男  
夏祓済む境内にゆすり蚊と  
樟の根の雨湿りして夏祓かな  
ゆすり蚊と名越の祓受けにけり  
常夜灯点く中茅の輪潜りけり  
真つ向に海や茅の輪の雨湿り  
夏祓済みて茅の輪と常夜灯  
勤め人茅の輪せかせか潜りけり  
桜桃を凶案の国旗無きものか  
蛇の髻の花蘊蓄を傾けて  
蛇の髻の花気のつけば雨小止み  
天気予報出掛けに聞いて竜のひげ  
地に盈つる雨の匂ひや竜のひげ  
くろぐろと雨吸ふ地べた竜のひげ  
ポーチュラカ暑さにいちばん強い花  
枝豆を硬きとおもふ齡来て  
もう齡かビールのピッチあがらずよ  
ビール剩すそんな己を蔑めり  
雨湿りもたらす射干隣家にも  
だんご虫の好物孫に問はれ夏至  
絡まれて絡み返せる通草蔓  
ちよっかいを出しては通草蔓同士  
朝の蛾とぶつかりさうに草っ原  
葭切のギヤアギヤア郭公啼きそびれ  
月光にダチュラ怪人佇つごとし  
夕立の叩き甲斐あるダチュラの葉  
夏風邪に関節ゆるび流人めく  
夏風邪にうだうだ咳きてお恥ずかし  
夏風邪の眼を茫々の海へ投ぐ  
夏木伐りし筋肉痛にサロンパス  
夏木伐る使はぬ筋肉使ひもし  
パイナップル熱れきつてゐるお仏壇  
サロンパス貼りて匂はず梅雨家中  
射干の皆雨倒れ路地暮し  
蚊を打てる合間合間に草を引く  
武装して長靴履の庭草取

藪つ蚊のすつ飛び来たる茗荷叢  
草引いては蚊を打つ手順繰り返し  
自動点滅門灯蜘蛛の囀大写し  
門灯にもいろいろ梅雨の灯点し頃  
この頃聞く佐藤錦は鯉ならず  
梅雨暗の電燈の紐引きて消す  
雨後明りそれも亦よし立葵  
つまみ上ぐ佐藤錦はうぶな彩  
雨しとしと蛇の髻の花射干に  
射干の貧乏臭き終の家  
爪に火を点す暮しを射干に（年金生活）  
射干咲きあたりジメジメして来たる  
夏風邪てふ飛んだ苦勞を背負い込みぬ  
夏風邪引く面目なしと云ふ他なく  
射干の朱（あか）は朱でも真赭（まそほ）の朱  
モノレール海近ければ碧揚羽  
降り込められナマケモノめく梅雨一日  
不安定頭出っかちカサブランカ  
見るからに雨が重荷のカサブランカ  
外人部隊今も健在カサブランカ  
火取虫火取始めの音のおどろ  
トネリコの青葉に七月初日の雨  
トネリコの葉を打ち祭月のあめ  
忍冬四十九日は目の前に  
団扇風齡が教えて呉れしもの  
吊忍下げて廊下に徹る風  
彼岸にて迎え給ふや此度（こたび）の夏至（義母）  
新調の仏壇にあぐ自家製茄子  
新佛馴染み給ふや夏座敷  
鱧・鮑・甘海老地物お任せ寿司  
夏至の夜を試し見義父の天眼鏡  
雨の日も夢見る合歓の下田港  
雨あとの合歓の木夕べ来て粧ふ  
立葵次々咲いて次は是  
手巻き寿司紫蘇もて鯉の匂ひ抜  
搏てる音頼りなければ蚊を逃がす  
薄味と駄目出しが出る鱧料理  
蚊を搏てる阿吽の呼吸づれてをり  
海浜公園人出これより海紅豆  
渚にて沖を見るのみ磯あそび

餅肌のはちきれさうな縞水着  
大胆な女（ひと）と水着を見て想ふ  
彩どりを抑えし水着長女なる

● HAIKU200507son02

つくづく見て老いの手と知る夕端居  
一日が始まる百日草の前  
ガーデニングなんて洒落ても汗仕事  
端居してまじまじと見る爪の土  
薄光る切傷撫でて夕端居  
伐り倒す夏木に肩を挟られし  
葉の上にて求愛琴爪ほどの蝶  
百日草主変はらぬ家二軒  
名張川鮎釣映像川下モより  
鮎釣の小細工鮎に通じざり  
鮎あげて女釣弟子悪びれず  
七月の黄昏てんぷら揚げる音  
虹はどうでも天麩羅揚の下準備  
朝顔の絞りに寝惚け眼覚め  
直会の麦酒林立すも淋し  
小振りなる急須に新茶間合い置き  
落ち着かぬ性分はこの揚羽にも  
合歓の上を舞ひて揚羽はうはの空  
一驟雨鷹の羽薄立たしめて  
罌粟の昼キュンと音して砂糖溶け  
お雛子のごとき雨音凌霄に  
でで虫の雨音聞いて大きくなる  
疑ひの目をもて眺むかたつむり（害虫？）  
かなぶんの現行犯を投げ撲ちぬ  
一言に気分害しぬなめくじり  
かりん喰ふかなぶん現場を押さえられ  
瑠璃かなぶん青きかりんに跨りて  
朝顔の荅数えて十日分  
朝顔にあいにくの雨上がらざり  
軽さうにみえて夏風邪軽からず  
百合覗く貌が入ってしまひさう  
立て続け百合に咲かれて壺足らず  
藪っ蚊をまたぞろ誰が引き込みし  
梅雨の蝶重き腰上げ発ちゆけり  
戯れしのち吾閑せずの梅雨の蝶  
梅雨晴間うどん粉病をやむ植木

向日葵肥え西郷さんの佇つごとし  
開眼のごとし百日草一花  
向日葵の意気軒昂に接す朝  
花殻のベタと張りつく青葉のうへ  
長雨がたたり朝顔ひよるひよる立  
またけふも雨かやれやれ饅飴粉病  
うどん粉病患う一枝木下闇  
徒長枝に取りつく梅雨のうどん粉病  
糊状の葵の花殻捨て晴天  
蠅帳の出番がありぬ妻留守宅  
汗っかき前置きにして言訳云う  
玉の汗脾腹を走り飛び散れる  
噴き出せる汗押えんと額へ掌  
汗流るむずむず虫の這ふやうに  
汗拭腰に挟める梧桐大人  
子蟻螂風にも過剰反応して  
起ちあがることしか知らず子蟻螂  
踏めばそこ雨の滲めり白雨あと  
天空に逝きし湘子の神楽笛  
見本見て変化朝顔育て見ん  
戒名の所以訥々凌霄花  
鼠尾草を殖やして新盆迎ふ家  
千屈菜の大差なき丈沼巡る  
みそ菘の幾叢切れ目なき水音  
手つかずの溝菘に風拡がれり  
生前から千屈菜明りして川原  
溝菘の川上ミに在すちちのこゑ  
露草の己立たしめある力  
六月の何處にでもある雀の貌  
千屈菜の謔けさ破り泥鰌捕  
なかんづく黙って刺す蚊にご用心  
困の蜘蛛と一緒になりて網繕ふ  
竹木石何でも登る蝸牛  
七夕竹孫の代筆承り  
水中花そんな下手物置かぬ卓  
捕虫網持つ子恐し庭の百合  
通り雨端居ごころを掠め過ぐ  
一物を涼しめ湯屋の扇風機  
閑居には相応の花夏つばき  
燕ゆく方が海なり逗子銀座

仏壇のまだ新しき夏座敷  
夏風邪を軽く見なせし故の罰  
霊界の入口はそこ夜の百合  
六月の食器洗はれ置かる音  
蝸牛苦手なる樹のありやなし  
おし黙る枇杷の木ゆっくり暮れて来る  
パイナップルえぐ味の針が舌を刺す  
パイナップルのえぐ味甘味を追ひかけて  
石垣のパイナップルとはえぐきもの  
白粉花も混ぜ仏壇の賑やかし  
海原を雷火一刀両断す  
相模灘沖に雷火の切り込める  
雷獣の千里を駆くる光が見たり  
雷雨あと息吹き返す草と樹と  
雷の楔を入れるゝ相模灘  
遠雷の果の雨音地を覆ふ  
一遠雷即迅雷に豹変す  
日雷時に飛行機音真似て  
戒名を諳んじをれば鉄風鈴  
西瓜大玉味も大ぶり三浦産  
海の家ぼつりぼつりと建ち始む  
バナナの花ミニチュアバナナのその先に  
当浴場の鏡広告なら(有) 三宝社へ tel... 係員  
参上  
嘗て湯屋に鏡広告吊忍(当浴場の鏡広告なら(有)  
三宝社へ tel... 係員参上)  
首夏の銭湯料金大人中人と  
墓参のことお盆の近き女湯より  
湯上りのかけつけ一杯麦酒の泡  
板の間にへタリて銭湯納涼図  
銭湯に茹で蛸梅雨の湯は熱め  
腹に創胸板に創湯屋涼み  
救助へり発着訓練白雨中  
昼顔や赤きテントの救難所  
雨の日もお祭りさわぎ凌霄花  
白粉花散りぬ浪費といふ風情  
かぶりつく西瓜は赤き波の壁  
冷蔵庫古りて大きな音立つる  
冷蔵庫とよもす後の夏の虫  
団扇畳にほいと投げだし昼寝せり

早寝早起昼寝も少し義父の夏  
西瓜種ほじくる夏の夜の浅し  
ゆすり蚊の中を抜け来し顔痒し  
瓜の種そこと云はれて顔撫ぶる  
雨止んで虹立ちさうな空なのに  
蝸牛さうださうだと頷けり  
夕立の先鋒橋にさしかかる  
浜に出づ道と聞き来て海紅豆  
昼寝はた座睡齡は百近く(義父)  
夏風邪の咳くつくつと嗤ふごとし  
あまりにもあっけなく引け碧蟬花(青花)  
朝顔蔓おいおいそこは物干竿  
明易の湖の蜩の話しごゑ  
四十九日事なく済みて義父昼寝  
うどん粉病粉の動くとおもへば虫  
むつと下車弱冷房に慣れぬし身  
照りつけて花の錯出す泰山木  
冷房車シネマその間冷房なし  
ビル風に涼んでみたり病院裏  
七夕の大学病棟廊渡る  
紐伝い朝顔の蔓導けり  
莫迦生りの自家製胡瓜孫呼ばん  
しゃんとして葬朝を迎えけり  
シネマ冷房空席冷えに冷えぬたり  
シネマ涼し買物袋を横に置き  
ラムネのごと Fin の三文字昇り来る(シネマ)  
● HAIKU200507sono3  
さくらんぼ片目つぶりてまだまだよ  
合歓好きの黒揚羽くる雨の隙  
繡線菊の愛くるしさに接しけり  
けふも又雨かやれやれさくらんぼ  
さくらんぼ皿に残りし茎と種  
鬼灯の袋を持たずまだ幼  
さくらんぼ家族の集ふ灯の真下  
一花づゝ咲いて百日草の朝  
百日草小さき顔の愛くるし  
百日草雨来て花期を長引かす  
莫迦胡瓜冬瓜風に料理して  
冷蔵庫どすんと許り夏来る  
この路地的那こ折れし店蒲焼屋

待つ客の鰻の目して鰻の日  
飯の量注文つけて鰻の日  
遠雷に足ぶらぶらと掘炬燵  
鰻喰ふ客を横目に鰻喰ふ  
教訓臭抜いて八月十五日  
山滴る箱根に手づくり豆腐屋あり  
父の日のオニオンライス肴とし  
さらしくじら祖父の象牙の箸使ひ  
さくらんぼ茎を抛るが面白き  
のどちらこ程の赤さのさくらんぼ  
男手の何でもくるむ冷蔵庫  
冷蔵庫サランラップがあれば足る  
足はやき夏の魚は酔でべて  
口許へ運ぶ途中のさくらんぼ  
「あ、雨」桜桃口へ運びつゝ  
遠雷は響かず雨が蓋をして  
炒めご飯主婦の簡単夏昼餉  
さくらんぼつまみて食へば雨の味  
頭から足まではだけ風呂屋夏  
お三時に思ひ当りし心太  
そそくさと葵を蝶の発ちゆけり  
母と違ふ真夏の妻のカレーライス  
カレールー無き世の母のカレーライス  
薄暑来て始末の悪きチョコレート  
座したまゝ睡りに落ちる生身魂  
西瓜食ひ水っぽき腹叩きけり  
色眼鏡して見ゆるもの薄と骸骨  
炎昼の芯まで冷えて黒煮豆  
蒲焼の運ばれ来るまで只々待つ  
震災日その日が次の診察日  
芋殻火を跨ぐ仕種が身について  
新盆の男が預かる台所  
物好きのこんどは行燈作りかな  
勝手よりすげなき返事夜の秋  
抜け気味の夏風邪こころが曲り角  
千屈菜の夢見る彩を好みけり  
鉢植えの蕎麦屋の風船かづらかな  
扇風機頭押さえて向き直す  
五風十雨倒れ癖つくひまわり苗  
ひまわり苗倒れ癖つき一寸猫背

雨払ひ雨を纏ひて青薄  
雨音の徐々に収まり青芭蕉  
方向を変へる金魚の大頭  
頭でつかち金魚の何處かぶつきらぼう  
葵喰ふ青虫作法知らざりき  
座睡よりそのまゝ横に三尺寝  
風変り祭囃子はトントコと  
風通る祭詰所に呷り酒  
独りごちつゝ朝顔の蔓の処置  
風いなすことにかけては宮城野萩  
当地ではアサマクスゲと呼ばれもし（ユウスゲ  
軽井沢）  
ところてん喰いたいと唯云っただけ  
カサブランカ己保たれざる身丈  
向日葵の根を張るまでの支え棒  
雨の日の玄関百合の匂ひ漬け  
さて蝶はどの花選ぶグラジオラス  
捨て湯して今日が始まる生身魂  
捨て湯して夏の一日始まれり  
ポットの湯沸かすことより夏一日  
アメリカ芙蓉国家斉唱するごとし  
この方も清酒二本を祭寄附  
落ち尽す枇杷の木誰も目を遣らず  
亀虫と思ふがピーマン荒らしに来  
角封筒手にして白雨上がる街  
祭子を率てくるママの厚化粧  
沖ばかり見てポート屋のアルバイト  
搏たるゝ蚊正しくこれは他人の血  
溝浚ひ蚊の一、二匹何のその  
湯殿の蚊裸の吾に對しけり  
蒜の唐揚げ夏バテ予防策  
ビールにほろ酔麒麟となりて空馳せん  
風鈴の舌とて臨時のボール紙  
腹這ひの西洋朝顔蔓逞し  
夕顔の蔓の先っぽ今朝見れば  
夕顔の蔓にも好みありて巻く  
朝顔の勝手許さぬ鉢仕立  
曲者の朝顔蔓の鉢仕立  
花ダチュラだらんとびちよびちよ雨の路地  
凌霄花テレックテンと咲き昇り

この家にはこの家の家風おかたらのお  
射干にぶつくさ云ひても始まらぬ

四十九日雨の振花咲く墓地に

子蠶螂雨が止みしと起ち上がる

反動でなほも揺れぬる子蠶螂

子蠶螂生意気構ひたくなりぬ

子蠶螂背伸びしお山の大将面

肖像めく白巨花アメリカ芙蓉なる

目細めて子規の鶏頭蒔きにけり

揚羽蝶急転直下繰り返し

しじみ蝶秋海棠はまだ咲かず

● HAIKU200507son04

追憶を肴に老いの麦酒乾す

うなぎ屋の鰻の「う」の字夏のれん

わらわらと風に噴水くずおれぬ

いつも使ふハンカチおのづと定まりて

葛切の嘔みきれざるに齡と知る

一生涯被らぬつもり夏帽子

散髪してサッパリすれば暑のやはらぐ

床屋涼し脛を冷やして番を待つ

ほとぼりを覚ますごとみて夕焼雲

訳が分らず風鈴嫌ひの五十妻

男手に助けが入る盆支度

千屈菜の株を殖やして盆向ふ

百貨店盆具セットを売り出せり

蠅除のサイズは夫婦二人分

蠅除を被せてあるは吾の昼餉

蠅除に昼餉の小皿数ふる程

童心に一時還り氷水

五匙に持て余しゐる氷水

老人の持て余しゐる氷水

かうなれば開き直りて氷水

氷水搔き止め遠きもの見つめ

氷水匙突き刺して小休止

地に止まる大揚羽蝶何の意ぞ

冷奴お先走りもいところ

山妻のこまめに出せと汗のもの

山妻に云はれて脱げる汗のもの

炎ゆる昼びたと鳴りやむ洗濯機

鉢朝顔ご丹精とぞ褒められし

合歓若木植うれば揚羽倚り呉れし

朝顔の蔓やっかいや世間もまた

時に気まづき近所付き合ひ鳳仙花

虫刺され酸の如きを裸身に

藪つ蚊につきまとはれて庭草取

ザツと雨ササササと風軒簾

不覚とる虫刺されには常備薬

藪つ蚊の骨身に沁みるまで逆襲

うるはしき風のかたちに青菘は

藪つ蚊の一つは搏ちて一つ逃す

吾が自家製トマト採っても採ってもや

炎昼をヴォリユーム大きく水戸黄門

庭草に西日は毒と聞きゐたり

斑の入る広葉朝顔涼しけれ

スクールは洋上はるか固め降

祭りに昔棒チョコ今ポッキー

朝顔の曇日なれば長持ちす

その勢ひ途中で放棄雲の峰

曇目のつきし片腕昼寝覚

蜥蜴の腹ヒクと交みに来てゐたる

祭済む神社に日差し洩れてをり

天牛を捕らへて餌にそこらの草

孫に与ふ或る日捕らへし髪切虫

緑陰の何處か黒ずみくる社

祭前電線這はず社の樹

緑陰に鳩と鳩追ふ近所の子

ヘルパーの挨拶はつきりゆすらうめ

祭寄附社の茂りの前面に

ご近所の三婆話すゆすらうめ

一、二三夜店の主顔見知り

向日葵のその明眸に大志あり

緑陰を振り向き振り向き通り抜け

緑陰へ一段高き石畳

緑陰の真中とおもふ大櫓

緑陰の神社の入口三方より

石畳ゆくや神社の夜の茂り

めまとひに足許用心する齡

夏風邪をひき痩せ気味の誕生日

蠅より蚊憎しとおもひ追ひ詰める

向日葵に劣らぬ笑顔ヘルパーさん

うつばかづら売り出す近所の花屋さん  
おのづから覗き見うつばかづらの底  
蚊とは別蠅はそんなに気にならず  
蠅たかる所をそれとなく見居り  
蠅除を蠅のまだ居ぬ卓袱台に  
蠅を退け遣るに止めぬ老いの箸  
お小皿を二三並べて夏の膳  
文机へかなぶん落ちて紙の音  
めまとひを遂に振り切りしかとおもふ  
羽黒山社社の蟻地獄  
蟻吾を唐変木と勘違い  
背のあたり少しむづむづせるは蟻  
急ぐ蟻そこで道草喰へる蟻  
朝顔の蔓の一つも蟻の道  
指の蟻吹き飛ばさんとして三度  
吹き飛びし筈の蟻んこ袖裏より  
橋掛りをワキのバタバタ蟻地獄  
能舞台進みて蟻の太郎冠者  
此処ここと指す指の先蟻地獄  
暴（あば）かれし蟻の寝殿造かな  
蜘蛛の囀をよけしつもりが別の囀に  
蜘蛛の囀に掛かりしものに珠玉なし  
蜘蛛の囀に顔を奪られて吾半身  
蛞蝓の顔すら溶けてしまひをり  
蛞蝓と蛭とは正しく異母兄弟  
蛞蝓の光を溜めて薄笑ひ  
掛かるもの待つのみ蜘蛛の平常心  
蜘蛛の囀を掛けたきところに掛け待機  
蜘蛛料る羽根を一枚残せしのみ  
張り了へし囀の中央に蜘蛛静座  
足搔くほど陥る蜘蛛の術中に  
鼻薬効かせなめくじ蒐めたる（飲みさしビール）  
向日葵苗ことしひよろひよろ雨不足  
麦こがし老いと片づけきれぬこと  
前立腺そこを痛めて明易し（義父）  
力要る老いの脱糞麦の秋  
ふんばれる両方の足梅雨廂  
偽物が横行せる世悪ナスビ  
菊に似せ鮪のビニール製のつま  
凶に乗りて蓮に乗り上ぐあめんぼう

胡瓜くるむラップ余分とおもひけり  
鳳仙花昔はよいことだらけなる  
暑き日々俳句詠むにも糞ぢから  
子を産まぬ若者ばかり実山椒  
佃煮の他は要らざる真夏の餉  
ポーチュラカ何處かとぼけしその響き  
蝙蝠が飛んで来さうなと或る晩  
繡線菊や端切れを使ふ裁ち仕事  
ハイビスカス長持ちさせて咲かすには  
月半より天気狂ひて時計草  
ぢやんぢやんと火焰樹の花咲き継げり  
この土地に合ふしろものかハイビスカス  
植え込んで多少の不安ハイビスカス  
本題に入りて雷遠のけり  
拝観の人を禁じぬ著莪量  
雨水の音色を奏で著莪の谿  
先達のひとりをおもふ冷やし酒  
唯一人端居を兼ねて昼の酒  
認知症進める梅雨の家暗し  
鉄風鈴鳴りてたまにはよきことも  
とくと見て向日葵の伸び盛り  
日々肥る自家製胡瓜露しとど  
天を衝く黍になるにはもう一押し  
立葵花はもとより丈くらべ  
言葉倒れの月下美人は句にならず  
月下美人てふは句にせず句にならず  
ペン皿にドライフラワー小判草  
少し手に余る花なり鉄線花  
むずかしき花の一つよ鉄線花  
献身は人目につかず紅の花  
長雨に火照りて果てし凌霄花  
サルビアの赤ぶり返す早雨  
云ふに窮してそこまで云ふか冷奴  
氷水真つ赤なやつに歯が浮いて  
冷やし酒雅ごろの在りしひと  
冷奴本心さらりと云ひ退けし  
空梅雨とおもへば雨や首傾げ  
螻蛄鳴かす俳句は興の持ち処  
雨のいろ湛えむらさきアガパンサス  
ちよつと蚊に刺された感じ仲違ひ

扇風機夜はぼつねんと座せるのみ  
青鬼灯キヤッチボールの弾む路地  
脛の創これは彼の時夕端居  
身ほとりに好みの団扇取り揃え  
豚と合ふ生姜ご飯の進みけり  
風鈴のちりんと澄みて鉄の音  
網戸より汐の香ふむ夜の冷氣  
寝ね易く団扇要らずの夜もありき  
手拍子もて演歌に涼む夜なりけり  
雨あとの風に涼しむ一夜かな  
昼顔に尽きざるガードレールの白  
浜昼顔「また逢ふ日まで」を口ずさみ  
河骨の己抛れる影法師  
水面に一寸顔出し河骨黄  
雨まみれ荃太浜木綿校門脇  
振花の上をジェットコースター  
風よどむ生け垣沿ひに鴨足草  
おや此処に一寸目のゆく灸花  
灸花頭隠して尻隠さず  
膝抱いて何と梅雨寒すつきりせず  
気のつけばずるべったり汗地獄  
一向に衰え見せぬ百日紅

● HAIKU200507/sonos

黒揚羽沼に人気を持ち込める  
銭湯出で禿頭爺と夕涼み  
洗髪めかして銭湯出でゆくも  
銭湯を汗納まるを待ちて出づ  
銭湯のタイル流るゝ泡涼し  
銭湯の洗ひ場涼し水の音  
夏痩せて銭湯に浮く亀ごこち  
桶鳴りて夏場の銭湯がらんどろ  
湯屋帰り白粉花の路地抜けて  
銭湯の前に縁台あり涼む  
迎へ盆淹れて明るき朝餉の茶  
燃え尽きる迄燃す芋殻の切れっ端  
芋殻焚く爪の明るき夕間暮  
凡々の妻たりし汝の魂迎  
茄子生れば茄子を供へて生身魂  
雑草（あらくさ）は露を蒐めて魂祭  
庭草は露を宿して魂迎

庭草の一草毎の朝の露  
日めくりを繰れるが仕事生身魂  
扇面の漫画のやうな魚の貌  
昼茶漬け一夏越えしへしこ漬  
髯隆とゴマドラカミキリ推参す  
ごきかぶり団子喰らひて御用となる  
精悍な面の若武者天牛は  
まひまひは夜気を好める有肺類  
そのかみの海恋ふ月の渦巻貝（かたつぶり）  
宇宙（コスモス）の誕生の謎蝸牛  
蝸牛手にして宇宙膨張説  
少年の溺愛鋏形剣闘士  
少年の羨望鋏形剣闘士  
暁斎の蜘蛛出づ月の怪しき夜（河鍋暁斎）  
妖怪の親玉何故か女郎蜘蛛  
月下の蜘蛛昔京都に天誅組  
優曇華や早々逝つてしまふひと  
優曇華や早死家系の裔にして  
お隣に做ひこちら水打てり  
水打てば庭木喜ぶことしきり  
暑き日がやと収まり町雀  
電線に雀も納涼貌をして  
ほっとせる貌を納涼夕雀  
かなぶんのその実（じつ）よからぬ虫と聞く  
かなぶんを音として聞くよからぬ音  
かなぶんを色として見る至福のいろ  
黄金虫吾が掌（たなごころ）蹴りあるく  
ぶんぶんやぶんと飛び来し艦載機（空襲警報下、  
母幼稚園に迎えに来ること再三と聞けば）  
源五郎吟行会など催したし  
螻蛄鳴くや疎遠となりし朋（とも）らの貌  
尺蠖や擬態は怪しき商ひにも（詐欺頻発）  
蟬の背は天平の世の勾玉いろ  
子子や荒るるに任す平屋住  
芋の露面白ければ覆す  
群るゝ蚊の真只中に入ると知る  
意を変へて土橋に止まる糸蜻蛉  
尻のさき待ち針いろの糸蜻蛉  
石階を蟻戛々とあるくなり  
台所の羽目板渡りごきかぶり

油虫厨をちよろちよろ醬油いろ  
烏蝶兀と来魔王の使者として  
炎天を天道虫の活動家  
挟虫ゴミの仕分けは細に入り  
天牛の髯立てて哭く虫籠の隙  
一人舞台ひとり演ずる火取虫（俳句芸能説）  
血を吸うてあからさまなる藪蚊の腹  
昼寝には躰の馴染みある畳  
鉢植えの朝顔にゐる子蠶螂  
夏風邪に昇れる月のうすぼんやり  
唇のごとくなめくじ歪みけり  
夕餉に腹足りて出づれば夏の月  
この匂ひ鮓の煮付け夏の月  
街覆ふ燈火の余熱夏の月  
西瓜喰ふ胸をはだけて一家族  
枯らす鉢長らふる鉢夏百日  
暑に徹るこゑてきばきとヘルパーさん  
鉢に水遣りては介護めく日々よ  
立ち枯れし鉢また一つ殖やし夏  
金魚掬ひまだ諦めぬ姉の意地  
花火セット取り合ふ喧嘩に負けし汝（妹）  
枯れし鉢一所に集む早かな  
凌霄花散るに興じてはめ外す  
昼寝してカタクチイワシの群るる中  
宙ぶらりん愉しむ凌霄暢気な花  
陸（くが）にイワシ片寄せ黒潮大蛇行  
ひまわり苗身丈に余る支え棒  
翅休め昭和の遺物扇風機  
小回りがきいて当世の扇風機  
初浴衣姉と妹は対の柄  
瘡蓋の黒くかさばる大暑かな  
赤黒の黒の金魚を追ひ回す  
追ひ回し遂にデメキングットの子  
がさつかせ茂みの虫を捕る雀  
茂みより大暑の雀頭覗かせ  
大樗邪魔して夜店その脇に  
大木の樗に隣る夜店かな  
金魚より射的に移る夜店の子  
祭子のぼけつとうたた寝せる寝顔  
快音と共に昇天腕の蚊

金魚屋のまだ水張らぬ槽（ふね）二つ  
境内にいの一番の夜店組む  
とびとびに埋まる社の夜店かな  
凌霄花こともあるうに火急の用  
盆灯籠細書き薄揚げたる  
白服の取り出し易き内ポケット  
新旧の創をまさぐり丸裸  
指の間に残る大暑の薬粒  
向日葵の一日一日の育ちやう  
昼寝覚浦島太郎然として  
肋に手やりて涼める門ほとり  
白木槿もやもやと昼過ぎにけり  
盂蘭盆の漢方薬を嘸み下す  
元氣づけ赤紫蘇巻のにぎり飯  
塗箸の貝の浮き頭つ大暑かな  
朝曇蛇口の締め悪きかな  
髯剃って大暑の無聊かこちけり  
髯剃の掃除にかかる朝曇り  
朝曇汚る眼鏡の球（たま）を拭く  
生水のなまあたたかき朝曇  
ポケットの小銭ちやらちやら炎天へ  
莫迦に鳴る風鈴呼んでも出て来ぬ家  
莫迦となる錠や西日の硝子窓  
帽子などなくてもへっちやら炎天ゆく  
選句稿大暑の脳天澄まし選る  
艶消しの利休鼠の扇風機  
扇風機笑ひ始めてピタと止まる  
サルビヤの照り返す赤サルビヤへ  
早年木綿の肌着売って居ず  
山車に蹴く子に又蹴きて俄灼け  
ちりちりとか黒に巻きて早草  
風鈴の黙ったまんま救はれず  
風鈴の音の拡がりて拡がりて  
瘦身の肋叩いてみても溽暑  
ぶつけたき思ひ抱えて大ひでり  
骨の折れしは孫の仕業か莫迦団扇  
家居とは無言なる行大ひでり  
床擦れの我が身離れぬ早かな  
また一鉢枯らしてしまふ早かな  
大早介護に振り回されどうし

油照介護は底なし沼に似て  
裸仕事疾うに脂の切れし吾  
ぎすぎすした物言ひになる油照  
油照起死回生の一手欲し

片陰に身を細らせてゆく墓参  
寝返るたび暑つついなあとまたも云ふ  
もう一軒寄ってゆかねば日の盛

日盛りをなほゆく道の放射熱  
土けむりばつぱつと打水ぼたぼたと

打水のぼかぼか木の音草の音  
打水の舗道を馳せて蹄の音

納豆のやっかいな糸朝ぐもり  
サルビヤの彩の落ち着く半日影

● HAIKU200507/son06

ざうざうと掃除機かける朝曇

夏バテに百合根などよき煮てお呉れ

カサブランカ今朝肅々と一花足す

かほる方振り放け見ればカサブランカ

羽織るもの一枚持ちて夏のシネマ

夏期講座先生三角定規もち

体調を崩してだうする焼蒜

体調と相談しつゝ氷水

わーんと来る蚊を払ひ退け庭仕事

この家の蠅懇意と云ふにあらねども

変化朝顔桔梗咲きてふ一異色

西瓜大玉予定が狂ひだうしやう

しけた音残して揚がる昼花火

ほんたうにごきぶり死すかとおつきみる

考えもつかぬ翔び方揚羽はず

目の届くところに鉢もの大早

冷蔵庫内部は蛙の胎に似て

往生すぎうぎう詰の冷蔵庫

手を変へてトマトの料理朝昼晩

揚羽蝶猫の見てゐる鼻先を

肉じゃがの先づは漁りし大暑の肉

ご無沙汰の鰻に箸をつけにけり

鴟の朝頭は機敏に立ち働く

家暑し駄菓子にろくなもの無くて

あっけなく木槿首垂れ昼つ方

三度の飯うなぎを忘れをりにけり

割かれそむ鰻を淋しく見てゐたる  
鰻あはれ白身晒して一文字

曉蛸桐箆箆にも沁みにけり

曉蛸三度四度は啼かざりき

曉蛸遠嘶きに似てゐたり

諸鳥のこゑの中抜け曉蛸

蚊の罅一掃したる庭草取

庭草取敢行一大壮挙なり

曉蛸四声が程に途絶えけり

曉蛸而して諸鳥音を立つる

朝もぎの「つ」の字「く」の字のへぼ胡瓜

へぼ胡瓜ヘルパーさんにお裾分け

あっけなき曉蛸でありにけり

先立たる人に蜘蛛の困幾つもや

金柑の花咲く平屋の明け暮れに

葬に天気予報の筒抜けに

大鉢に残る金魚と一人住まひ

戸の開けたて五月蠅く家に蚊を入れず

朝顔は棚を伝へる軽業師

次々生る自家製胡瓜持て余す

疣々の胡瓜蝦夷（えみし）の勾玉めく

突き呉れる心太待ち夫婦もの

葬の明日の愉しみ七苔

濡れ釣銭心太屋の親爺より

商店街海鞘を横目にうち過ぎぬ

御不浄の真横より射す大西日

仏飯を盆の雀に頒つ朝

夏掛の柄古ぼけてごろ寝かな

丁寧に生きて蓮のこちら側

百年を生きて蓮のこちら側

朝曇妻に云はるる食べこぼし

鎌倉にて一、二争ふ紫薇（しび）是は

寺々の中でも出色この紫薇は

昼寝覚切り白みてそっけなし

定食屋蠅帳があり勝手にとる

定食屋おばちゃん自慢の肉豆腐

連なれる夾竹桃のうへの海

だるさうに横たはりゐる夏の海

白詰草五月の風を順送り

莫迦咲きの白粉花に路地狭まる

芭蕉は風送り銭湯明日休業  
銭湯の西日の当る脱衣籠  
銭湯の柀目涼しき下足札  
まだ明るさ保つ夏空湯屋を出づ  
梔子にことしの早間違ひなし  
擬宝珠に程よき日陰独り住む（義父）  
砕け散る波のかけらかスジ揚羽  
いつの間に梅雨立ち去れる海猫の海  
青芭蕉風にはためく湯屋の帰途  
銭湯で売って居るなり汗疹取  
銭湯にあびせ倒せる大西日  
高窓より夏日のそそぐ昼の湯屋  
鼠の貌拭ふごとくにシャワー浴ぶ  
銭湯に独り初老の髪洗ふ  
西瓜の出来上出来で無しスカでも無し  
寝返るといふ事反転揚羽見て  
それではと云ひて大玉西瓜割る  
頼まれてごきぶり二匹討ち取り来  
バター一塊ぼとんと落とし盛夏のパン  
一夏経し庭木のまるめる月夜かな  
はつきりせぬ虹の七彩折衷案  
村役場教へて呉れし芋煮会  
分け遣れる朝顔 仕立て方は斯う  
厨窓朝顔の蔓昇りくる  
人の目に留まるところに朝顔植う  
介護支援見やう見まねで茄子汁など  
退職の挨拶兼ねて夏見舞  
森閑と真夏のコンソメスープ皿  
藪っ蚊めそこは固いぞそれは肘  
伸び盛り向日葵にくる一来信  
見た目より重たき桃でありにけり  
ハイカラで明治生まれでセロリ好き（義父は慶應  
出身にて初期アイスホッケー選手なれば）  
網走の市にて初見オオカミウオ  
これと云ふ年の越し方なくて暮  
甘党で饅頭好きの生身魂  
虫のこゑ百匹居れば百通り  
はらからの話おのづと盆支度  
おのづから話題は其処へ帰省のこと  
肘走る蟻三度目に払ひ退け

暗闇よりカサブランカの香のふい打  
山百合の匂ひを削ぎにザツと雨  
もぐもぐと朝食弾み胡瓜揉  
孟蘭盆の仏飯一夜にて乾ぶ  
ごきぶりを追ひ遣る妻は総身もて  
旅先を括弧でくくる夏見舞  
家居して大いに退屈水中花  
いちにちの区切りをつけに大夕焼  
昼寝などして時過ごす家は船  
船降りると庭へ出て夕涼み  
菓子袋くしゃくしゃにして暑を譏る  
黒揚羽大仏の背に回り込み  
昼寝より覚めてはてさて妻いづこ  
此処天界白さるすべり咲き出せば  
鉛筆はH金亀虫の固さ  
鉛筆もて転けし金亀虫を返す  
早鳴のまだお粗末な蟬声よ  
蟬ごゑのまだ幼かり防潮林  
豚かつの旨き盛夏となりにけり  
大暑かな醤油やたらにかける癖  
水切って醤油をかけて冷奴  
トマト好き塩気躰に染みつゐて  
唐竹割西瓜半分彩見て買ふ  
白塗のバルコン滑る蝸牛  
趣味悪き匂ひなりともカサブランカ  
通ぶりにて真夏の紅茶奨めるも  
夏旺ん紅茶はベルガモット入り  
罐入りの某セレクトション朱夏紅茶  
あらためて夏に真向ふ日とおもふ  
生身魂好き嫌ひなく膳のもの  
生身魂野菜サラダに目の無くて  
生身魂盛夏の皿に手を伸ばし  
声掛けて入り来真夏の検針夫  
躰より気力の弱り冬瓜汁  
向日葵のこのぎりぎりの萎れやう  
定年後の一家の経済茄子も植え  
黄泉平坂（よもつひらさか）むらさきみそ萩灼け  
灼けて  
蓮の台（うてな）に蛙極楽疑はず

夏旺ん食い気も旺んカツカレー  
でっぷりした夜店のおばちゃん焼蕎麦焼く

塩醬油振りかけ喰ふや夏の生もの

老け方を気にする山妻心太

店構先づは諾ひ泥鱸鍋

風の切れ目はつきりせぬ日の鉄風鈴

花火帰りの客焼鳥の名を羅列

水鏡輕鳧の母子の相似形

水馬ちりぢりになり遂に一匹

山百合の頭重くて前のめり

朝顔のけふは五つと朝餉の膳

● HAIKU200507son07

匂ふ海これより花火一萬発

掃除草取夏休み最初の日

団扇の辺通りすがりの蟻一匹

蟻渡り始む団扇の山河かな

団扇と蟻何の関はり合ひもなく

くらがり何運べるや真夜の蟻

この涼しさ訝り肌着に手を通す

磔刑のごとく凌霄首を垂れ

夏着は五枚年金暮しはシンプルに

卸かけ麻のしちめんどくさい肌着

遺品よく片づきをりし夏座敷

パンザイのこゑこびりつく仏桑花（サイパン）

素焼鉢たっぷり水を吸ひ夕涼

生身魂梅干半切れにて一膳

一寸づゝおかずに手をつけ生身魂

門柱に婆の上げたる梅干筧

水中花葉は処方箋に基づき

往き戻り水打足せる下駄の音

突っかけてしまふ蜘蛛の囀ここに又

忘れがちそれでも金魚生きてゐる

萍が残り金魚は死に絶えし

大き地震暑気に呆ける身を揺りて

風鈴のあることさへも気づかぬ日

麦湯の壘放りっぱなしにせしは誰ぞ

水羊羹心残りの匙置くも

蜜豆や寒天ばかりが残りけり

土産には無難なところ葛餅を

葛饅頭何が喰いたきかと問はれ

庭草の一葉一葉の夏の露

腹當のその後の行方目で追へば

腹當をして大事とる齡

腹當が姿くらます蟬の昼

汗みどろ千屈菜なんぞ剪り出して

暑氣払やるかと妻の探り入れ

暑氣払けふもやるかと山の神

籐椅子に腰を浮かせてまた余震

片膝立て地震に身構ふ端居びと

甚平の腰を泳がせ地震最中

朝顔に霧雨ありて凝る微粒

蜘蛛の糸こら辺りとたたつ切る

分かんが蜘蛛の巣張るはこんな日ぞ

蜘蛛の巣はえてしてこんな日に張るぞ

地震あまりに激しく網戸に手掛けしまゝ

大相撲地震の画面に切り替り

向日葵の育つを待ちて家に籠る

門前に蜘蛛の巣張るとはとんでもない

地震に揺れ金魚と年金暮しのわれ

雷にい行くうしろを断たれけり

夕立に何處か伸び伸びして晩酌

晩酌や二日続きの冷奴

土用の地震積木のごとく揺るる家

土用の地震開き直りてやり過ごす

夕餉の膳土用の地震が話の種

大鯰に跨るこち地震の背は

筆頭に当地の震度土用地震

土用三郎地震の爪跡速報す

地震ありて金魚の水の揺れ返し

一月のその句を褒める向きもある（二月の川一月

の谷・・・）

逃げし後また来てわれを弄する蚊

送火焚く後姿に闇の憑く

送り火のひとりひとりのうしろ闇

迎え火は共に送り火はひとり

妹より相撲の招待ぼた餅式

素裸にて地震の最中におもふこと

ただ魂消土用の地震のなすまに

夏呆けのと或る日地震に襲はれぬ

浅蜷腕押さえつ地震の止むを待つ

ぶれる画面鯨は昼寝より覚めて  
ところどころ言葉が消えて大夕立  
払暁の蝸聞ける厠窓  
足枕左右の臍毛見比べつ  
なほ使ふ骨の砕けし古団扇  
泡盛や風なまぐさく空怪し  
鶏頭の殊に異様なその頭部  
酒遣りつ盆ともなれば朋のこと  
外に向日葵内に漆黒扇風機  
竹騒に追はれて谷戸の黒揚羽  
炎昼の四、五軒先で何か割れ  
真炎天ピシと音して割けるもの  
竹割って早の天の空ら響  
どれどれと見上げて蟬の鳴く樹これ  
わが庭の一樹は蟬の中継所  
樹が鳴ってゐるやう十あまり列なす蟬  
上ずって蟬の何とも幼かり  
そこにある本を開いて蟬の昼  
庭に降り立つのみなるに蚊に憑かる  
急停止西日の電車軋みけり  
諸揚げゐる最中話しかけないで  
河鹿鳴く川の半ばは暮れてゐし  
音ならぬ音を聞き分け生身魂  
蟬捕りの声に特徴近所の子  
生身魂白雨来るぞと言ひ退けぬ  
生身魂のみに聞こえて遠の音  
向日葵の茎撥ね浴びて雨烈し  
水の上に白さるすべり至福に満ち  
一羽とて通ふ翳無く梅雨の島  
薺の葉叢の中に凋む花  
四十九日早過ぎ庭の茂りかな  
義母逝くと思へぬ手塩の茄子が咲き  
背の辺りに止まる藪蚊を打ってください  
泰山木花錆び初心失せゆくも  
白切子闇に漂ひ出しさうに  
汲み立ての真夏の朝の薬水  
葉害もちよつぱり真夏のくすり水  
森閑と炎ゆる杜の無数の石  
草刈って追はるゝ藁のその大腿  
お隣のひよろひよろ胡瓜分たれし

葉陰よりわれを窺ふなめくじり  
灸花廃る山河を目前に  
君の磊落南瓜の花に相通じ  
一驟雨家族会議を要約す  
夕顔の妙なる闇を蛾の羽打ち  
誰も言ふ嶺に立つ虹の完成度  
蝸牛無口は美德の一つなり  
藪つ蚊か脛に感じる圧少し  
ぶんぶんは緑の鎧着し騎士（ナイト）  
雑多な色混ぜて幹描く大夏木  
幹ずどんと徹りて夏の一巨木  
ポンポンと咲いてポンポンダリヤとぞ  
ハーモニカ上手な軍曹シネマ夏  
新涼の息小刻みにハーモニカ  
夏瘦の肋凹ませハーモニカ  
秋風と傷痕軍人はるけしや  
肺活量大きく涼しハーモニカ  
ラ・クンパルシータ晩涼掻き立てて  
巻き舌に夜涼呼び込むエルチョクロ  
真夏夜の弦切り刻むカナロ・エン・パリ  
夏休みこどものこゑの戻る路地  
鉢枯らす大暑うらめし手にシヤベル  
絶対音感てふは何ぞやがちやがちや鳴く  
● HAIKU200507son08  
昼寝覚檻褌が起き出す如くなり  
棒のごと瘦軀横たえ暑の極み  
暑の極み肚を絞りに油蟬吟（ユセンギン）  
水中リコーラン聞いて遙かな目（追憶 ジャカル  
タ）  
惣領に生まれて夜濯ぎなど不得手  
われの首ひねるを真似ていぼむしり  
トマト切るその時ふつと桃太郎  
より深く首傾げ瞻るいぼむしり  
前門の虎のうねりを暴れ川  
暑はいまだ序の口ご自愛なされよと  
母老いて盆の薬罐を空ら焚きす  
しつかりと降る雨嬉しひまわり苗  
水撒こかそれとも降りそな雨待とか  
一線を越えてどどどど大夕立  
雨不足即向日葵の萎れやう

過保護とも云ふべき添え棒向日葵に  
雨不足崇りて甘味足らぬ桃  
見た目で買ふ西瓜互に言交はし  
遠くから見て事足りぬ海開  
買物のなかなか決まらぬ子や大暑  
ヘルパーさん送り戻りてまた昼寝  
百日紅尋め来て花は半ばなる  
蟻螂の子と吹かれぬる少しの間  
大風に何處へ落ちしか子蟻螂  
炎天来し笑顔が家にながり込む(孫)  
勁き風徹りさざめく白木槿  
八畳と六畳南風の一続き  
初蟬聞く妻と共々顔見合はせ  
しまひまで定かに鳴いて庭の蟬  
はつきりと蟬鳴きそむは今日のこと  
葛餅に色めき立ちぬ艶咄  
傷む箇所自分の皿に桃食うぶ(妻)  
風通りよきが自慢の盆の家  
大暑来てさらに脾肉を削ぎ落とす  
はかどらず羽蟻出づ日の一夜漬け  
麦茶などのんで末っ子夜いつぱり  
脚早と聞く台風その雨来  
台風を明日に雨の前哨戦  
葉っぱ打ち颱風前夜の雨ばちばち  
夕立にするりと下着総取り替え  
へたる夏何かと云へば生卵  
ゴム引つ張りぱちりとズボン下鳴らす  
炎昼の紐の要ること庭仕事  
アンニュイと云ふ奴嫌ひすまし鴉  
羽蟻退け遣れば又来て小奴めが  
羽蟻落ち紙面にぎこちなき歩み  
べとべととしてゐる西瓜のおつりかな  
密を吸ふ揚羽に百花のフルコース  
夕立のあと何處となく大胆に  
大夕立などなくその一油蟬(ユセン)  
へんな時颱風が来て鉢取り込み  
樽神輿来て何がしか祭寄附(子供会)  
台風詠夕立の句にすり替はり  
夕立となりて万象雨隠れ  
夕立に容あるものみな打たれ

二階より母の見てゐる大夕立  
てのひらを返すごとくに夕立来  
夕立の涼気杉より檜より  
納まると思へば俄然大夕立  
夕立のみるみる上がりつつびんしゃん  
降り直す夕立推敲せるごとし  
夕立のいま本降りとおもひけり  
夕立といふ一快挙ありにけり  
夕立の端に薺小さく咲き  
夕立といふ快音を広げたる  
地を抜かんばかりに釈迦力大夕立  
駆けりくる大夕立に組み伏せられ  
妙に明るきものよ台風眼のなか  
大写しにして台風の目玉焼  
目まぐるしく映してけふの台風禍  
台風予報立ち見してゆく勤め前  
予報士の何度もヘクトパスカルと  
台風来一時毎に空眺め  
時化啖ひ羽田成田の空の便  
上陸の懼れづくめの台風報  
上陸の懼れうんぬん台風報  
波逆巻く台風映像お茶の間へ  
朝餉の茶台風接近前にして  
台風のこんな筈では雨に斑(むら)  
台風に先手打ち鉢取り込みぬ  
台風を出し抜く遊びなど無きか  
台風の雨の林立小漁港  
百姓に馳ごつこの台風来  
台風その規模風鈴きりきり舞  
台風これから日本一騒動  
台風の小康状態いつ脱す  
大写し見ての通りの台風禍  
台風これから痛めつけらる樹々  
飛びさうなもの先づ優先時化支度  
風害は丈なすものに台風下  
買ひ置き煙草とライター台風下  
台風のそろそろ時折烈しき風  
台風はあなたの空からくるかしら  
台風の前宣伝が効きにけり  
台風の飛来かうしてゐるうちにも

対峙して雨台風とカサブランカ  
台風の魁の雨いよいよや  
これが台風関東一円つつむ雲

台風の棒雨萩菊百叩き

台風を見てみて雨のとぼつちり

煙草買ふ間ありて台風中だるみ

台風の眼のなかジメジメしてゐたり

盆支度ならぬ台風支度せり

台風下取り込む鉢に限りあり

台風直下こんなものかと空見上げ

総雨量弾きてアメダス活躍す

台風来植木に施す紐いろいろ

台風の中出て垣根手当せり

忍び寄る巨大台風蜘蛛知るや

台風支度その他手をうつもの無きや

台風眼精子のごとくのたうちて（台風図）

黒く低く時化雲ながれ相模灘

台風その牙チャンネル切り替えても

台風の箇条書きなる注意ごと

ワンワンと犬鳴き台風中休み

● HAIKU200507son09

とてつものなき蚊取線香台風図

雨上り胸にすんと落つ涼気

つまらなきものつまらなし暑の極み

台風報屋根に登りて転けし人

雨台風ネオンを映す交差点

良夜かな家は明りが点りてこそ

ふしだらな部類に入る凌霄花

上海が出て来て困る鳳仙花（たたかひは上海に起

り居たりけり鳳仙花紅（あか）く散りゐたりけり）

隙間から花の覗ける鳳仙花

鳳仙花防空頭巾を被る世の

千人針知る人絶えてほうせんか

また一つ湯屋が潰れてほうせんか

この道は湯屋に抜けらるほうせんか

サルビヤは機銃掃射の火噴くいる

台風の洩れなく襲ふ浦十戸

夕立のつつむ音こそかなひけり

生身魂何出て来てもマヨネーズ

かりかりと生もの噛めば大夕立

台風の只々だっぴろき空

われも亦傍から見えてゐる大夕立

早星創は乾かすこと大事

ただ灼くる海のみ漁業（すなどり）成り立たず

七号てふ台風いやに大きかり

台風映像八丈島を結ぶ便

時化波に乗り越へらるる防波堤

ダイヤ乱れに乱れ台風一過かな

文机を蟻の彷徨ふ台風下

パジャマ這ふ蟻を畳に下ろし遣る

台風に追はれ来し蟻畳這ふ

台風その眼は何處に冥らむ空

台風の只中啼けり狂ひ蟬

台風の眼のなか外燈点りそむ

台風下足のベタつく厠板

台風の中の蝸嘘のやう

台風の大風呂敷に呑まれるな

一灯の他は台風圏の闇

茅花咲き旅は出逢ひの旅に尽く

黙々とすすむ台風房総沖

求道的たること今も雲の峰

雲の峰崩るることを厭はずに

艱難は切り抜けてこそ緋のカンナ

音を上ぐるものこのゑ聞く暑の極み

蜻蛉を捕らふにへんな手つきかな

考へて大暑を味方につける策

程々に手を抜くことも鎖夏のうち

真つ当にあたらぬがよし朱夏万端

午は昼寝に徹すと決めてやせつばち（自画像）

凌霄は途方に暮れるまでもなく

濯ぐべきものくらがりの一隅に

台風の過ぎし翌日空応ふ

さみどりに秋をさそひて長ける草

秋めくといふ空の下授かる句

秋めくといふこゑ空に吸はれけり

もう了る花と秋待ちゐたる花

秋はそこ光遍く徹るそら

台風を送りからりと晴るる空

うなばらの涯まで台風一掃す

万象の斯くあきらかに野分晴れ

日本晴れ胸の悶えのとれしごと  
雨撥ねて葉ばかり大き秋海棠  
秋空といふには少し風足らぬ  
朝顔が咲いたと一声厨より  
朝顔の蔓伸び過ぎて梢越えぬ  
野分あとこんなな晴れて目の遣り場  
秋草といふには一寸早からん  
台風のおとの日差しに疲れけり  
もつと澄む海よと海鼠の独り言  
豊饒の海を海鼠の語りぐさ  
西日に素肌晒され人體標本めく  
べとつくとて糞暑きとて麦湯のむ  
ものさしの目盛薄るゝ大暑かな  
台風に足止め喰ひし薺咲く  
蒲焼は財布と相談中国産  
晩酌に鰻のモツを奮発す  
風死すなか脛毛の薄きところかな  
日盛の神奈川大会投手戦  
この暑さお手あげ水をのむばかり  
水たっぷり飲みて眠気と暑氣払はん  
丑の日の暑さに閉口口「へ」の字  
水飲みに起つ炎昼のただ無聊  
牛よりも鈍し大暑の身のこなし  
朝の蚊の動き鈍しよ打たずおく  
草刈らんと踏み込む藪蚊の梁山泊  
生身魂パンにバターのあしたの餉  
入荷せし新車の向日葵福助めく  
花小さきは去年の種蒔き朝顔よ  
梅干に食のすすみて一膳半  
サーファーに勝手の違ふ風が吹き  
葬の一斉咲きといふに遭ふ  
午頃まで軒の朝顔ながらへぬ  
朝顔の蔓に誤算のあり漂ふ  
夕立にちからづけられ食すすむ  
聞くべきは聞き諾ひて生身魂  
じつくりと聞く耳持てり生身魂  
一言も挟まず聞けり生身魂  
天界に遊ぶ座睡を生身魂  
座睡して楽土に遊ぶ生身魂  
西日中宇内に徹る蟬のこゑ

冬瓜の面々授々に他ならぬ  
そこに在るまゝの冬瓜師と仰ぐ  
炎ゆる昼人に二つの呼吸法  
色褪せし絵日傘吹かれ救難所  
遊泳は禁止赤旗なぶる風  
潮浴びのでぶちゃん波を跨ぎゆく  
ぴっちりと水着着込めばいるかの胴  
● HAIKU200508sonoi  
手酌して夏夕雲の蒜いろ  
共に暑を乗り切りし妻仰ぐそら  
夕雲を見つゝ涼とる妻共々  
父見舞ふ当番の日や朝から蟬(妻)  
風鈴の喃語寢覚の耳にかな  
色褪せる日の来て週末百草  
のうぜんになまぐさき風起ちにけり  
風起ちて一息つきぬ凌霄も  
向日葵の育ち盛りの大きな葉  
ゴミ出しも生活(たつき)の一部朝曇  
おのづから団扇納まり末期談  
揚げものの蒜肴に八月尽  
晩酌を了へしと蒜臭き息  
揚げものにビールしんどき日でありし  
今日送るビールや妻もお相伴  
今日乗り切る気概を籠めて朝の蟬  
災難は妻を掠めしごきかぶり  
顔顔顔染めて花火の彩尽し  
どよめきが洩れて花火の一惑星  
サルビアやその場しのぎの日を重ね  
うだる日を背を押すやうに送りけり  
一日一日その場しのぎの夏百日  
夕風を呼び込む萩を待みをり  
葉鶏頭乱のごと風起こりけり  
仏壇のおさがり貰ふ盆雀  
樋の端掴み鳴らせり盆雀  
新盆の家にひよっこり雀現れ  
盆花に混じりて長ける名無し草  
薺を見て来て新聞読み始む  
夏休うだうだ過ぎしてもう半ば  
墓穴(はかあな)と墓穴(ぼけつ)は別個終戦日  
蟬の穴数ふることをまだ止めず(孫)

蟬の穴探しきりなしもう止めた  
捕虫網行進曲のごと進む  
蟬捕上手この近所では肉屋の子  
蟬の穴義母葬るは一と月前  
止まりては発ちては八幡桶の蟬  
したたりを許さぬ蛇口終戦日  
蛇口栓固くひねりて終戦日  
水のみに起つ昼蟬のしまり無き  
とりとめなきパズルなどして暑を凌ぐ  
岳父の世話そんなこんなで一夏過ぐ  
真裸の腹に布きれ当て昼寝  
ギヤマンの鉢を愛でつゝ心太  
蒟蒻屋今も商ふ心太  
流鏑馬の八幡かけて一の矢を  
蛸に鳴きねばられて夕日の樹  
コンビニに蟬と蟬がら持ち込む  
蟬ごゑの果てはよれよれ日は斜め  
おぞましき翅音ぶんぶん葉を食みに  
ぶんぶんの緑塊翔んで生きづく夜半  
ぶんぶんの裏の一面垣間見て  
空蟬の一つひつつく常夜燈  
八方に夏の櫂の根張りかな  
蟬の穴大盤石の根を除けて  
森閑と反りを深めて夏櫂  
歳時記の蠅の例句も古りにけり  
大木にとりつき鳴ける蟬反り身  
落蟬の戻りの道にもう動かず  
昼寢覚網戸に蟬の張り付きぬて  
青萩に当りてあらはなる風筋  
青萩に風納まれる寶戒寺  
ふいを衝く風に青萩ぐらりとす  
青萩をとことん吹いて吹き止めず  
夕方にもう一度出て蟬捕す  
灼けるだけ灼けし空あり青くわりん  
盆の家いい塩梅に風が抜け  
自家製の初生子茄子の器量佳し  
向き替えて一転萩を起こす風  
天上より萩を押しつけ吹ける風  
萩に風姿乱せる萩に風  
夕づけば庭石十あまり涼生めり

湯を浴びて葉付き生姜を酒のつま  
しじみ蝶ちらちらする中夕風起つ  
向日葵のぐでんと水を欲しがるさま  
水打って狭庭十坪の草木の涼  
己に活（カツ）入るごと水打ちにけり  
毛虫ごと一葉ちぎりて踏みにする  
蟬の鳴く埧塙のメリーゴーランド  
捕虫網ぬうつと蟬の背後より  
葉を漁る悪の権化の金亀虫  
草木に仕切り直して初風吹く  
夕蟬のなほながながと語尾を曳く  
野分あと仕切り直してのうぜん咲く  
勝ち負けをうんぬんしても百日紅  
餉を問へば茄子の何とか料理とか  
夕蟬の一喧騒はた一幽漠  
大きく風起たしめ萩の一風趣  
夕闇の萩を経て来し風ならむ  
秋初風年金暮しに慣れ親しむ  
秋刀魚焼き年金暮し帳じり合ふ  
ぶるぶると鳴かぬ朝蟬木を替えて  
萩叢の裾まくられてその涼味  
萩叢のうねりしてその涼味  
辻棲合ふ一落蟬と樹の位置と  
雨上がりけり朝蟬の試し鳴き  
雲の峰けふ何處に聳つ空の涯  
檻樓のごと寝ねて夜蟬の短鳴き  
朝蟬の鳴き出すまでの樹のしじま  
女郎花容れて一景なまめきぬ  
朝の雨大暑ととても思へぬ日の  
雲の峰あら崩れ始めけり  
女郎花右はいもうと左はあね  
女郎花すらりと姉は伸び盛り  
けふの暑さ鰻のぼりと聞き凹む  
肋浮く焦熱地獄とはなりぬ  
テロ企つ奴は穀象より劣る  
穀象を見ぬ米櫃は淋しかり  
すずしげに古漬噛むも齢なり  
炎昼の古漬噛めば澄みし音を  
真夏日のがちゃんと痛に障る音  
昼寢覚より起ちまはりの物掴む

向日葵の乾ぶ葉大き広葉に伍し  
向日葵を一呑みにして険しき雨  
湯上りといふししむらの澄み極まる  
大象の大暑の牙の薄光り  
脂っ気もうなき髪を水洗ひ

盆に入る朝の煮炊きの火をながめ

川堀りの鯰を宙に抛り上げ

大井川渡りざりがに採りにゆく(少年時代 回顧)

連結車輛の数の当てっこ終戦日

鉄路に釘均らす遊びを終戦日

膝に鳥籠疎開先より戻る汽車

夢中にて復員列車がたがたん

読みし記憶ありあり大和轟沈譚

小便をしてから蟬の発ちゆけり

その本は今も何處かに終戦日

桃の核(さね) 囲める蟻の真っ黒け

桃の皮張り強うして水弾く

蟬の穴無数穿ちて杜虚ろ

満月のいろを頒たれをみなへし

空蟬も世を観るときは斜に構え

甚平着て世の大勢に疎きひと

空ら響きして脛の蚊をうち洩らす

滾る暑の底の方より油蟬

盆が来てすぐ浮かぶ貌破顔なり

肋叩き朝顔の花殻摘み

盂蘭盆の空より鳥ごゑなまめかし

雲の峰肋バタバタ叩きみる

炎天に思ひ浮かばぬもの名前

見つけるといふより見とがめらるる蟻

湖れみし蟻のその後を見届けぬ

かまきりの子に風向きを教へらる

暑にああと四、五軒先の赤ん坊

耳法楽あたかもそこに曉蝸

籾殻の音の中なる曉蝸

曉蝸一つ遠くに際立ち来

灼け灼けて少し艶なり紫薇の幹

煮付けの香朝顔棚の隙間より

西瓜汁零してもよき新聞紙

桃剥くと妻のむっちりせる上肢

空蟬の爪の切つ先岩に立て  
睡蓮のいろ脱けてをり昼只中  
風死すより熱風がまし丸裸  
一斉に褒めそやされし葉鶏頭  
褒めちぎる脂の如き穂の芒

● HAIKU200508sono10

百日紅嘘を築地の御門跡

蚊が刺しにその手は桑名の焼蛤

毛虫付き驚き桃の木山椒の木

昼寝して何がなんきん唐茄子かぼちや

墓に何と言葉をかけたらよきものやら

後退る方は当方墓でなし

感服のひと言墓の面魂

墓夜を上手ぬ使ひけり

噂の墓出づとよ「さあさ、お立ちあい」

言の葉の力墓より教はりぬ

墓荒唐無稽の世に生れて

言の葉のでつくわすとは墓にこそ

隠棲の仕方を墓に教はりぬ

断るに墓の威厳を借りたきもの

へどもどと墓に遇ひたること申す

葉隠りに世の礎のごとき墓

墓が家にわれらが間借りしてゐるよな

墓とことん措辞にこだはりて

墓詠もふとすれば擦り抜けて

墓動かざること山のごとしとも

墓去れり熱き視線を背に浴びて

年とりて世事うち忘る墓

墓我を見上げあなたが主かと

墓うしろを振り向くこと無かり

墓我にそっぽを向いたまゝ

墓勝手知ったる藪のみち

常闇の葉陰に安んじ墓

遠方より朋来のごとく墓

賢愚邪正貧福貴賤(けんぐじゃしょうひんふくき

せん) 皆裸(浮世風呂)

裸体(はだかみ)の前を押さえて恥らへる

日盛りの町の湯に入り私(わたくし)なし

人の前御免なさいと素っ裸

銭湯の徳を数えて赤裸

裸形（はだか）にて湯浴び孔子も権助も  
お粗末を悪声ながら勤む（蟬森の石松 三十石道  
中）

寿司喰いねえ江戸っ子好みの穴子寿司  
燈火親し浪曲事典繙けば  
虎造の侠客ものに夜の長し  
長き夜の中からだを絞り浪花節  
秋声一縷臍下丹田（せいかたんでん）より出でて

（鞭声粛々・・・）

つれづれなるまゝに蝸鳴き納め  
雨乞踊法螺貝ぶおうと吹ける中  
虫音のなか宦官国を乱す件（くだり）  
すさまじや平家の顛末弾き語り  
奢る蟬偏に風の前の塵

扇風機湯屋閑散としてゐたり  
夜の秋湯屋の板間の節くろぐる  
蜘蛛の囀に蟬の片翅夏畢る  
雨風にばらけ初めたり青芭蕉

目に見えて秋の立つなりはぐれ雲  
どう溶きてこの色を出す樗の実  
アフォリズムすれすれに翔ぶ蚊喰鳥（さる俳人に）  
鰻の肝横目に見て過ぐ街薄暑  
舌垂らし秋暑にダアと寝そべる犬  
露の玉朝夕凌ぎやすくなり

蟬の子の縫るに下草手を貸して  
台風禍画面はまさかの土砂崩れ  
今真上あたりか台風小休止  
白粉花ご近所付き合い卒もなく  
昼は蒸し夜はうらはらに虫の鳴く  
夏の日の思い出づくり休暇村  
一人寝のねむりの淵につづれさせ  
しんしんと虫鳴き台風迫る闇

萩の露連ねたやうな数珠欲しや  
このところ断水なかりストケシア  
研ぐ米の釜に張りつく終戦日  
薺の花数記す日記かな  
稲びかりかねての懸念払拭す

一驟雨頭のもやもやを拉し去る  
振れること忘れぬ朱夏の古磁石  
揚花火うち抜きし空締めりけり

揚花火探り当てたる空の芯  
神社より神社見ゆるや遠夏木  
蟬のそこ通りてよきかとまどへり  
風ひようと秋声放つ孔子木  
七草の三草萩葛尾花咲き  
葛咲いてやぶらこうじのぶらこうじ  
夕日に透き五効（ごこう）のすりきれ赤とんぼ  
先回りして曼珠沙華咲きにり

● HAIKU200508sono11

葛切の一縷口中滑らせて  
ギヤマンの器に葛切あるにはある  
白玉にこゑ生き返り「お勘定」  
靴先の落蟬の死を悼みけり  
真夏の夢どうせみるなら酒池肉林  
ネーム入り傘を貸し呉れ生身魂  
夕立あと傘提げチャプリンめく家路  
夢に見てかんかん照りのニューデリー  
海照るとそむけし貌に秋暑の日  
観念し秋暑の路を辿るのみ  
風が起こってよささうなもの秋簾  
ごろ寝して裸の王様すだれ裡  
外（と）に起こることは外（と）のこと秋簾  
外（と）に起こることはどうでも秋簾  
秋蠅は大目に秋の蚊は許さず  
かたかたと何處かが壊れ秋団扇  
考えてもしょうがないこと秋団扇  
寺社方のどの樹ともなくかたつむり  
稲雀発たせたたく寄る田圃みち  
秋の蚊を討ち損じたる音こだま  
力んでは秋の蚊をまた打ち損ず  
だだこねて木馬に乗る子希典息  
かうなりては抜き差しならず秋蚊打つ  
秋の蝶日差しに適ふ翅使ひ  
吹き下ろす大風葛を吹き窪め  
風が湧き走り回れりお花畑  
お花畑眼下に小諸の町が見え  
山野草二、三植え込み秋迎ふ  
あらし去りちぎれ青葉の石畳  
風船かづら葉叢透く日のすいすいと  
梢より吹き剥がさるる秋の蟬

墓所に向ひ歩いてゆけば秋の山  
墓所を守るはらからも絶え鶏頭花  
否応なく老人瓢に佇めば  
秋の風翳を何處かに忘れ来し  
仙人掌の花むくむくと整体院  
露けしの一語に尽きぬ一遍像  
露けしの一語に話しを移し土瓶蒸  
他のことに話しを移し土瓶蒸  
惨報じ写真ばかりの震災忌  
台風の雨の底抜け箱根町  
劃然と内外（うちと）を仕切る青すだれ  
実ひまわり有終の美を飾るかな  
向日葵に花卉の営み果てんとす  
向日葵の明るさよぎり一雨あり  
移る世をはすかひに見て胡瓜搦  
妻が来て剥ぎとりゆける麻すててこ  
秋初風臍毛だらけの臍吹きて（蕪村を偲びて）  
曝書して先鞭をなす野球の句  
雄心を据え千丈の滝仰ぐ  
横槍を入れて榎の梢の蟬  
蛸壺に一喝くれて海の雷  
暑氣払とは重宝なものなるよ  
夏瘦の瘦の一語が韻くなり  
けふいちにち裸でとほす巴旦杏  
秋の蝶石庭飛んでは歩いては  
山寺に来て夏葎見渡せり  
秋水の岩間隠れとなり下る  
岩頭の削ぎ落とされし水の秋  
山澄ませ鳥寄す水に最敬礼  
秋の山割りて出でくる水ふんだん  
楊の辺水量を見て充ち足りぬ  
釣舟草水は百代の過客にて  
水打てば朝顔の根の現はるる  
噴水のもうへこたれてしまひけり  
けふ洗ふもの一つに吾がすててこ  
定年後夏はつとめて早起きす  
瀧壺の轟音に我投げ込まれ

瀑布音壺の形をなせりけり  
瀧水は迎陵頻伽のこゑ放ち  
警策の飛びくるごとし飛瀑音  
磨り減りし廁の敷居士用なる  
独りごち失せ物探す夜の長し  
炎昼の胃袋といふ水たまり  
山はそのあるべき姿映す水  
一油蟬鄙の天地攻め立てゝ  
あつさりと躰抜けゆく夏の水  
さびしさの因（もと）は蜻蛉のつるむおと  
蜻蛉の交む営み古代より  
緊迫のぶだう一粒づゝほぐす  
蜻蛉の交むに倦みて立ち去らん  
つばくらめ描く構図を大胆に  
膝鳴らし起ちて酷暑の水をのむ  
濁りにも馴れ親しみて未草  
何食はぬ顔にて萩の花盗人  
葦の間の方寸の水澄みゐたり  
カレーライスぐらと煮え立つ震災忌  
鶏頭の真昼の墓地をたもとほり  
町中の墓地にはやばや秋が来て  
灼け澄める墓石累々塀越しに  
秋風に只々だだっぴろき池  
水中花埃も花と咲かせぬる  
炎暑の水濁りながらも鯉肥る  
葛蔓を引っ張って知るその根方  
ひまわり入れ動かぬ景となりけり  
露草はまさなる葉に露受けて  
自墮落な居ずまゐ質す大西日  
秋の雲一つ広がり薄れ消ゆ  
人影の紛る余地なし大西日  
おぞましき水捨て沙汰の秋暑し（汚水放棄記事）  
抓み喰ふぶだうの皿まで冷えてゐし  
秋の蚊と妻の居るなり隣部屋  
夜長妻予期したとほり生返事  
案山子見て思いつくことほぼ同じ  
問い掛けに返事が返って来ぬ夜長  
うさんくささうに答えて夜長の眼  
水澄めるらし葦折れの隠り沼  
菊芋咲く里山の秋確かめに

曼珠沙華の影めためたに水尾が来て  
一筋に駿河を指せる夏の川  
夏川の枝岐れなく奔る水  
花屋の水盛夏の街に走り出で  
人間を獲るとは小癩な女郎蜘蛛  
唐辛子鼻の脂をちよとつけて  
菊芋の花山裾を埋め尽し  
つくねんと水を味はふ震災忌  
銭洗弁天の水澄めるにや  
台風の置きみやげなる蒸し暑さ  
水馬水をなだめてゐるごとし  
噴水のしぶける街のカーニバル  
百薬の水をのむなり夏の朝  
新涼の影投げかければ鯉の寄る  
震災忌味なき水を掬ひのむ  
荒廢の片棒担ぐ藪からし  
蜘蛛の囿のその一端はをみなへし  
別人のごとく佇つなり夜のひまわり  
枝先へ走り咲くなりさるすべり  
鳩潜りしあたり波縦横  
勢いたち流るゝ水や曼珠沙華  
水蹴頭つにはかに秋意うごくとき  
山門（やまあい）を流れ下るや鱒の水  
をみなへし黄花草潤みて艶つぼし  
早鯉行き交ふ影を累ねけり  
のんびりとしてゐる秋の亀の水尾  
さるすべりの風流傘といひ合へる  
蜻蛉の交む音する池の端（はた）  
曼珠沙華一斉に咲き闌の声  
天帝が水面に置けるあめんぼう  
水馬（あめんぼ）のタップダンサー水叩き  
あめんぼの水を踏まえしトウシューズ  
空の下亀と行き交ふ蜻蛉かな  
厨水外（と）に流れ出づ夏の月  
あめんぼの上をのうのう蜻蛉ゆく  
夏曉の灯を点しみて新聞読む  
水踏みしめタップダンサーめく噴水  
例うれば火花は上塗りパステル画  
なめくじの絶滅計画たてにけり  
さんざんに庭木食い荒らされれば

かなぶんを殺めることにこの夏より  
かなぶんを殺すべくして地に落とす  
武州金澤八景落雷なくはなし  
秋めきて雲の広がりやすき空  
扇風機はたと止まりしまゝ晩鐘  
手の砂を払ふ火花の合間かな  
うしろより声あり火花の出来を云ふ  
火花果つその大空のみみず腫れ  
直截を多とす割り込み啼ける蟬  
今は荃愛づるばかりや鳳仙花  
敗戦期ざりがに捕の大井川  
夜間飛行たかだか火花の合間ゆく  
三尺寝枕にもなる漢和辞書  
水しぶきばかり挙げをる浮輪の子  
蚊がむんむんたかが草取りとはゆかず  
草取りをはうり出しては蚊と対峙  
全うし果てたる火花の煙の笠  
次の玉上がれば過去の火花とも  
愛敬を振りまき上る火花あり  
目と鼻とおまけに口もある火花  
廁へと起つとき秋蚊のしりへに蹴く  
夏惜しむ一口カツの胡麻だれに  
秋初風句帖持たずば頭に記す  
秋の蝶一葉落つるが如く地へ  
重なるを厭ひ火花の上に爆づ  
新世界求めてあがる火花とも  
火花果つ五體叩きて砂払ふ  
家出づる度に手を遣り含羞草  
一つ家の外（と）に鳴く虫と扇風機  
日めくりの終のいちまい残る蟬  
秋の蚊と妻居る本を読むほとり  
八月の港夕日の点描画  
ひまわりを道端に植え路地暮し  
少しづゝ動いてをりぬ山の色  
菊芋の花の待たるる鄙暮し  
亀の鼻すいと寄り来る水の秋  
これは如何に妻がつかまえ来しやんま  
朝妻が夕べは我が水を打つ  
蜻蛉がまんまと止まる古簾  
夏潮のひたひた打てる鳥貝

一方に峰雲一方よりタンカー  
夫婦して朝顔棚の花数ふ  
湧水と云へる側から水澄める  
水音の高鳴り過ぐる反魂草  
峰雲の聳つ方が海鳶挙げて  
文庫（ふみくら）跡楷樹立派になり秋天（金澤文庫）

秋色の楷樹の一枝一かな  
朽ち株に坐して聞きをる法師蟬  
また視野に入りくる池の蜻蛉かな  
捧げゆく亀の鼻尖秋日和  
捕虫網ひらひら池の蜻蛉捕り

● HAIKU200508sono2

火取虫何かを擦り落つる音  
火取虫障害物に当り落つ  
金亀子灯の無き部屋を盲飛び  
ぶんぶんの遊び半分灯を取りに  
かなぶんの仕業よ植木の丸坊主  
夏もしゃつきり長寿なること思はず  
鬼灯を鉢に三本鼎咲き  
間違ひなくわたしの抜毛極まる夏  
ごきぶり打つ力余りてこの始末  
気がつけば形無きまでごきぶり打ち  
起き支度せる音ならむ葭障子  
家に風通すことより蟬の朝  
忘じぬし入道雲といふ言葉  
旅は寄り道夏ガキ育つ日本海  
順番はわたしが先と花とり日  
鏡台の辺りでかなぶんバタと落つ  
端居してしみ・しわ・ほくろなど数ふ  
一夏の栄華の残照実ひまわり  
向日葵や秒針刻む他音無し  
実向日葵故人の笑ひかけるごと  
花愛づに無駄金は無し箒草  
向日葵の見通せぬもの無きごとし  
向日葵や真にひとりとおもへるとき  
向日葵や昼も煮炊きの音立てゝ  
向日葵や昼来れば人昼餉とる  
箒草いっぽん買うて観察す  
風死す中キツと身起こし厠に立つ

向日葵のあぎと突き出し海をみる  
低学年花壇に向日葵君臨す  
向日葵の遠を見据へる賢者の瞳  
かうなればしらみつぶしに蟬の穴  
無作為に杜を穿ちて蟬の穴  
蟬の穴同士近くてかなしけれ  
隣にもありてかなしき蟬の穴  
産土の杜の目にして蟬の穴  
指入れてみたる無傷の蟬の穴  
百日紅花より幹の至福相  
雲井より足踏み外す白昼夢  
白昼夢近き尿意を如何にせむ  
西瓜壳軽トラで来て店開き  
三浦びと地場の西瓜を叩売  
初ものの秋刀魚の値札に及び腰  
午後三時少しく蟬音薄められ  
夏に勁き庶民派の花ポーチュラカ  
園児ら今昼寝の時間実ひまわり  
鳴き足らぬ蟬を尻目に昼寝せり  
夢にまで出てくる蟬のくぐぐだし  
朝が来て葬姿正しけり  
くたくたよ三時の葬ならずとも  
百日紅烈々無口通しけり  
泰然と年寄るさまをさるすべり  
赤花にして焦身の百日紅  
蟬の穴随所に杜の鎮まれり  
順繰りに送るつもりが百日紅  
人間の帰するは一處蟬の穴  
優曇華や鬼籍新たな人加へ  
物故者一名俳誌八月号末尾  
夜々聞きてその数殖ゆる夏の虫  
時間とは溶けるものなり樟脳舟  
追憶の時間溶け出す夕蟬  
赤裸々に生きていりやこそ百日紅  
ともかくも生きていりやこそ冷奴  
赤旗は遊泳禁止浜閑散  
週末の浜にばらりと砂日傘  
口癖の「生きていりやこそ」夕焼見て  
扇子より扇ぐ仕種の気忙しや  
炎天を君来か溶けてしまはぬやう

蚊を入れぬ網戸の開け閉め慣れたもの  
空蟬の抱へゐるもの竹細葉  
もう既にこゑの森なす朝の蟬  
朝の蟬潮のごとく退くときあり  
朝蟬のいつとはなしに一潮流  
空蟬の写生句庭の草に佇ち  
葉裏より空蟬の爪覗きゐる  
蟬の殻紫蘇の葉裏にもう一つ  
蟬捕の蟬を鳴かせて通りけり  
蟬捕る子新参者を睨みつけ  
蟬捕のぐるりと廻る樹のうしろ  
芙蓉食ふ虫は小奴と見つけたり  
天帝の放てる水母海渡り  
ただこねて日盛りの海上がぬ子  
泳ぐより海中歩行愉しめり  
浮輪の子嬉々とし波を跨ぎゆく  
とりあへず海月のやうに浮いてみな  
わが孫の美雨（みう）が海月に触った夏  
どう見ても大き妹の蟬捕籠  
妹の首より提げし蟬捕籠  
庭土に落蟬厚顔横たへて  
落蟬の厚顔いとしむ掌（たなごころ）  
諸蟬の声のちりぢり朝は過ぎ  
百蟬（せん）の中の一蟬たちまさる  
追ひすがる樹が数多あり島の蟬  
蟬啼くや淋しがりやをひた隠し  
蟬の穴ばかりの杜の樹の澄める  
茫としてのうぜんかづら花了る  
いつものこと起床は葦開くまへ  
朝顔の相継ぎ凋み埒もなし  
今日咲く花数え夏曉の庭一巡  
茂みより明けくる朝の蟬翅音  
その啼きごゑ追ひつめられしごと晩蟬  
朝蟬のもうこゑ絞る中起きぬ  
みんなのこゑたちまさる神の杜  
刈草の日ざらし道はなほ続く  
飲食（おんじき）の音立てながら朝の蟬  
この中に今日死ぬ蟬と明日死ぬ蟬  
目を張って啼ける蟬貌思ふべし  
蟬滾つ朝の一刻ありにけり

落蟬に天上はるか渡る風  
渺として家居蟬音の埒場の中  
蟬音いま空中楼閣なせりけり  
騒然といや肅々と啼ける蟬  
耳ざはりな蟬であれども啼かせ置く  
返る葉に空蟬ついてゐたりけり  
女郎花植えて周囲の明るめり  
灼け砂の向かう海見て怯みけり  
界限の木々に目配り蟬捕る子  
もう齢か灼ける海見て怯むのみ  
やせっぽち灼ける海見て怯みけり  
浮袋三箇膨らす役はパパ  
箒草如何に化粧ふか見守らむ  
同時刻向日葵見て過ぐ勤め人（にん）  
路地咲きの向日葵勤めは今日もあり  
蟬の穴ここに集中する訳は  
杜の蟬勝手に幕を引きにけり  
鳴くしきやない蟬のいちにち了りけり  
庭仕事蟻払ふこと三度目か  
広島の日々の広島の記事風化  
● HAIKU200508son3  
悔恨は誰にでもありさざえの腸（わた）  
青春は顧みるもの栄螺の腸  
苦味は美味なること学ぶさざえの腸  
くるりと剥けさざえの腸も又さざえ  
さざえの腸楊枝ひねればひよっこり抜け  
直言こそ待たるるものや栄螺の腸（句評）  
さざえの腸昼行燈の多き世に（俳壇）  
世に殖えて昼行燈のごときひと  
句に触れて何を申すか昼行燈  
器用に世渡りて海月の優柔を  
栄螺の腸酔ひの止めを刺しにけり  
浮ついた海月の部類に吾（わ）も入るか  
有無云はさず蟬音を断てる大夕立  
小器用に強弱つけて扇風機  
ヒリヒリと蟬音あたりが暮れてくる  
減る蟬音聞いて山妻厨に立つ  
山妻の料理褒めねば冬瓜汁  
夕焼けといふ一瞬に妻立ち会ふ  
夏料理水ふんだんに使ふなり

蟬よりも力が抜けて早夕べ  
本番の掛け声かかり蟬鳴けり  
夏バテせぬ空苾菜の朝餉とよ  
蟬の穴踏み固めたる詣で道  
日の盛り振り向く猫の目と遇へる  
蟬の穴もとより杜の樹は暗し  
蟬殻のそこで時間が止まりをり  
蝸の突如参道頭上より  
身動きのとれぬ大楯大暑くる  
楯大樹大暑のがれる術も無く  
禪林の青空灼けて楨大樹  
炎天に定かなるもの我が靴音  
白昼の蟬の穴より洩るるこゑ  
馴れ馴れしく何處でも止まる蟬がいや  
朝蟬の勢ひたてるが元氣の素  
蟬時雨人は務まることをして  
朝顔の蔓先樋に届きをり  
朝顔にはいと応えて起きる日々  
葬や大事な思案朝のうち  
向日葵を船遠ざかり遠ざかり  
横須賀の空鈍く打ち昼花火  
手短に鳴ける夜蟬の空元氣  
寢室に徹る夜蟬の鼻濁音  
どんぷすと海風運ぶ花火音  
どんぷすと岬辺りの遠花火  
うち挙り蟬は本番迎えけり  
秩父鐵道向日葵煌とうち過ぎぬ  
朝蟬に鼓舞され我流体操す  
蟬殻を剥がし欄干歩まする  
賽銭箱のぼり詰めたる蟬殻あり  
蟬殻を集めて遊ぶことにも飽き（孫ら）  
蟬殻の弄ばれて置き去りに  
捕虫網かなぐり捨てて鳩追ふ子  
やっと捕る蟬を放してやれといふ  
炎暑来て老いの頭のがらんどろ  
文机に書きかけのものつくつくし  
炎暑来てやつつけ仕事一頓挫  
ゆふがたは涼しきものと期待して  
これといふ記事見当たらず広島忌

死してなほ蟬の目鼻の剛健に  
大川に溺れて真水のみしこと  
メール来て炎暑の京に遊ぶといふ（片山由美子さ  
ん）  
櫛老樹若木に混じり蟬の杜  
ひとり閉じこもる暑さは責めに似て  
蟬止まれりや何處でもよいといふ風情  
大木の裏に廻りて蟬止まる  
蟬捕りの極意は逃げ来る蟬捕ると  
空蟬の風雨に目鼻古びざる  
樹皮剥がれ落ちて炎暑の大櫛  
孫を待ち居るなりその蟬捕り籠  
よく探さないで物云ふ暑さかな  
風船かづら網棚のぼり始めけり  
先生は暑き日選び逝きなすつた  
家に居て崎の花火の音を聞く  
瘡蓋や一夏過ぎんとしつつあり  
すぐ飽きてしまひ捨てらる蟬の殻  
草叢に灼け鎮まれるをみなへし  
舳向けこれより鰯の湧く海へ  
赤紫蘇のおむすび一個昼餉とす  
少年の吾来て鰯の引っかけ釣（金沢八景 往時）  
脇見して自分が見えぬ羽抜鳥  
頂きの一切経堂灼けにほふ  
初秋の一遍上人風に痩せ  
弔ひと云へばみすゞのあの鰯  
浜に活気みすゞの鰯も揚がるらむ  
箒草百のみどりの目を持ってり  
黄揚羽の紛れて飛べり木の根道  
真っ先に水母がのぼる潮入川  
鼻っ柱少し日焼けて水を遣る  
猫舌の家内がつくる冬瓜汁  
冬瓜煮る実は家内は猫舌で  
向日葵も虚ろな瞳して怠惰な日  
秋刀魚食ふ敢えて値段は聞かずにおく  
早起きを励ます蟬も減りにけり  
端居人臍の掃除をして居れり  
神主のやうな顔してバツタ現る  
蟬の昼機関車やえもん読み聞かす  
いつの間に葬減りて今朝の秋

網棚の葺乏し勝手口  
種袋よくよく読めば発芽率  
しじみ蝶ちよろちよろ舞ひ出す木洩れ日に

台風が蟬を一掃すれば秋

いちはやく秋来たりけり空の端  
けふといふ日が過ぎゆける白木槿

朝顔ののぼり詰めたる空の央  
だらしなき色となりたる百日草

図書館に読む本探す夾竹桃

一山の裾野からして夏葎

夏葎これがごとごと朽ち果つ景

白目下色を増しつつをみなへし

妻は鰯わたしは平目熱帯夜

一日の疲れ蚊遣に巻かれゐて

鶏の如く句を産み夏鍛錬

● HAIKU200508son04

実向日葵暮れゆく貌ののっぺらぼう

突っ立てる黒子のごとく実向日葵

実ひまわり母枝に遺すデスマスク

哲人の熟慮の風貌実向日葵

百日紅中間色はよかりけり

虫つく樹と土用雀は知り居れり

植木には毒なる西日殺到す

くるぶしに透く静脈や日の盛

中空に契印（げいいん）結ぶ箒草

印相（いんぞう）は何にてあらむ箒草

目の覚める大変身を箒草

新涼の手応え確か箒の柄

象牙の箸浸しあるなり晩夏の水

青ければまだ鬚帯びぬ箒草

五つ六つ木にのぼり咲く紺朝顔

一重づゝ解かれ蟬音は三重なりき

大木を十重に取り巻き鳴ける蟬

朔日の風朝顔を吹き割れり

夏秋へ転ずる崎の鳶を見て

日盛りの音たて壊す菓子袋

網棚ごと風船かづら揺れてをり

ひまわりの一哲人にゆき遇へる

その先は覚えて居らず昼寢覚

炎帝のつかみかかれり崎ゆく肩

確かなる記憶の容緋のカンナ  
蟬殻を終には壊し始めし子

モノレール夏大空に弧を描き

鳴きさまの朝からなげやり秋の蟬

会津びと鯉山椒に昼餉かな

みんなにとつてかはられ杜の蟬

凡百の蟬に占められ官幣社

新涼の象牙の箸は長寿の箸

萩に箔置くごと朝の雨の粒

長生きして涼しく使ふ象牙箸（岳父）

臍の緒を蔵せる箒筍夏衰ふ

ぞりぞりと晩夏の魚の鱗剥ぐ

模糊として口の開け閉て晩夏の鯉

端居人叩きて鳴らす膝の皿

箒草これを称して相似形

楠に蟬少年上目使ひせり

穂に蟬殻なほ登らむとする構え

毎日水遣りて植木を甘やかす

粋な昼餉つめたき南瓜のスウプかな

朝戸繰れば芙蓉の風が舞ひ込めり

かなぶんの点検芙蓉は大丈夫

鼻つまみ鳴き継ぐ蟬の盛夏過ぐ

夏曉（なつあけ）をぼんやりしてゐる頭と手足

土用雀虫でもとるか葉叢なか

起き抜けの頭蓋をぬけて蟬のこゑ

朝の蟬聞き流しをり床の中

蟬二つ頭の片隅に大昼寝

大暑には頭使はぬコップ拭き

海紅豆浜閑散として来たり

船影の朝からかすむ夏の海

夏の海朝靄籠めて乳白に

赤紫蘇にいま甦る過半生

いとたやすく手捕らる蟬となり果てしか

美学にして幾何学ヨットの帆走は

帆走はヨットの美学いや幾何学

遊泳の人の黒点晩夏の海

浮輪の子おどおど臍の深さまで

砂浜に朝露まみれの火花屑

赤塗りの櫓に遊泳監視員

灼け澄みて終に一句も成らぬ海

顔出して引つ込む炎暑の回覧板  
子の為に植え込む向日葵玄関先  
ひまわりに届き居るなり踊りの灯  
校庭にぽっかり踊槽浮き  
提灯の灯のくりくりと盆踊  
ぼりぼりと足掻く藪蚊の居さうな闇  
踊る子に氷菓を配り小休止  
踊りの輪広ぐ校庭いっばいに  
校庭の鉄棒に寄り踊り見る  
盆踊雨の様子見して再開  
豆腐屋の娘めかして盆踊  
夜遊びの一つ踊に興じけり  
山妻は根っから陽気踊りもラフ  
校庭の真中に侏儒の盆踊  
踊槽遠き昔もこの明さ  
違えても踊怖ぢぬ子健気なり  
堪のよきちびつ子踊り通しけり  
のみこみよきちび等の踊りたいしたもん  
誰も踊れさうなチャンキオケサかな  
新作の踊りに挑む影法師  
踊りに倦みかはほりのごと闇馳す子  
呟きのあと口閉ざす朝の蝉  
朝から翅バタつかせゐて残る蝉  
おのづと知る団扇の善し悪しこの一本  
したたかで柔さがよけれ団扇の腰  
立秋の己に對すひとり酒  
暑さより心鎮めの水打てり  
けふも又我を相手の冷やし酒  
蚊のこゑす痒くてならぬそこかしこ  
麦酒か酒かけふの肴を確かめて  
妻居らねば手軽なビール選びけり  
団扇絵は漢（をとこ）を転（こ）かす女武者  
吾はせはしく岳父はゆつたり団扇風  
闌ける昼心頭滅却しても蝉  
梢より手離し或る日蝉頓死  
青空の広がる或る日蝉頓死  
夜が来て蝉に引導渡しけり  
「糞暑いねえ」と自転車行き交へり

● HAIKU200508sonos

執筆などトンと縁のなく立秋

虫籠の中はと見れば蝉の殻  
落蝉の昼を瞳き木馬の目  
コンビニの入口埋め盆用品  
盆のコンビニ生花仏花と仕分けして  
雀来て群がる盆の変電所  
秋迎ふ姿整え草々は  
すつきりとしたゑのこ草手折るなり  
衰ふるもの目に見えず夕端居  
誰の生れ替はり飛来の黒揚羽  
蚊の刺せる處膨らむ天の川  
湯上りのビールに鳴れり喉仏  
いつもより早めの夕餉芋殻焚  
芋殻焚日暮れひとえに待たれけり  
わらわらと芋殻燃えけり石の上  
芋殻火にめいめいの頭をよぎるもの  
蟻ちよろちよろする居間なれば菓子こぼさじ  
鬼灯を植うもお盆に間に合はず  
蝉捕の籠を鳴かせて通りけり  
庭の花枯るゝにまかせ送り盆  
百日草彩よきを選び盆花に  
木斛に晚蝉こゑをたてずにある  
夏草の衰えながら揺れりたり  
廃自転車取り込みへくそかづら蔓  
アパートの庭は茫々灸花  
よく風の起つえのこ草初々し  
挿し花にするなら一輪えのこ草  
一草と云ふならえのこ草を推す  
蝉捕の油を売れり遊園地  
へくそかづら攀ずる金網灼けてをり  
外出の当てなく凌霄宙ぶらりん  
鳴き足らぬ蝉のまだあり早夕餉  
餉の支度して一斉に蝉音退く  
風起てりけふの暑さを語らへば  
扇ぎ止すままに団扇の置かれあり  
身ほとりに団扇と俳諧欠かさぬ日々  
ゆるゆると団扇の風を起こしけり  
俳句仲間海鞘に談論風発す  
月光裡こんな高さに実向日葵  
遠雷の転がる崎の西瓜畑  
芋殻火の果てたる闇に炭の香す

芋殻焚うすくらがり溜まる煙  
うち曇る空を怪しみ芋殻焚く  
蛇口より水送り迎え盆

「ただいま」と芋殻抱へて妻戻る

月遅れ迎え火焚いて皆健在

百日の夏主催せる蟬逝けり

夏彩どる蟬音にいろいろありて森

あたふたと蟬主催せる夏逝けり

夏彩どるもの一つにホルトの樹

飛来せる蟬は真夏の代名詞

朝戸繰る音もめつきり秋らしく

秋来たり木々の陰翳礼讃す

あれ父母と向日葵家族になぞらえて

月半（なか）を過ぎて薺先細り

落胆のこゑ薺のほとりより

船体のごとく晩夏（おそなつ）ぐらつけり

船体のごとく傾き戻らぬ夏

隣家の会話手にとるやうに今朝の秋

朝の葉のむ目のさきに花芙蓉

今朝秋の二階の廁水使ふ

向日葵や還らぬものを猶おもひ

向日葵の司る海荒れむとす

向日葵の国の真下に蟻の国

向日葵を支ふこの頸あらばこそ

向日葵を前にし姿勢正さるごと

その目つき何暗示せる実ひまわり

実向日葵ブラックホール引き込みて

向日葵を植えて起き伏しその只中

ひまわりに風は東西南北より

ひまわりは典座（てんぞ）のごとく佇てりけり

ひまわりの火の性（しょう）天より頒たれて

ひまわりの今は落ち着き土の性

起きるとき骨の鳴るなり今朝の秋

手作りの藜の杖突き友来たり

級数のごとくに蟬音収斂す

実向日葵リーマン幾何の授業中

クラインの壺忽然と昼寝覚

ひまわりの達観青海原を見て

蟬しぐれ漫然と聞き横坐り

無防備な裸の八月十五日

手の掛かるものは外して花種蒔く  
蟬がみな地霊に還り山の秋  
この暑気を蟬に代辯させ山霊

句読点打つごと暑さ一段落

ひまわりの彼方夕栄え未帰還機

じり貧の蟬音湯舟に浮かびゐて

広島忌風化の戦後六十年

焦身のひまわり戦後六十年

盆花に囊れの見ゆる百日草

生彩無き盆花なれど仕方なし

かさかさの花を摘み来て迎え盆

トネリコの微光放てる夏深し

トネリコの葉の深みどり盛夏くる

晩蟬や陰翳深き野の一樹

立秋の掛け声ばかり臍のゴミ

落蟬の翅ヒクヒクとさきほどまで

俳諧と団扇無聊の身ほとりに

冷やし酒肴無くなり何とせう

豆腐など何かないかと冷やし酒

敗戦の日の朝刊に目を通す

天眼鏡もて記事漁る終戦日（岳父）

玉子かけご飯の朝餉敗戦日

玉子割り黄味の生き生き敗戦日

朝飯の湯気立ちのぼる敗戦日

● HAIKU200508sonof

逃ぐる蟬元氣の無くて逃げぬ蟬

太幹におのづと墮つを待つ蟬も

死蟬とひとり遊びの末っ子か

旗日なる朝飯食べて汗ばめり

はらと落ち抜け毛のあたる裸かな

真水飲み噎ぶ八月十五日

もの溢る屑籠八月十五日

記憶すら風化八月十五日

大学芋ほおぼり八月十五日

諸蒸かし偲ぶ八月十五日

卓袱台を一つひろげて夏朝餉（疎開地 静岡 島田）

水団をひしと囲める一家族

戦のあと生ににくを虫下し

夏の夜を大蜘蛛の出る借り廁

生身魂食後を眠り蚕のごとし  
無理矢理に渡さるテイッシュ街薄暑  
汗ばみつ食める朝餉はエネルギー  
ひっちぎる日めくり八月十五日  
日めくりも夏瘦せ月も半ば過ぐ  
ペットボトルごちやごちや入れて冷蔵庫  
暑さには熱き茶それにせんべいも  
炎昼をふうふう言うてコップ拭き  
硝子器の汚れ目につく暑さかな  
屋外へ出して真夏の仏桑花  
それなりに数つけにけりミニトマト  
プチトマト朝夕の膳賑はせり  
手拭いを絞りにぬぐう裸かな  
やすやすと蟬の背後に廻りけり  
炎天に晒され百の素焼き鉢  
二夜連続戦争ドラマ熱帯夜  
捕虫網二つ母子の並みゆける  
片陰に踰みて老婆一服す  
旗の立つ家に飛び込み氷水  
氷水舌の形が判りけり  
溜飲が下がるとは是氷水  
熱風吹く高層ビル街抜けて来し  
ひまわりの一つ目小僧月下に聳つ  
天日に撲たれ強くてをみなへし  
女郎花芯ある花と覚えけり  
烈日の育む丈余のをみなへし  
自転車の荷籠に蟬の落ちるたり  
物匂ふ世が嘗てあり冷蔵庫  
羽抜鳥どころか鏡のわが瘦軀  
盆花の活けある水のすぐ古ぶ  
炎ゆる昼胃の腑に水を注ぎ足せり  
炎天をのこのこ訪ね来る御仁  
炎天下へたに歩かぬ方がよい  
もう少し肥りたけれど胡瓜揉  
空蟬の背の創術後の胸の創  
術後痕古ぶばかりや夕端居  
ふらと入りレトロな飲み屋敗戦日  
泡盛に酔漢「昭和万歳」と  
ジョッキ挙げわれらウルトラマン世代  
夕蟬の息を継ぎ継ぎ鳴けるなり

蟬鳴き出す空襲警報発令と  
強靱な蟬の肋を仰ぎけり  
はだける肋に韻く夏の雨  
丁度よきおかずの数や終戦日  
一向に肥らぬ躰シャワー浴ぶ  
腹くちく読めば字が逃げ秋灯下  
夜の秋妻の読むもの何ならむ  
かなぶんにも本を読み止し妻一ト言  
けふひたすら黙禱列島終戦日  
残る蟬非力非力と鳴けるなり  
家の前ひとり暮らしの苧殻焚  
盆僧の頭下げ下げ隣家辞す  
路地明けて来るなり苧殻の燃え屑に  
萩を打つ雨に伴ひ来たる風  
昼深くひとり対する扇風機  
扇風機つけたり切ったり今日一日  
八月の雨こちよき韻きかな  
地べた打ち韻き広がる虎ケ雨  
古団扇やれやれけふも了りけり  
ぶだう一粒地球のやうな愛しさに  
ぶだう酸しそれにもましてその甘味  
打開策練りをりぶだう食うべつゝ  
ぶだう食べ胸にすんと落つ甘味  
西瓜食ぶ間にピッチャー立ち直る  
捕り物の蟬に大物ありみんみん  
松葉牡丹よく咲き未だ咲き猶咲かむ  
迎火の焚き跡のあり歯科医の前  
打たんとすこの蚊は誰が入れしもの  
蚊に刺さるあたり真っ赤に掻き壊す  
網戸に隙道理であちこち喰はるるよ  
香煙の立ちのぼる中匂ふ桃  
暑さよりやっかいなのは湿度なり  
開花数記すのみなる夏日記  
妻毎朝葬の数かぞえ廻り  
茄子こすり洗ふ音せり盆厨  
馳せる帆も灼けつく海も点描画  
電線揺れ地震の間飛ぶ蟬見たり  
半ズボン地震来て咄嗟に入る足  
これ地震か咄嗟に裸にはおるもの  
夏バテの眩暈にあらずこれは地震

晩夏の地震母は二階の揺れを言ふ  
晩夏の地震あたかもデツキにゐるやうな  
晩夏の地震翻弄し居る家は船  
金魚玉ゆらゆら揺れて扱ては地震  
かすむ眼に地震確かむる外(と)の電線  
地震に発ち蟬のおろおる飛ぶばかり  
滾つ蟬音立木枯らさんばかりなり  
簾して棺の中より見るごとし

● HAIKU200508sono7

飛ぶさまは愚直そのもの残る蟬  
我めがけ飛び来る蟬は奴に似  
樹のいろの蟬が零れて落つ赤土  
より短くなりぬ油蟬(あぶら)の飛翔距離  
衰えの見え来し蟬の飛翔力  
飛び方を蟬に手ほどきして遣りたし  
だう飛んでもこんな恰好になる蟬か  
飛び下手の頭でつかち油蟬  
飛ぶ蟬のいづれも路頭に迷ふさま  
幾つもや月夜を蟬の魂(たま)昇天  
月の夜を選びて蟬の魂(たま)昇天  
方向がちがふと羽根を返す蟬  
着艦に似たり油蟬(あぶら)の止まり際  
バタバタと唾蟬あたり昏れしめき  
昏れて来て蟬音半減又半減  
夕方の風が出てきて減る蟬音  
長たらしく鳴いて鎮守に残る蟬  
音の遙か燠のごとくに残る蟬  
楯の火の熾るが如く油蟬  
蚊が何處かにゐさうでこの部屋落ち着かず  
夕顔は空を大きく使ひ咲く  
残し置く芋殻半分焚きにけり  
門火焚く闇に夕顔咲きゐたり  
門火果つ闇に向ひて「また来年」  
よべ見損ず夕顔大きな花垂れて  
地続きに外燈一つ門火焚  
門火焚路地に家の灯洩れてをり  
芋殻火を焚き来てほっと家灯  
沼尻に或る日くぢけて蓮の茎  
齡とつてふくよかなひと花芙蓉  
このぶだうとろけ損ねし種子のあり

女の子大きぶだうに唇つけて  
くろぐろと大きぶだうの夜のいろ  
つまむ手の頻りに伸びてぶだう無し  
銀幕と呟いてみぬ夜の秋

夏の夜の宴ゲストに宍戸ジョー  
夏の夜の宴昭和のタップかな  
宗右衛門町ブルースに酔ふ夜の秋  
黒く大きぶだうは鬼の泪粒  
夜を鳴けり蟬はそんなにしまでも

秋の夜を忍んで日劇ストリップ  
植込みに野菊も植えて秋めく庭  
夏は巡り来たりて砂糖黍の唄

松虫草霧通り抜け通り抜け  
その音色ハッキリ秋の虫と聞く  
雑駁な音のギイヂイ夜の蟬

日の盛りカレー粉の素炒る香のす  
海夕焼け未だつぐない足らぬかに  
夜のぶだう食べてしまひしそのあとは  
夏深し深夜放送ポソポソと

お迎えに舌打ちをして夜の蟬  
夏果ての昭和の深夜放送談  
蟬音絶ゆ夜はけふ否々明日あたり

箒草雨に優しさ加はれり  
大文字舟がゆらゆら闇の海  
菊枯れし鉢選りてをり秋暑し

戸を開けしまゝ寝る夜の遠花火  
ひまわりや党派林立するごとし  
百万偏朝日巡り来ひまわりに

脇侍ありご本尊あり実ひまわり  
好顔のひまわり笑みを湛えつゝ  
兄弟にいつかは果つる夏休

ひまわりにうつつすら見える昼の星  
向日葵に勤王志士のころざし  
ひらひらと向日葵を過ぐ官軍旗

秋暑など眼中に無し鍋磨く  
窮状を訴ふ蛇口秋暑し  
実ひまわりそっくり返ってしまはぬか

樋掴む朝顔の蔓節操無し  
蔓ばかり伸びて朝顔花少な  
薺の耳を疑ふ怪事件(昨今の新聞紙上を見れば)

葬に青天霹靂地震ありぬ

陸軍参謀本部発表雲の峰（ピカドンにあらず）

がぶがぶとピカドンの日の真水のむ

長崎の鐘聞こえぬか補聴器に

眼も耳も広島の忌も皆風化

不戦の誓い呑み込み戦後六十年

防諜と殺戮向日葵知っている

憲兵のごとき眼をして実向日葵

早起きが過ぎて岳父の三尺寝

これ以上痩せられず蚊を目の敵

蚊が多し網戸が開いておりやせぬか

蟬の穴防空壕もそこいらに

日課となる朝顔の世話水の世話

顔面の蚊打てば眼ちぐはぐに

蚊をのがすそこいらちゆうがかゆくなり

刺しまくる蚊ほど討ち取り易きもの

お迎えはまだまだまだよと蝉啼けり

百万偏鳴いてころりと蝉逝けり

炎天くる配り損ねし郵便夫

● HAIKU200508son8

大蓼見てぷらんぷらんと戻りけり

蝉声のおつと止まった誰か来た

典型的秋晴れ球形ガスタンク

蟬の殻打ち水浴びて眼の濡るゝ

蝉時雨ときにはうねることのあり

近づけば郵便受より蝉発てり

逞しきいとどの腿に及ばざり

虫の名のそのいちいち知らざりき

あきらかに虫鳴く夜となりぬたり

虫の音の中で虫の句書き留めぬ

行き遇ひて蟬も驚く吾も驚く

蟬の昼ペットボトルの裡曇る

紛れ込む蚊の一匹はある平屋

ぶん投げられ糶らる鯉のメタリック

長靴で海老塚詣で築地びと（波除神社）

百蟬を待みゆくしか他無き坂

夏果の机はものの積み処なる

晩夏なる机にやたらもの積まれ

打過ぎる昼をうつゝに三尺寝

真横より西日陰しき戻り道

各々に等分の風扇風機

秋蟬のおのが鳴く番譲らざる

夏送る一樹一樹は蟬音挙げ

蝉時雨やぼ用一つ出来にけり

散歩道橋のここ迄いわし雲

盆過ぎの橋より磧覗き込む

四つほど採れたるめうが妻に見す

鱗雲端乱れ完璧期し難き

一步づゝ秋来る空とおもひけり

めうが採今日の分だけ欲張らず

良夜の本ここ迄にして寝るとせむ

そこそこの句が出来秋のたんぼ道

大人げなく蚊の刺す処掻き壊す

真菰叢一吹きごとに近む盆

冷奴の他に肴はもう一品

紋章のごとく大蚯蚓の轢死

まつはれる翳に浮彫り蚯蚓の死

ぺちゃんこに蚯蚓国道一号線

手を抜けばかうなる見本蚯蚓の死

良夜の本開けたところを先づは読み

精悍に紙面馳す蟻吹き損ず

片陰に猫の骨皮筋右衛門

木片の流れ着きをり八月尽

幕開けは夏満月の田圃みち

このところ忘れてをりし夏の月

夏されば晒布の類を箆筒より

道端の真中に端に死せる蟬

ひよいと変な考え浮び月夜の道

こほろぎの腿に引け目や夏瘦せて

蜘蛛の巣につかまることを又もして

蝉時雨晩年押しつけられてをり

速き半日遅き半日夏逝ける

灼かれても青葉がきれいいたちはぜ

日暮れては紅のかちたる酔芙蓉

殺虫剤手の内見せぬ夜盗虫（よとう）らに

白玉の甘味処を素通りす

自家製のトマトに酸味ありにけり

向日葵の雨垂れ白し一雨過ぎ

老人には無理といふものシャープベット

昼寝とはよきもの心身すつきりす

この齢になりてすててこ見直せり  
湯上りに天瓜粉など欲しきもの  
端居して定年挨拶読み返す  
端居していちばん風の来る処  
大西日差すといふより照射せり  
原爆忌考えながら句を作る  
晩年は引き算ばかり冬瓜汁  
おし黙りころり転倒せる蝉も  
つじつまの合ふ句は陳腐蝉しぐれ  
調和とることがそもそも駄句の源（もと）  
蝉しぐれ舌鋒鋭き芭蕉さん  
我もする童子もすなる蛙の句  
俳諧の細みは秋の鳶のこゑ  
出来秋の光をもてりご飯粒  
成る句にも賞味期限があり新秋  
大西日遮るもの無き舗道ゆく  
大西日蟬の今際（いまは）に立ち会へる  
三人（みたり）にて芋殻火囲む今年また  
氷旗立つ角店に飛び込めり  
明治屋のアイスクリームなら食べる  
杉田銀座で見つけし晒布の下着かな  
盆花の鬼灯朱さ比べ買ふ  
モノレール入道雲の足下ゆく  
昼はパスタトマトの湯剥き手伝いて  
反魂草残り少なき休みかな  
古漬けの胡瓜つまめる残暑かな  
煮南瓜の皮真青なる盆の入  
夏果の眼鏡の球（たま）の疵微か  
客去りて皿片づける残暑かな  
暑さより湿度確かむ残暑かな  
百日紅熱風すさぶ日なりけり  
百日紅愛染明王然として  
熱線に痛み走れり大西日  
黙殺して通る秋暑の門の蝉  
みんなんの鋸挽くごとく鳴き出せる  
向日葵の横顔垣間見ゆ出窓  
立秋と呟くやうに風吹いて  
秋声の生まれて消ゆる真澄空  
屑籠に投げ入れ秋暑の菓殻  
かさこそと秋じむ庭に風の起つ

秋暑の日朝から萩の千の葉に  
手拭いいっぽん絞りに起てる秋暑かな  
朝の鴟切り裂きやすき大気かな  
ライターの炎に煽らるる秋暑の貌  
足許に照り返すなり秋暑の陽  
紅にもう一盛り百日紅  
バタバタと生き残りをる竿の蝉  
小遣いはすつからかに秋の空  
月の下植えたきものに棗の木  
のうぜんが散乱あたり昏れしめず  
炎ゆる日の昼餉昆布茶に焼きにぎり  
蝉死す日熱風木々を襲ひけり  
亜米利加芙蓉普通の芙蓉と咲き継げり  
盆過ぎの空の高さを妻云へり  
一段と空高くなり黍畑  
ひらひらと蝉の逃げゆく空の丈  
おおぞらの端より貌出す秋の雲  
み空より雲払はれて秋暑し  
秋雲の白み渡れる空の央  
秋空を遅々と流るゝ雲の閑  
鳴き競ふ蝉の肋の熱からむ  
呼び出され西日の中へ出でゆけり  
西日中空振り三振シャットアウト  
処暑処暑と口火切りたるつくつくし  
屑籠の屑溢れ落つ八月盡  
腹見せて暑苦しいぞ軒の蝉  
灼ける景眼鏡の球を拭くばかり  
豚汁のちぎり蒟蒻夏の果  
夏バテの昭和生まれに生たまご  
海風の吹きぶりも亦秋めく日  
浜木綿に風荒れて来ぬ剣崎  
人ごとのやうに云ひ退けけふ秋暑  
めうがでも採ってみようか家の裏  
へりの音家々圧しゆく秋暑  
思い起こせば水団ありぬ敗戦日  
甘酒はわたしは嫌ひ妻は好き  
目前に迫りし蝉の真貌かな  
ガラ刷這ふ蟻の大きさ9ポほど  
昼顔の空には何もなかりけり  
夕顔はあぎと突き出すごと咲ける

夕顔の荅のどれも横向きに  
晩蟬のこゑ落としたる夜のとばり  
こんな日はひとりがよくし秋初風  
公園の夏瘦雀親しげに  
昼寝せむ胸板の創上にして  
秋蟬を発たすことちよとためらひぬ  
七節虫をなんべん見ても只の枝  
仕方なし暑さのがれの為昼寝  
石の上に細かく散りてさるすべり  
己なし蚯蚓が死んであたりけり  
本日の一大事とは芋穀焚  
焦げつける物のにほひや夏の暮  
はだけでも腹は冷やさず熱帯夜  
選る道の裏目に出でて炎天下  
辛抱の度を超す暑さ如何にせむ  
蚊に喰はるところ見せ合ひ妻と我  
木より落とすぶんぶん暫し死んだふり  
小遣いの前借りなどして八月盡  
炎帝に葉は皆垂れて従ひぬ  
シート取り替えて秋めく寝床かな  
雲遁走空は秋めくばかりかな  
蜘蛛の巣に突き当たりたる白頭  
蟬の穴優に一千越えをらむ  
まだ青実なれどそのうち梅擬  
夏満月近々とあり顔ほとり  
満月にほつとする顔寄せにけり  
夕顔の荅のこれは明後日  
夕顔やびしやんと雨戸閉められぬ  
類無く明るかりけり萩透く陽  
露の空何かあつては困るなり

● HAIKU200508son09

秋来ると色立て直す町雀  
ぼろぼろの夏果ての鳶岩鼻に  
蟬何かに突き当たる音露けしや  
柱ごと家大揺らぎ晩夏の地震  
芋殻火の煙の中よりちちの貌  
鳴き出しを油煮えたつごとく蟬  
引く草がみんな露草なららくちん  
露草がひよろりと長けて命日来  
禅林の刈らずの葉欄夏の雨  
朝昼晩餉に出る古漬胡瓜かな  
冷素麺妻・母・吾の頭寄せ  
眠きもの中途半端に昼寝すは  
蚊の罅襲へる水を打てるなり  
真顔もて蚊が刺しにくる打水は  
水打てば蚊のこゑ痒み走りけり  
蚊の声す急いで何かはおらねば  
水打てば庭を罅の蚊に追はる  
蚊の刺せしところしろしろ夕明り  
初枕爽涼の声挙げにけり  
遠縁の誰それよりのだだちや豆  
花芙蓉吹き馴れし風吹きにけり  
花芙日に日に花数殖やしけり  
裾分けのだだちや豆また裾分けす  
拡声器がなり秋暑の声割れぬ  
だだちや豆ゆっくりのんでたつぷり酔ふ  
配達の坂の途中の唐辛子  
夏惜しむ唄は「でっかい海はヨー」(カラオケ演  
歌 おやじの海)  
落蟬は落蟬我はまだ啼く蟬の裡  
落蟬を見ながら黙しゆく舗道  
カラオケに思ひの丈を夏惜しむ  
蟬飛んで粹な小政の旅姿  
股旅の姿なりけり蟬飛ぶは  
楨の空こよなく晴れて月真澄  
だいぶ夜の更けし厨を蚊のうろろう  
戦後の日々何と言ってもリングゴの唄  
逝く夏の掃き癖のある竹箒  
大風に倒れしコスモスほったらかし  
飛び込んでみたり路傍の水旗  
お寺さま咲かする百日紅が見え

煙草止めねばとおもひつ夏惜しむ  
漆黒の蟻を見てみて疲れけり  
蟬飛んで片道飛行めく行方  
実ひまわり足下見つむる齡かな  
遺句集の蟬の一句に立ち止り  
二タ三声夜を啼く蟬のさらばとぞ  
深呼吸吸けふ秋空を見し晴夜  
咲き満ちて白さるすべり青みけり  
オリーブ青実県木にして亦島木  
一つづつ咲く夕顔の禁破り  
豪華版けふ夕顔の三つ咲く  
夕餉あと夕顔を見て星を見て  
蟪蛄の榷襴宜めくがうやうやし  
をみなへし朝日に溶けてしまひけり  
ひまわりの傀儡のごとく枯れてけり  
氷片をコップに鳴らし夏惜しむ  
をみなへし月待つ月の色湛え  
をみなへし揺れて芒に寄りかかき  
萩の枝をこづき遊べるつむじ風  
月下の萩くわんののごと千手垂れ  
手渡しに西瓜一片お相伴  
一降りに闇を正せる夜の驟雨  
近づきて遠ざかりては夜の驟雨  
真暗がり打ちてやにはに夜の驟雨  
夜の驟雨雨風家に吹き込めり  
端然として聞く夜半の一驟雨  
夜の驟雨納まりかけて来りけり  
葉叢うつ音のそちこち夜の驟雨  
露の世の木と紙の家震ひ地震  
打ちつけて傍若無人夜の驟雨  
泥亀の首筋赤き秋早  
夜の驟雨なんと雷さへ伴へり  
先づ一滴やがて万滴夜の驟雨  
ぽつと来て一粒万倍夜の驟雨  
蚊といへる塵に翅あり脛に、(ちゆ)と  
討ち取らる蚊のぺっちゃんこ膝がしら  
けふ咲いてうれしき数の牽牛花  
莫迦鳴きをはばかりもなく軒の蟬  
寝語りの夫婦に遠き秋の雷  
ぱりぱりと寝しなに聞ける秋の雷

夜陰打ち夏果ての雨落ち来る  
過ぎしやすき朝夕云へば遠き雷  
朝夕の落ち着き来る鳳仙花  
打たれし蚊塵のごとくに払はるる  
年の火や猛きほむらもその中に  
思ひ出の幾つも出てくる青写真  
● HAIKU200509sonoi  
露草のたやすく引けてなんまいだ  
露草を引く掌に残る露くささ  
夏畢り間際の浜の砂鉄かな  
ほろ酔の芙蓉の中より真砂女の顔  
鴨の水尾楓の岸に届かざり  
池尻に青葉の楓なる一木(金澤文庫)  
盆近き雄鯉は水を跳ね上げて  
吾を呼べるゑのころ草の道尽きず  
ひまわりの根を見ておもふ保水力  
デフォルメし水を描けるかきつばた  
おおかたは水の構図よかきつばた  
数えある九つ十(とお)に僧都鳴る  
数珠玉はひとり枯れゆくものの裡  
渡り鳥東寺の空に懸りけり  
初鳴の池に着水水刺す  
榧青実たわわ落つ時待ちあたり  
山間に雨の仕業の乱れ葛  
ここで道はたと絶えをり葛の花  
紙屑をひねりて捨つる夜の秋  
暗闇を叩きて一雨秋となる  
柳散るその下に齧集まりて  
岐阜提灯未だ見ぬ世の景見する  
岐阜提灯小野小町は野に倒れ  
仙がい筆薄と小町のされかうべ  
大学芋食うて戦争あやしまず  
天心へ向ふ花火の擦過音  
お隣りは元銀行員水を打つ  
早寝して秋の長雨めく一夜  
駄句ばかり並べたてたる夏畢る  
歯がよるこぶ馬込半白(はんじろ) 胡瓜かな  
南蛮毛淹れてこの暑気何とかせん(とうもろこし  
のヒゲ茶)  
紅毛もすなる俳諧杜鵑草

陶片の出でくる畑油点草  
日の目見ぬ陶の捨てられ油点草  
酸ありてこそ紅玉といふリンゴ  
露草の露浴びまじと道の央  
月替はりても朝顔の三ツや四ツ  
朝顔の残り少なき花に佇ち  
冷やつける朝の風船葛かな  
一茎にひまわり三花朝がくる  
試し鳴きならむリリりと朝の虫  
箱根町街道沿ひに槍鶏頭  
昨夜の夢畳み込みたり夕顔は  
ひまわりに朝の村内放送あり  
全開の夕顔前にし「こんばんは」  
夕顔の咲きある闇にいざなはれ  
いと白き落蟬の腹風立ちぬ  
家裡で鳴く虫ならねそれとも外（と）  
防災のいろはあれこれ学べる日  
鯨こづく国に生まれて防災日  
防災の手だて今日こそ施せと  
今日を逃がしてどうする我が家の地震対策  
棚の本ときに仇なす震災忌  
震災忌その翌日のかんかん照り  
今更と云ふも巡り来震災忌  
無策のまゝ今日まで到る防災日  
放置すればいづれはツケが震災忌  
新米と後ほど聞いて道理とも  
新米といはれ一粒灯にかざす  
新米といはれ一粒箸に懸け  
ともかくも鉢に放して屑金魚  
レントゲン平目のごとく張りつきて  
夏果ての隠れ煙草を患者らは  
ギブス嵌めそれでも煙草炎天下  
風死す中あらぬ方見て採血す  
落蟬のほとり過ぎゆく勤め人  
落ちてゐる蟬の骸と商店街  
落蟬を足許に見て出勤す  
今朝秋の踝汚し戻りけり  
穴開ける虫を推理す芙蓉の前  
ふかし藪皮の赤さの切なけれ  
白雲宙に放てり楠青実

夏惜しむ雨の水輪の川景色  
不作法な露を零せる茗荷採  
日めくりをぐいと引つ張る八月尽  
秋雨にけふ清浄と蟬の穴  
雨上り茗荷の一つでもがな  
夏瘦をばんかいせよとそぼふる雨  
寝そべるに畳いちばん夜の秋  
茗荷採ここに無ければもう一箇所  
ご無沙汰の案山子が見たくなり田圃  
回覧板届けに晩夏の腰痛持  
しのび寄る雨の風船かづらかな  
長雨に風船かづらきつね色  
蟬の啼く雨の桜の木暗がり  
長雨の秋の舗道に水輪生れ  
長雨に黄ばみそめたる並木の葉  
雨に啼く舗道の端のちゝる虫  
鶏肉は嫌ひ牛（ぎう）なら牛鍋で  
水底の木の葉にも年巡り来て  
● HAIKU200509sonoz  
夜又ぶしの実よりも迅く忘らるる  
クレヨン画くるくる描きのねこじやらし  
肝心の紅葉いろ欠く色鉛筆  
啼かぬ日のあれば秋蟬忘らるる  
舗装路もよしあし秋日照りつけて  
埃道なればのアキノキリン草  
登り来し麓眺めて吾亦紅  
かたまつてカンナ八紘一字かな  
吾亦紅枯れてしまへば風のもの  
朝顔を垣に這はする駐車場  
二、三日前まで秋蟬鳴きゐし樹  
諸食うて胸焼くるとはお壮んな  
風のなすまゝに零れて箒草  
草の庭いぢり廻さず箒草  
草生ふるに任せし庭の箒草  
火の見の下舗装されても相撲草  
女郎花日差す辺りの澄みきりて  
ルビ付きの小説小泉八雲の忌  
庭土が痩せゐて鬼灯ひとつきり  
庭の秋花は大方ハーヴ系  
布衣となりこれより秋の花づくり

少子化の世に朝顔の種子つけて  
新涼の海の見え出すモノレール  
わが在の草取りならぬ草退治  
鄙びとの手を焼くものに草退治  
町中の墓地の空飛ぶ油蟬  
蚊を追へることも家居の手すさびに  
見るのみで釣りは遣らねど海辺好き  
太公望ならねど鯨の海の端（はた）  
里山歩き雑木林見て茸見て  
虫音の中ラジオ告げある台風禍  
朝の虫昨夜の台風嘘のやう  
のうのうと藪蚊が飛んで岳父の家  
虫喰いの葉裏に隠れ茄子あり  
梨重しされど甘味の保証無し  
山は秋柿の寒山栗の拾得  
誰知ろうリトルボーイの下りくるそら（原爆忌）  
エノラ・ゲイぶーんと飛び来て止め刺す  
台風の風納まると見え夜半  
のるまなる台風と聞きやきもきす  
物忘れ老の救いといふも秋  
秋扇困ったことに亦度忘れ  
今朝秋のモーニングコーヒーブラックで  
今朝秋に出勤途上の珈琲店  
二階より黄ばむ柳を見て珈琲  
傘颯る風横殴り縦殴り  
台風の雲脚迅し箱根山  
雲助のやうな雲脚野分山  
盆休みシネマ見て来てトンカツ屋  
そこそこ採れむかご飯には数足らず  
山芋の葉の黄ばむ頃山歩き  
こころしてツユクサ峽の露受けぬ  
花幾彩百日咲いてポーチュラカ  
醜態をさらす百日草とはなりぬ  
露の世の我にとり憑くものわすれ  
秋に入りとつくり眺む雲の峰  
秋の蚊の幽霊じみて足の方  
黄葉いちまい横臥の上にはーむれす  
噴水の頰れ破調は俳句にも  
切り絵然たる巷夜の秋  
秋雨にガタがきてある前立腺

虫の夜の小便籠相致しけり  
夏惜しむ厠窓より遠（をち）を見て  
零してはバチが当たるぞ今年米  
だうしてかよく蚊に喰はると生身魂  
屑籠の屑仕分けして八月尽  
シャワー浴び気はづかしさの骨と皮  
コンビニに大夕立の雨宿り  
手すさびの手のゆく腋毛八月尽  
秋は美術のポスター写楽の大寄目  
赤恥をさらす訳には蟬しぐれ  
外燈はおのづから点き花ゆふがほ  
咲き登る夕顔脇の月を見て  
夕顔と夕月闇を同じうす  
満月に颯爽と佇つ妻なりき  
秋刀魚の骨代はつて外し遣りにけり  
焼さんま得手のものなる箸捌き  
既にして八月尽の木の葉髪  
返信の出だし書き出す夜の秋  
余りある時傍に栗を剥く  
誕生日忘れずにみて栗ご飯  
栗剥けと盆と包丁置きゆけり  
その昔海辺の軒の串アサリ  
此が彼の一夏経たる子蟻螂  
午報の浜海より老蛭蛸提げ来  
夏枯れの樹を見て選挙投票日  
玉すだれ政権どちらに転ぼうと  
ちらほらと投票の道玉すだれ  
秋暑避け投票は朝のうち  
悪茄子チャッカリ花壇の仲間入り  
投票日朝顔の早種子つけて  
世直しのつもりの選挙相撲草  
木瓜の実に選挙合戦始まれり  
青柿や党首張り上ぐ第一声  
歳晩の振込金額確かめねば  
● HAIKU200509sono3  
渦巻いて蚊取線香めく火花  
夕立に妻はクイズを抛り出し  
のそのそと鹿の寄り来ること秋雨  
栗ご飯お焦げうれしく釜払ふ  
ひとり酒晩夏の喉締む南蛮漬

萩の雨目線移せば芙蓉の雨  
俄雨芙蓉を叩き萩叩き  
夏枯れの庭に癒しの雨ありぬ  
萩の葉を震はせ雨の到りけり  
風船かづら軽くこづきて雨到る  
芙蓉に暮れ芙蓉に明けぬけふも亦  
盃を置けば影添ふ秋灯  
二百二十日海を隔ててテロ・ハリケーン  
布衣として瘦せず肥らず夏が経ぬ  
じれったく風を待つなりねこじやらし  
梨の持つ硬さを意志と受けとめぬ  
勝手に寝て勝手に起きて気づけば秋  
ちちろ鳴き選挙結果は予想外  
ニュースキャスター金魚の如きおめめして  
草の根の民意奈辺に昼の虫  
土均しつ秋植え球根何にせう  
ともかくも選挙終れり赤とんぼ  
夜店より孫を剥がすにくまれ口  
百合花を了へて籠れる半日陰  
建て込める家の一つにして良夜（我が家）  
良夜明けよべの供物のなつかしさ  
良夜明け常の日差しをもたらせり  
今日の月匂ふがごとく今日の雲  
今日の雲月と優劣つけ難し  
昔よりある路地月と遊ばばや  
この家の先代覚えてをり良夜  
天心に節穴のある栗名月  
十五夜の月みてあぎと引つ込めぬ  
良夜の足二本重ねて寝まるなり  
立待と月は名を替ふその日なり  
十六夜の月の風姿を磧越し  
月見まんじゅう月が食うたか一つ減る  
月白の今ほんのりと海の方  
月の橋日本画の粹尽しけり  
先代の主しのべと今日の月  
満月を見んとこぞれる駐車場  
腕組みをしをれば満月おのづから  
満月の終に櫂をしのぎけり  
満月の高さ櫂を抜き去れり  
煮付けの甘味口に残れる良夜かな

首長き花瓶にくさぐさ活け良夜  
虫聞いて月の出るまで月見の座  
月と月見まんじゅうどちらもうまさうに  
供え物に月光ゲ射し込むまで一刻  
まんじゅうと芒と良夜頒ちけり  
影絵のごと二階の人影良夜なる  
つくねんとすすきいっぽん月を待つ  
漁港より芒採りきて月祀る  
鉛筆をいっぽん置きて月を待つ  
庭先に出づや良夜の月奈辺  
二つ飛ぶ夜間飛行の灯も良夜  
白萩の上に懸かれる今日の月  
夕顔の二、三咲きある今日の月  
望月の差すまで間ありじれったき  
満月を昇らせちちろの囃子方  
六十と餘歳の吾に今日の月  
今日の月夜間飛行の道しるべ  
望月に夜間飛行の空路あり  
窓際の屑籠に差す今日の月  
居間にけふも妻とふたりの良夜かな  
家々の良夜の窓の四角な灯  
町中の墓地ぼっかりと今日の月  
望月のすすみ具合を庭に出て  
良夜の灯洩れぬる家の簾越し  
路地折れて今正面に今日の月  
月の路地歩いてみたたく家抜けて  
垢抜けてみゆる良夜の月の路地  
路地から路地渡り歩けり望の夜  
満月の下に睦める家と家  
月の家ヒゲタ醬油の髭の屋根  
月見まんじゅうぼんと置かれて月祀る  
手に通す良夜のパジャマ薄黄なる  
灯を消して今宵の月を軒先に  
望の夜の空明りして海の方  
天井窓良夜の明り洩れてをり  
門被り松の中より小望月  
月見まんじゅうもちもちとして月見の座  
月を待つ路地暗がりに馴染みごゑ  
望の夜のかさごの煮付け甘かりき  
海に向き芒活けをり月今宵

月祀るすすきの他に萱も活け  
満月は出洩るものでなければ  
寒れ葛西日の中を這い回り  
雲高く澄みて夕顔月夜かな  
月明に夕顔の数幾つなる  
夕顔と月と村雲いと白し  
花すすき揺るゝ辺ひねもす釣り糸垂れ  
花すすき囲める月の小漁港  
釣舟の戻る両岸花すすき  
釣舟の舳うち過ぐ花すすき  
釣舟の帰舟相継ぐ花すすき  
紅葉谿旅の途中で一ツ風呂  
土瓶蒸し吸れば喉が領いて  
木々一つ一つにもみづり方ありぬ  
蟻螂のひらり飛び来ぬカーテンに  
寝るまへのこおろぎ色の天井板  
八月尽粗きひかりの荒き海  
辛夷並木虫瘤をもて装へり  
浦のつく駅名多し渡り鳥  
虫の音も泥む畳の目も密に  
虫の音のじんじんとフルオーケストラ  
山々は色づき始む殊に槍岳（やり）  
● HAIKU200509son04

秋彼岸風に塔婆の鳴るばかり  
墓地の路細くややこし秋彼岸  
寺に自転車乗りつけてあり秋彼岸  
銭湯の跡地の辺りかもじ草  
白粉花この路地ここでどんずまり  
花すすき愛でをり釣果は別にして  
こゑ掛けてその家の芙蓉愛でをりぬ  
八月尽波立つばかり海無人  
釣舟と釣瓶落としの赤灯台  
よき位置に月廻り来て月見の座  
ここにただ積んであるだけ秋団扇  
秋扇いっぽん持ちちて通院す  
秋簾老いさらばえて開かずの戸  
咳払ひせしは主か秋簾  
大凡の間取りが判る秋隣  
痴話喧嘩あとはだんまり秋すだれ  
刺すことの今旺盛な秋蚊ども  
恰好の脛あり秋蚊むさぼれり  
度忘れの正解妻に質す秋  
底紅に向ひて廚の炊事かな  
秋の蚊を覚悟の種子採支度かな  
花に粉かけをるごとし秋の蝶  
十六夜の犬のごと路地抜けゆけり  
十六夜の鯛の目浸かる潮汁  
潮汁吸る器用も不器用も  
栗飯の栗をごろんと箸に乗せ  
栗飯の栗に就き妻補足しぬ  
鳳仙花戦い済んで日が暮れて（選挙終る）  
十六夜の空にするりと蔓伸びて  
認知症とはけつたいな秋彼岸  
言替えても痴呆は痴呆秋彼岸  
いつか読む予定の本と秋団扇  
秋団扇こゑ掛からねば仕舞はれず  
ここに来てペース落とせり軒朝顔  
棚の前踞んで佇って種採れり  
秋団扇転がり込みし三連休  
連休のしんがり糸瓜忌でありぬ  
糸瓜にも目を遣る子規のいとおしみ  
下駄履きの種採日和とはなりぬ  
風に転け易きすすきの一輪挿し

花瓶替ゆ芒の頭重ければ  
草長けんと一生懸命癩祭忌  
吾は庭歩き放題癩祭忌  
庭歩き願ひし子規の忌日なり  
苦しみを絵筆に託し鶏頭花  
書きつけて苦しみ逃る大糸瓜  
苦しみに手加減はなし癩祭忌  
人ごとの老人の日でなくなりぬ  
老人の一人に数えらるゝ日来ぬ  
人ごとのやうに聞きゐて敬老日  
敬老の日とや内心いやいやす  
蟻螂の逃げるにあらず尻向けぬ  
蟻螂の踏まえどころのおぼつか  
夕顔の凡そ五十も咲きたる敷  
十六夜の夕顔漂ひ初めにけり  
酔ひ誘ふ十六夜の雲こむらさき  
十六夜の外灯自動点火せり  
十六夜の酒にむらさき菊膾  
球根を植え了へるまで蚊に苦戦  
キンチョール振り撒き種を採らんとす  
秋の蚊を振り切りしかと辺りみる  
蚊に喰はれじ絶えず躰を動かしゐて  
風船かづら日の色帯びて来たりけり  
傍目にも釣れぬと判るねこじやらし  
釣人の口をへの字に秋日中  
秋草を手折るは釣れぬ証拠なり  
種採の封筒ふうと膨らませ  
こんなにも採れしその種子だうしやう  
あり余る日を置いて種採れり  
十六夜のお手元酔ひておぼつか  
なげやりになりてそれでも鯿を釣る  
ねこじやらし茫々鯿の当り待つ  
空缶にたった一匹鯿の秋  
糸瓜忌の一犬吠えれば三犬吠ゆ  
糸瓜忌の朝刊隅々まで読める  
糸瓜忌の要点のみ記し返信す  
十六夜の二階に点る豆ランプ  
家毎に一つ良夜の玄関灯  
影ぼんやり映りて良夜の障子棧  
十六夜の醤油いろして古障子

秋の蠅文化進みて姿消す  
止められぬ煙草のけむり秋彼岸  
夏ものをまだ手放せず秋彼岸  
ゴム入りの作務衣の手首蚊を封ず  
大玻璃戸汚れの目立つ秋日和  
用済みの鉢重ね置く秋日和  
種袋まとめて保管秋日和  
生身魂だうした訳からつきよ好き  
判りにくき墓地の地図見て秋彼岸  
桜いっぽん墓地に突出秋彼岸  
墓地の塀少し撓んで秋彼岸  
墓地囲ふ塀は秋日の余熱持ち  
町中の肉屋の裏の蟬の墓地  
塔婆より塔婆へ飛んで油蟬  
素焼鉢西日を吸ひて秋彼岸  
彼岸花咲きぬし場所を事細か(妻)  
酔芙蓉こゑあり色の変はれると  
庭先に回り込み来て柿貰ふ  
柿貰ふ甘くはないがと親父さん  
これ貰うて呉れと突き出すころ柿十(とお)  
柿渡すに相も変はらずつつけんどん  
柿落とすこゑが筒抜けお隣さん  
秋の蝶あちらではたはたこちらではたはた  
山をなす萩の麓に蛭蝶  
蛭蝶はたはた舞へば書き割りめく  
町中の墓地通り抜け秋彼岸  
果物の芯の錆び出す秋彼岸  
● HAIKU200509sonos  
隣より貰ひてほんに可愛い柿  
妹が姉を誘ひて秋彼岸  
ふかし諸用意留守居の間食に  
めいめいが一役こなす秋彼岸  
鉛筆噛み鉛筆削りの秋の声  
一幹にも裏表あり秋の風  
毛虫跋扈もう手遅れの木と知れり  
秋思あり瓜実顔のくわりんの実  
ちゅと鳴くは鼠か何か野路の秋  
秋郊の道絶え絶えに続きをり  
まだ判らぬ肥らぬ原因芋の秋  
ふかし諸など間食に肥ろうか

わが口に合はせて細めのふかし諸  
やりかけの溜まり放題長き夜  
種採りをしたり片づけごとしたり  
虫の音を聞きつゝ庭の片づけごと  
鶏頭を引っこ抜くとき土けむり  
女郎花今を盛りとなまめきぬ  
句集繰り起てる風こそ秋の風  
このところ忘れぬしが法師蟬  
法師蟬腹を凹ませ鳴きをらん  
終のこゑ張り上げ啼けり法師蟬  
長啼きのこれにて退散法師蟬  
夕顔が毎日咲いてけふ七ツ  
手短かに別れを告げて法師蟬  
法師蟬有無を云はさず暮れしめぬ  
昏れてくる夕顔の白萩の白  
仲秋の月にいろいろ名を付けて  
蠮螋がゐて種採の手が止まる  
種採のおつとここにはいぼむしり  
十六夜の生節の血合いつつき食ぶ  
たつぶりと寝て食ふ秋雨前線下  
秋雨の音する闇を窺ひて  
列島は秋めく雲の通り道（天気図）  
孫の為頑張らなくてはミニトマト  
ミニトマト果てはお化けとなりし枝  
小ささが故に色濃しミニトマト  
食卓にちよくちよく上るミニトマト  
湯河原の湯けむり越しの早紅葉  
颯爽と歩いて月の近くに來  
道すがら夜風に稲の香も交り  
百日を経てこの彩や百日草  
家包み身近なものに秋の雨  
高く咲き雲の風味を花芙蓉  
戻れば種採の種いと黒し  
コスモスに高原の日の乗つてをり  
コスモスの上に市街地展げ見ゆ  
女郎花盛り光の嵩増しぬ  
朝顔と鉛筆書きの種袋  
朝顔に物干し竿を奪られけり  
なあなああの仲の芒と望月と  
気がつけばくわりん毛虫の梁山泊

蝶羽搏ち芙蓉に風を送りけり  
かまつかの繪手紙しみじみ繪のちから  
朝顔の種つけながら終の花  
はやばやと旭岳より積雪報  
空撮の初冠雪の岳雄々し  
ベティさんの睫毛よろしく友禅菊  
日毎咲く芙蓉と共にある生活（たつき）  
味爽の方から冷えくる虫しぐれ  
単調に芙蓉咲く日々続きけり  
秋日差し薄手の花を好みとす  
コスモスのひよろひよると長け日々単調  
ハンカチがなければないで素手で拭く  
降りさうな合間を縫ひて秋黄蝶  
同色の萩に止まれり蛭蝶  
気をもませながら秋蝶まだ止まらず  
秋黄蝶止まるとみせてなほ止まらず  
秋の夜の字幕に友情出演と  
自転車のキュツとブレーキかけ秋天  
あらまああの語氣に吞まるゝ酔芙蓉  
秋冷と腕叩きて云ひし人  
放置さる団扇と本と扇風機  
通販の庄内米をファックスにて  
糯米をおまけに通販庄内米  
ぼたぼたと芙蓉落とすに与す風  
禅林に木瓜の青実の大知識  
着おろしの秋分の日の麻下着  
虫喰いの放つたらかしのしどみの実  
眉上げて唯秋冷といふばかり  
秋分の一と日を使い切りにけり  
仲秋のある日切符を買ひに出て  
冷まじや葉の端の露（けば）だつは  
ポポの実は食へざるものかと一人が云ふ  
茸の名思ひ出せずにある目つき  
貼り交ぜの友禅菊の五花壇  
小気味よき友禅菊といふひびき  
友禅菊植うる場所がら考えて  
野菊にも庭の一処設えて  
可惜芙蓉散らすにまはる午の風  
鳥ごゑの空に吸はるる梅擬  
波風の立たぬ日ばかり草風船

葉は少し傷みながらも梅擬

秋海棠情にほだされ易く生れ

コスモスに配色といふ一語あり

にはか信心嘸う勿れと実紫

どちらかと菊の好みを云へば野趣

菊芋の廻りの山も装へり

朝顔種封筒に入れお裾分け

堂裏に榎の実落ちて埋む頃

花の名をおおかた忘れ生身魂

秋晴れにちよつと自慢の出来る花

三箇所に芍薬植えて地味を知る（絵本作家 ター

シャ・テューダー）

月に芒活けて何とか様になる

梅檀の実の垂る境内抜けゆけり

単純に見えてどうして松手入

● HAIKU200509son06

セセリ蝶貝のごとくに翅割りて

セセリ蝶ねずみの如き貌をして

お中日飛びくる蝶の黄粉いろ

蚊に喰はる処をさうかさうかと揉み（孫、美雨）

薄荷買ふといつまで言ひ張るわからんちん（夜宮）

栄光は斯くのごとき歟葉鶏頭

半歩でもともかく前へ草の花

一切を風に託して芙蓉立つ

色古りて風船かづらにも老境

ややありてこれぞ正しく酔芙蓉

限りある処を往き来蜩蝶

蜩蝶風のかけらとなり駆くる

風落つとおもへば起こり芙蓉の辺

月祀る芒を惜しみ飾り置く

鯰たうたう跳ばねばその場離れけり

鯰跳ねず橋のかたへに佇めり

橋渡り了ふまでに鯰跳ねたまへ

二代目に主かはれり孔雀草

泥亀町（でいきちよう）とはこの辺り赤とんぼ（埋

立地）

自転車の荷籠に一つユリ黄葉

通るとき白萩汚してはならじ

夏枯れの街路樹鳴らし風吹くも

夏枯れの木を見上げある遠の人

抽斗の三角定規もみづれり

街巡るに方角があり秋の風

渡り継ぐ橋それぞれに秋の風

生身魂畳を擦りて小用に

真夏日の畳離るゝ蹠の音

生身魂小用に起つ秋の夜半

ちぐはぐでありしが踊りに溶け込めり

夏枯れの一息入れをる並木とも

公園のもみづる樟見てハンバーガー

一円の円心をなす一夏木

秋の蟬残る時間を計りつゝ

夜を長く感じ始める灯の許に

手の翳を察すに秋蚊抜かりなし

酒気帯びて五體むんむん秋蚊くる

押しっぱいぼん鬼に金棒角力かな

つたなきをぬぐひきれずにあるばった

相對す仏に白豪萩の花

彼岸花神社の榎の木の下

斑鳩に遊ぶおもひの彼岸花

橋の央鯰の跳んでも跳ばなくても

コンビニで間に合はす供華お中日

コラムニスト蘊蓄傾け瀬祭忌

萩は枝を卒なく四方に広げけり

夕顔の一つは月に対しけり

ちちろ虫無名がいいと鳴きにけり

脇腹に秋の灯ひとり酒酌めり

河原石手にとることとも一秋思

ぶだう小粒指にも甘みありにけり

昏るゝまで腹拵えせり立佞武多

軽食に時間を潰し立佞武多

街角を器用に曲り立佞武多

街角に突っ立つゴジラと立佞武多

シネマ向き映像ゴジラと立佞武多

立佞武多ゴジラのごとくやつてくる

絵が得手の人の手になる萩便り

極上のお数珠の材は萩の露

萩の葉にまろび遊べり露法師

秋海棠頭（かうべ）を深く垂れてこそ

蘆原見て無数の瑕ある眼鏡の球（たま）

セザンヌの山装へるカレンダー

菊芋に山が装ひ始めけり  
霧に頭つ岩相霧の道ゆけり  
足許も草の色して霧の中  
ぞんざいに網張る奴も女郎蜘蛛  
外見は一見丈夫羽抜鳥

十里来て案山子見たしと案山子面（づら）

松虫草ひるがへるここ天界か  
衣被不義理いちいち気にしては  
朝顔の種落ちてゐる殻抓む

猿（ましら）めく貌を風船かづらの種

曰くありげな案山子に仕掛け無かりけり

岩壁にこびりつく牡蠣秋の雨

鮭缶で二膳軽々豊の秋

アフロリズム逆手にとりて布衣の秋（さる俳人）

大型書店秋昼の灯を無駄使い

大根下ろし老いの舌先まだ曲る

秋雨にじたばたしても締切日

朝顔の種に送られ出征す

朝顔の種仕分けして甲乙丙

冷まじや大根下ろしの素（しろ）の山

萩叢の蝶を発たせて朝の雨

萩を打つ雨に慌てゝ蛭蝶

彼岸花土冷え来ればたちどころ

夕顔の筒落ち昨日の音がする

雨の音辺りを埋め秋の暮

老人は小粒なぶだう欲しがれり

● HAIKU200509son07

藤袴名前負けとまでは云はじ  
うそ寒き小便の出に時かけて  
ながら族夜長妻針持ち出して

この年の始めの銀杏拾ひけり

玉子焼薄く広げて秋の雨

秋雨のい行くは猫の忍び足

実紫師系を誇るおたんこなす

秋雨とはおもへぬ程に降ることも

家中がぎんなん臭くなり雨日

秋の雨みしりみしりと蓮葉打ち

斑入り芒唯の芒になることも

萩叢を雨は手加減して打てり

一日が終るそびらに秋の雨

衣被剥きつゝレシピメモしつゝ（妻）  
焼茄子に生醬油ぶっかけ食へといふ  
ちよんちよんとがんに七味たうがらし

済む済まぬ香奠のこと鴟目

雨の日は夕顔の花押さえつゝ

白萩は大鳥となり月明に

散らせ置く萩の花屑始末せり

永六輔精霊ばったの畜ならん

蠮螋のいつかは枯るゝ貌三角

蠮螋を凝視ひるんだ方が負け

茶碗蒸し岳父の茶碗分厚かり

猫舌の妻と夜寒の茶碗蒸し

湯呑にぎんなんぼとんと落し茶碗蒸し

よく使ふ薄手の手拭汗拭に

度忘れと向き合ふこともなく三秋

度忘れの助け求めにすててこ着

杜の木の実ぎんなん終り透ける空

サルビヤに颱風一過とはゆかず

向日葵の孫花八つもありにけり

夕顔の根の逞しくなりゐたり

檀家でもなければど寺の銀杏採

拾ひ来し寺の銀杏皆大き

這ひ止まぬ蔓の八月終りけり

うやうやしく三次の葡萄届けけり（片山由美子さ  
んより賜る）

このぶだう旨しこの貌御礼とす

その巨きさ無花果大のぶだう哉

おほらかに露の凝りしが葡萄とも

昇天の心地ぶだうの一粒に

曰く言ひ難しぶだうの果肉とは

めいめいが語りて葡萄狩のこと

口皸の深々ぶだう食うぶなり

風が出てぎんなん拾ひ日和なり

強き風ぎんなん拾ひを喜ばす

ぎんなん落つそびらにいやに大きな音

ぎんなん落つ柔らかき音硬き音

ぎんなん拾ひおのづと決まるテリトリ

ぎんなんの匂ひ水屋にたちこめて

ぎんなんの落ちて来ぬかとあぶぐ天

ぎんなんを拾ひ過ぎしか腰痛し

ぎんなんを拾ひ過ぎ腰やられけり  
歩いて拾ひ歩いて拾ひ落銀杏  
水屋辺に古りて朽ちゆく落銀杏  
落ちさうで落ちぬぎんなん見えてをり  
国道に落ちし銀杏轢かれけり  
昼餉とり亦ぎんなんを採りに出づ  
銀杏採梢を見ながら小休止  
ぎんなんを採りたる後は妻任せ  
一仕事ぎんなん口に入るまで  
毛先までぎんなん臭さにまみれけり  
降るぎんなん主婦が虜となりゐたり  
ぎんなん採る通りすがりの筈なりしが  
実の落ちていてふの骨格見え来たり  
今も実を少年の日の大公孫樹  
琥珀いろぎんなん指輪をせぬ妻に  
新米に交ぜぎんなんのエメラルド  
ぎんなんの光沢放つ炊き御飯  
ぎんなん割る錆びしペンチを持ち出して  
秋雨として棧橋を濡らす雨  
萩叢より蝶のほろほろこぼれ飛ぶ  
茶を淹れん彼岸以来のぼたもちに  
熱く濃き茶を淹れ秋雨聞きゐたり  
秋風に団子しみじみ米の味  
長雨と長き夜毎の三秋へ  
鈴生りのいてふの樹齡推し量り  
鉢仕舞ひ簾は外し颱風下  
馴れ合ひの台風となり手を抜けり  
両力士顔を叩いて喝入れぬ  
乾坤の一擲角力組み立てぬ  
六感を働かせ買ふ大西瓜  
弁慶草擦り傷つくらぬ子が殖えて  
はすかひの家に子がゐて弁慶草  
二昔前の花なり弁慶草  
弁慶草求む流行らぬ花ながら  
朝顔につく亀虫を払ひをり  
悪食の庭のかなぶん根こそぎに  
木のかなぶん揺する力が余りけり  
ゴミ捨場とても鴉のテリトリ  
孫の手がここにも無くて鳴雪忌

● HAIKU200509son08

金魚掬ひ一回だけとつっぱぬぬ  
擦り寄りて馴れ馴れしいぞ狗尾草  
籐籠に千日小坊といふ小花  
長雨が長雨を呼び千日紅  
朝顔の蔓を邪慳に払ひけり  
この家の主貌して墓  
お天道さま種採近き垣枯らす  
曼珠沙華木（ボク）の根っこを飾りけり  
もみづれる果のいてふの肋見す  
底紅のほとり残して昏れてをり  
人懐っこく猫じゃらしとも狗尾草（えのころ）と  
も  
種採の為に鉢もの片づけず  
種採のほか用無き庭となり  
いつしかに果（このみ）結べる樹の殖えをり（狭  
庭）  
もそもそと種採るほかに人気なし  
埋立の頃の種なむ草の花  
顎髯のいやにちくちく今日の月  
描線のみな生きてゐる曼珠沙華  
彼岸にて見ることあらむ曼珠沙華  
榎の実のほかにはぎんなん落とす杜  
葛原に遊び呆けて荒ぶ蔓  
秋風に色の脱けたる作務衣着て  
龍淵に潜む言葉の綱わたり（句作）  
三秋の季題心に留めて旅  
曼珠沙華先づは一輪挿にして  
添書のごとき野菊を背景に  
初殻の音の頭に沁む床夜寒  
魚にもくちびるやや寒覚えけり  
鳳仙花ほどに晩年弾けたし  
長雨に振り籠められしかたつむり  
零余子飯むかしむかしが口癖に  
秋郊を彩どり性（たち）の荒き花  
老妻に計り秋植え球根買ふ  
夫が妻に相談持ちかけ球根買ふ  
秋球根こつちがいと老妻云ふ  
縁よと云ひつ買ひ込む秋球根  
球根を姿勢正しく植えて遣り  
一球に一念籠めて植う水仙

夕冷え来水仙六球植え込めば  
球根の名札は日本寒水仙  
選り惑ふ秋の球根フェアかな  
植えるなら水仙と決むたちどころ  
ご近所より少し早いが松手入  
松手入ちよくちよく脚立据え直し  
松手入素人の域抜けてをり  
松手入暫く脚立の中段に  
曲げし首また立て直し松手入  
山妻の見守る中の松手入  
松手入新の軍手の昏れてくる  
松手入あとかたづけを待つばかり  
松手入済みし脚立のひやつけり  
軍手・莫菴・脚立を用意松手入  
夕闇に馴染み初めけり手入れ松  
出序であふぐ松越し今日の月  
雨に青湛えくわりんの器量ぶり  
十五夜の薄採りゐる見知り人  
採り落とし大きな種と思ひけり  
秋の雨松に生気のみがへり  
卓に置きぎんなんかぶれせし手見す  
茶ぼこりのかすかにあがる新茶淹れ  
蜆蝶ひねもす落着きなき庭先  
終末の喇叭を吹けり花ダチュラ  
栗剥きの我慢比べに音を上げず（妻と）  
栗剥けば手が莫迦になり小休止  
山と盛る栗をのしりのしり剥く  
剥きづらき栗を手にして長丁場  
栗を剥く手休め亦も溜息つく  
安請け合ひして剥く栗の硬きこと  
引き受けし手前剥かねばならぬ栗  
かうなれば意地なり栗をとことん剥く  
栗剥いて見るのもいやといふ顔す  
やうやくに剥き切る栗の皮の嵩  
栗飯の栗の角々灯に栄えて  
からかねの屋根に鳩置き宮紅葉  
腰痛しぎんなん拾ひここまでよ  
祭子の強く手を引きねだりごと  
礎だたみ覆ふ藤壺冷まじや

登り口そこに団栗捨てゝあり  
捨て団栗何故か仔細はわからぬが  
新聞の見出し先づ読む瀬祭忌  
いづれ行く彼の世の下見まんじゅさげ  
二回目の種を採るとて小雨の中  
夏枯れの鉢一処にまとめあり  
うきうきとしてランタナは秋の花  
ランタナはラテンリズムの「ラ」のつく花  
仲秋の或る晴れた日の耳掃除  
鑑賞用とて求（と）む鉢の唐辛子  
種を採る蝶々婦人の唄声に  
鶏頭の見栄えのいつか過ぎてをり  
老人席満席町内運動会  
飛び入りにめぼしきものあり運動会  
ずるずると日の経つのみや冬瓜汁  
冬瓜にこんな食べ方あったつけ  
秋冷のコップ選ばず一輪挿し  
空蟬の縫る一ト葉もみづれり  
遅植えの故の鬼灯乏しかり  
篤き手が足らぬ鬼灯ひとつきり  
台風の後の鶏頭つんのめる  
口に出し云ふもはばかり寒さとも  
秋口の胸に留めおく寒さとも  
罎の上に罎を張れるもの秋意とも  
潦乾く間もなし秋深し  
種ならば何でも植う妻四月馬鹿  
● HAIKU200510sonoi  
薄鼠の艦艇浮かべ秋の海  
水底について向き変ふ岩魚の斑  
瞬く間雷鳥岩に紛れけり  
岩牡蠣の累々巾着湾澄めり  
秋の蜥蜴壁温ければ壁伝ひ  
藪裾に燃え尽きをりぬ曼珠沙華  
もう疾うに起きて居るなり曉の虫  
小さい分花数多く百日草  
這ひ這ひする朝顔諸との掛け合はせ  
夜寒さのがちやがちややらねば締まらぬ戸  
朝寒の茶を注ぐ音収斂す  
忘れぬしカーテン引きに起つ夜寒  
うそ寒の厨に水の吸はるゝ音

秋の蚊に喰はれて痒し足の甲  
肌寒の夜と覚えて早寝せり  
澁む茶のごとく坐しゐて夜長の底  
四辺冷え障子シツクリしてくる夜  
秋晴のけふ何しやう先づ菘  
秋晴をだうかうもなく家に居り  
草の上は空に直結雁わたし  
一息に蔓引き抜けり秋天より  
鼻唄の一つも出さうな花野行  
やや寒の早寝天井高き家（妻の実家）  
芙蓉喰う虫はお主か悪（わる）じやのう  
いとどと螻蛄こもごも露けくなると云ふ  
夜寒さの暖をとるとて白湯を呑む  
明け鴉一騒ぎして十月へ  
髯を振るこほろぎ遺愛の箆笥の辺  
採れし種嫂と折半す  
流行りありトサカ鶏頭久留米鶏頭  
鯨釣りの坐せる突堤温とかり  
コンクリート放熱なかなか鯨釣れず  
秋晴をはばかりもなく解体屋  
秋口に入り咲く西洋朝顔も  
庭茂り放題虫も鳴き放題  
けふ大分冷え込みかなり秋らしく  
黄ばみくる庭草大分秋らしく  
色変り風船かづら黄昏いろ  
夕顔の花数減つて来しと妻  
八十の朝顔咲くと誇らしげ  
悪たれは何處にでも居るまんじゅさげ  
ぎんなんの落ちて水屋を汚しけり  
ポキポキと目で折り往きぬ曼珠沙華  
革靴の一蹴りで足るまんじゅさげ  
曼珠沙華既に御首級あげられて  
十五夜の水屋に張れる水満満  
秋草の丈すんなりと雨に長け  
ひとり酒鯨山椒に出来あがり  
匏相して月見の酒を注ぎ零す  
恥らひの色を見せけり酔芙蓉  
しんしんと雨吸ひ込めり箆草  
かはほりの巡回寺を古くせる  
呆と一つ朝顔が咲き始めたり

路地裏の空割り抜きて望月は  
開くまで夕顔の筒間延びして  
この路地に建て込む家並今日の月  
真意なほ判らぬまゝに夕虹立つ  
ネットの蔓上へ上へと秋高し  
うそ寒に着たり脱いだりややつこし  
種採ってしまへば残る棒と蔓  
ものの種身ぐるみ脱がすぐとく採る  
うそ寒き風が作務衣の袖口より  
セーターは一寸早すぎ廻り見て  
胸張ってセーター着込むこの冷え込み  
さてこれで幾鉢枯らす夏の果  
内陸をさしのぼるなり鮭の川  
脱ぎ捨てしものを跨ぎて日の盛り  
その音色尖って来たか夕蠅  
秋の暮鮭のはら身を肴とし  
猿（ましら）めく草風船の種を採る  
ちようしたの鮭の缶詰独酌す  
車輛音カタカタひつじの二番穂に  
気の済むまで空蟬のとる容  
潦一日にして澄めるとは  
蜥蜴の尾ちよつくらとれた位では（道路公団人事）  
この道の先知らざりし秋の空  
洋梨のふてくされある何でも屋  
秋空の見え方同じ路地をゆく  
ほうほうの態で野を抜け牛膝  
枯るゝ種中には少しひねたるも  
二歩三歩さがって見え来今日の月  
夏草のまた生えくれば同じこと  
蒲の穂の一本挫折し浸かる水  
列車で来て山に登って天の川  
蠅虎雨戸に日和がよささうと  
赤とんぼ汚るゝ翅に頓着せず  
長靴を履き種採るは蚊の用心  
向日葵の種皆窮屈さうにして  
朝顔の種こじ開けて下調べ  
白つつじこんな陽気に早合点  
運動会フライングして頭揺く  
蜘蛛の囀の修繕念には念を入れ  
どことなく赤らんで来て酔芙蓉

夕顔の実のたんと生り何と野暮  
大雨に陥没大根台地畑

くわりんの実極むべきもの楕円幾何  
カサブランカ花了りても嵩ばる葉

秋澄めるとは服薬のコップの水

種入れて収まりきれぬ安封筒

大あくびしてゐる亜米利加芙蓉かな

松手入梯子の高きに登りけり

「さうはどっこい」身ひねりかわす蜘蛛の糸

寺一つ隠す菊芋べらぼうに

愉しみは底にあるもの茶碗蒸し

ゑのころのさすらひ心そろそろ見せ

女郎蜘蛛網繕いを怠らず

木染月庭に芒を植え込んで

種採りを二回に分けて昨日今日

白萩の懸崖セセリ蝶のぼる

江戸絞りにふ名に惚れて萩屋敷

行先がすつと決まって萩の寺

いろいろな萩植えてあり萩の寺

紹興酒の空壺に萩活けてあり

蟪蛄も蔓の程度に枯れてをり

自転車を通すにじやまな萩を剪る

● HAIKU200510son2

地を汚さず銀杏拾ひにもマナー

参拝の合間ぎんなん落ちて殖ゆ

願ぎ事を称ふそびらにぎんなん落つ

ぎんなんの熟れて落つ音一寸違ふ

ぎんなんを拾ふ中には顔見知り

ぎんなんの降れば国勢調査くる

ぎんなんを潰し匂ひの修羅場とす

ぎんなんに汚れ放題このバス停

ぎんなんを踏みつぶしゆく市営バス

ぎんなん臭さ帯びて戻れば蚊に好かれ

風が吹くぎんなんが落つ行ってみぬ

妻に見すぎんなん採のけふの嵩

妻の褒むぎんなん採にまた出かけ

十月の朝顔淡き彩ばかり

彩見ては炊事はかどる酔芙蓉

夕顔の花を拾ふは筒拾ふ

夕顔の花に掌被せ同サイズ

藤寝椅子置きたき程に古き家  
席巻といふ語正しく泡立草

蜻蛉の溜まり場仮バスターミナル

枯れ長けるくさぐさ仮バスターミナル

鉄柵攀ず枯蔓仮バスターミナル

仮バスターミナル

一日ぼかんと過ごす海辺の秋雲と

呼笛がびつびと秋めく空の下

孫よりの電話は秋季運動会（あさひな幼稚園）

運動会びりつけつにも湧く拍手

ずるする子一人もいない運動会

幾たびも後振り向き駆くる子も

一等は万歳三唱運動会

二等賞は万歳二回運動会

三等はえいえいおうの運動会

目の前で抜かれてしまふ運動会

運動会必死になる顔ならぬ顔

運動会混みゐて日傘用なさず（妻）

こもごもに性格の出る運動会

走りては性格の出る運動会

運動会力走普段と別の顔

運動会の声援ひいきの男の子

金隠しは園児の高さ運動会

運動会園児手書きの万国旗

もどかしき園児の玉入れ運動会

爺婆が見てゐる中の運動会

素通りのバスの窓より運動会

運動会卒園児にも開かれて

運動会昨日にシート干してあり

十月の国勢調査の角封筒

種採の済みゐて国勢調査の日

種子あらかた落ちゐて垣の空真青

種採りてとんがる種と丸き種

種採の種枯れさまの手本見す

種子も我もいづれは消えてなくなる日

種子揉みて音にして見す枯れ具合

晩節を種採ることに安んじては

枯れ方が最も大事ものの種

をのこ我種子とは生き方異にして

片づけるつもりのか上秋日さす

背表紙のとれさうな辞書燈火親し  
破れ垣にむかご一蔓ながらへて  
酔芙蓉四つも咲いて廚窓

花よりも葉を喰ふ毛虫酔芙蓉  
ぐったりして昨日の芙蓉の宿酔

新しく今日が始まる酔芙蓉  
瀬祭忌肩の力を抜き詠めと

解説の要らぬ句を詠め瀬祭忌  
零るゝはむかごか露か八重葎

枯尾花はたきの如く天に伸び  
割箸で挟みて芙蓉の毛虫捕る

二階まで秋の朝顔上り詰め  
貰ひ柿喰へぬものでは無いと喰ふ

つままれることをいやいやする毛虫  
土挿みそつくり抜けし鶏頭花

うらぶれし鶏頭抜かうか抜くまいか  
日と雨のたまもの色づく箒草

せせり来て吾がズボンまでセセリ蝶  
昨夜見損ないし夕顔朝方に

寺町の坂に残んの百日紅  
蛭蝶せせり一日始まりぬ

百花園至る所に蛭蝶  
手と脚が弾んでならぬ運動会

萩盛る頃と訪ひしが堪鈍る  
含羞草九月過ぎれば忘れられ

目に見えぬ風に野ぶだう色づけり  
ぎんなん剥きとつくに鼻が莫迦と云ふ

種子零し蔓は一気に枯るゝのみ  
わが時間だう使ひても秋の昼

一日をだう使ひても文化の日  
吹かれては芙蓉の影の舞ひあがる

秋晴の観覧車乗るまでもなし  
菊鉢を提げ新刊書小脇にす

戦ぐ葉の上に芙蓉の影躍る  
食う菊もありてよきもの一株植う

食用菊の一つもありてよき庭と  
むらさきの食用菊の花盛り

日の翳り易きむらさき食用菊  
食用菊庭いちばんの日溜りに

草風船手品の種は秘めてこそ

せせり蝶分子のごとき動きして  
蛭蝶せせり疲れの無きものか

● HAIKU200510sono3

よき種を結ばんがため露降りて  
露わんさと芒が原に降り立ちて

朝露に芒重くれゐたりけり  
露たんと寺前町の屋根々々に

大露の寺前町の散歩かな  
厘毛の風に朝露走りけり

八百万の神々の座に結ぶ露  
大石田大河洋洋露満満

膾とす食用菊を植うことに  
酢加減よし手練れの妻の菊膾

殻付のぎんなん肴に温め酒  
ゆつくり枯る草風船の風流は

草風船枯れて素焼の鉢のいろ  
もういいかいもういいよとて秋の暮

落葉時雨始まる風か川を越え  
轟々と落葉しぐれの積みち

一膳で足る餉茗荷の古漬に  
新米に玉子にぎんなん尽しかな

山寺の芙蓉を風の吹き白め  
鶏頭のいたくうらぶれ霧雨に

世も末よたうもろこしが甘くなり  
水も澄む頃や九谷の猪口の底

晴眼の蜻蛉のごとく山見る人  
鶏頭の倒れしまゝがよきと見ゆ

長き夜の更かし方にも夫婦の差  
いつの間に妻寝てしまふちろの夜

酔芙蓉台無しにする雨ならぬ  
幾つもの風筋通し萩の寺

長夜の水一杯のんで寝るばかり  
世は移り二束三文バナナかな

バナナの斑彼の病床が浮かび初む  
齢もとる筈よ浅漬噛み鳴らし

芋届けにお産仲間の妻が友  
ぺらぺらの着慣れしパジャマ夜の秋

菊倒れ易く長雨至りけり  
月変り顔にもゆとり秋の風

朝顔の残花皆無の日もありぬ

朝顔の残花それでも四つ七つ  
朝顔の残んの花も見尽して  
朝顔の七八朝のおくりもの  
しんがりの朝顔にして深き紺  
懸崖菊背中々に取り巻かれ  
ぎんなんの弾まぬ音となりみたり  
部屋は一転ブーゲンビリアの樂園に（鉢を飾りて）  
寒さが得手不得手なる花花舖満たし  
文化の日茶碗揃はぬ茶碗蒸し  
秋雨の駅の花屋に掘り出し物  
ここで我に会うたが毛虫の百年目  
仏桑花葉巻めく花落しけり  
丹精に花畳み了へ仏桑花  
鶏頭の雨に遭ふ程槍尖る  
プランターに植えてへなちよこ槍鶏頭  
秋風の吹く日心を切り替えて  
手に蒸し諸音（おん）を嵌めんと逆引き辞書  
全盛を過ぐ鶏頭の雨まみれ  
その昔（かみ）は水底歩みし蝸牛  
人一倍長けて気位高き百合  
夏枯れの中の一つよ来信も  
給餌台かさこそと踏み色鳥来  
寒菊の苗鉢に雨小半日  
落ちてくる秋霖縁にびよんと跳ね  
迷ひなく即決寒菊購ふことに  
寒菊の十鉢雨に打たれづめ  
寒菊の苗買ふ彩の取り合はせ  
寒菊を育む愉しみ殖え生活（たつき）  
自転車の荷の寒菊のよく弾む  
ブーゲンビリア夜気にびっくり花零す（鉢植）  
草風船いつそ昔のまゝがいい  
朝顔の種青ければ棚解かず  
磧に降り秋草の穂を尖らす雨  
秋雨のペット屋金魚ぶかぶか浮く  
夜寒さのふぐりしゃきつと湯舟に入る（杉田湯）  
広々と使ふ銭湯秋の昼  
うそ寒の貌して潜る湯屋のれん  
うそ寒の銭湯掛け湯に順ありて  
しんみりと湯屋の厠の秋灯  
外（と）は秋雨湯屋の新聞読みゆかむ

湯屋へ老人うそ寒ければ足袋履き来  
夏瘦を映して湯屋の大鏡  
出来秋のわが体重を量る湯屋  
夜寒人雨冷えを来て湯に沈む  
まだ出番ある銭湯の扇風機  
銭湯出で額に落ちくる秋の雨  
二階より青芭蕉見ゆモダンな歯科  
秋霖やひやつく肩を布団に入れ  
秋雨の音と聞くにはやゝ粗き  
山椒魚搔く手ぶらんと沼の秋  
山小屋の廻り水草紅葉して  
紅葉冷えする中朝のストレッチ  
高原の薄き空気にピザ焼く香  
風爽やかピザは高原野菜入り  
一ッ風呂浴び来て山のきのこ鍋  
アンカーの胸に燦然赤い羽根（テレビ）  
十月の平屋を打てる雨の音  
水草紅葉叩き殖えゆく雨水輪  
煙草の香窓より抜けば秋の雨  
一波紋愉しみ秋のみづすまし  
殺生な略図に迷ひ秋の暮  
秋雨に薄濁りして寺の池  
江ノ電のカタコト走り秋の浜  
略図又出して確かむ秋の昼  
老いたりな冬至湯に脚透いて見え  
煤の日をふぐり突き上ぐ気泡湯に  
● HAIKU200510sono4  
熔岩原のりんだうしゃしゃりこしやんと咲き  
水族館見学子  
海星に手触れて心臓どつきんこ  
無花果食ふ昔はもつと汚きを  
蠅を追ひ雨に干割れし無花果を（嘗て）  
地に近く朝顔咲いてもう十月  
朝夕の温度差ある分紅葉濃し  
水溜まり幾つも出来て赤のまゝ  
だいぶ来て仕舞ひし道や赤のまゝ  
硬便に一ふんばりや豊の秋  
しつかりと留守をまもれり水引草  
冷蔵庫の中も九月となりにけり  
洋梨を少し置いといても酸つぱ

銭湯出で夜寒を神田川の唄  
取り逃がす石鹼九月の銭湯に  
洋梨の器量も含め味の内  
いちぢくは行儀悪き木故に絶え  
いちぢくを堪能したるはその昔  
煙草買ひに出てぎんなんにつかまりぬ  
市営バスに轢かるぎんなんあゝ無情  
開戦シーンポップコーンの香が流れ  
醜草の方が余計に露浴びて  
秋晴の城壁の上でーんと塔  
鐘の音の及ぶ限りのぶだう畑  
蝸牛はゆらゆら動くコロッセオ  
青芭蕉飛び込んでくる一禅寺  
精霊ばった精霊ばったの上に乗  
ホームにて振り払へるは草虱  
秋雨前線停滞即ち紅葉冷え  
やゝ寒の水ざぶざぶと廚ごと  
秋霖に細るおもひの身一つ  
投函の戻りの道の今日の月  
朝寒の一葉落とすベンジャミン  
露寒やるると草に潜むもの  
寒咲きの園芸の華桜草  
「次の方どうぞ」と医師の露けきこゑ  
秋刀魚追ひ鯨漁る民の國  
雨も好し菊の苔のこぞる庭  
魁の友禅菊とは佳き名なり  
年々に新手の菊の出づ花屋  
清流のながるゝやうに菊見人  
庭園を風のごと来て菊に立つ  
地の影のひらひら芙蓉浮き立たす  
いっぽんの川を通して野菊叢  
雨の鬱晴らさんとして目刺し焼く  
湯呑に掌被せ暖とる秋ついで  
草風船種子潜ませて野分中  
秋霖に尚も冷えくる鼻つ先  
うらめしき雨の旗日や梅擬  
衣被旗日の雨を横に見て  
坂下の寺前住ひ小鳥来る  
顔（かんばせ）のつつばる漆紅葉見て  
その下は断崖にして藪あけび

夕顔の雨にでれつと五つ程  
秋霖に一日降られてゐる他なし  
旗日は雨隣の柿が色づきて  
雨なれば寢床で新聞体育の日  
おそろしく乱れてをりぬ通草の藪  
うそ寒の電気髭剃力尽き  
蠟の香を立たせピザ焼く秋の昼  
築のあと雲徒に流れをり  
沿道の俄商ひ御命講  
鶏頭のとつとと昏れてしまひけり  
病葉の散るがきつかけ降り出せり  
野牡丹に透明な風通りけり  
越冬の為の葉巻きをハマキムシ  
ハマキムシつきし葵の葉をちよんぎる  
芙蓉につく毛虫捕つても捕つてもや  
芙蓉に湧き継げる毛虫と根くらべ  
夕顔に白雲流れ止まざる夜  
洗濯物家にごたごた秋微雨  
かんらんの苗に寄せやる土ふんだん  
朝顔の種採妻の実家にて  
寺巡り十箇寺萩寺皮切りに  
零余子黄葉始まってをり覚圓寺  
越前海月来襲列島弓形に  
食用菊一石二鳥と買ひ足して  
来襲は海月元寇以来なり  
如何なこと海月だらけの日本海  
冬麗を「始めの一步」幼ごゑ  
店頭を表紙もみづる文芸誌  
ひまわりの威風堂々たる開花  
冬日差す窓辺に手かかる鉢の花  
ベゴニヤの鉢に水遣り冬の朝  
紙角力そんな季節となりにけり  
長閑しや韓の民画の虎と鶴  
煤の日の床屋へ行くと出たつきり  
● HAIKU20051sonoi  
じねんじよの言はずもがなの苦労性  
じねんじよの花笠ひらひら駿河晴れ  
公園の人恋しさに散る木の葉  
じねんじよの好みの土は粘土土  
じねんじよの髭火で焙り擦り仕度

自然薯播りここで男手必要よ  
散りやうはどうであろうと冬紅葉  
匙をもてべろべろ柿を始末せし  
老人の口を汚してべろべろ柿  
むかご飯一箸つけて言ありぬ  
凡々たる日の過ぎやすくむかご飯  
眼底に刺さる海光海苔掬ふ  
キツと鳴る電子手帖や暖房車  
クリスマスツリー造花も進歩して  
街の日の今真上より冬帽子  
雪は降る雅香（がっこ）の彩どり皿に盛り  
冬曙何としたこと尿あやまつ  
漢方の四診八つ手明りの中  
小庭よりつけ来し落葉畳に落つ  
掃除了ゆ身より剥がるゝ一落葉  
冬珊瑚鰐暮らしも板につき（岳父）  
躰なまらぬ程度にざつと落葉掃  
八つ手咲き小学生の通る路  
冬天に翅使ひ初む明け鳥  
払暁の山茶花はまだ闇の中  
障子裡朝刊を読む一人の音  
冬は森々寢床の肩の辺りより  
青空にせんだんの実と飛行雲  
照り合うてせんだん隣同士の実  
せんだんの実は青空に空念仏  
リング園おいしいリングは目の高さ  
紅葉明りの中着きこの宿慶長より  
散るもみぢ点々として森の奥  
公園の奥点々と木の葉散る  
公園の枯れ見て読書派あんまん派  
公園の奥まる処もみづる葛  
噴水に勢ひてのぼる冬あをぞら  
冬の噴水見て考ふる人となる  
物音をたてたくなりぬ敗荷  
不忍の先づここから枯れ始む  
くいくいと鴨鳴く蓮の池之端  
雀発つあとの街路樹夕凍み来  
木の葉散るは指こそつかす音に似て  
心臓のその後の音を聴かる冬（検診）  
擲落葉門を犯して散り込めり

スカジャンの着初め夜風をシャツトアウト  
心音の聴診空つ風を来て  
公園の枯芝明り日時計に  
枯園の噴水しよぼんとなるときあり  
冬青空噴水勢ひ取り戻す  
黄落期ステージ作りに大わらわ  
公園の蛇口逆さま冬が来る  
上京して日比谷公園菊花展  
敗荷の彼方敗荷又敗荷  
敗荷の日向を鴨のうろうるす  
敗荷に救ひやうなき面晒す  
敗荷の混みぬる処をとほる鴨  
焼鳥の串を片手に一の酉  
人波に乗るのも一手一の酉  
段をなす裸燈目を射る酉の市  
たらたらと金銀滴る酉の市  
大熊手掲ぐ姿もサンドイツチマン  
酉の市数珠つなぎなる屋台の灯  
床屋の灯路地に漏れをり酉の町  
地下鉄で乗りつけ酉の市直下  
地下鉄の上はごちやごちや酉の市  
地下鉄を出づる鼻先酉の市  
古熊手持ち待ち合はす地下出口  
豚汁のついと匂へる酉の辻  
バラ銭が箆に鳴り落つ一の酉  
人混みの一端になひ一の酉  
帰るさの熊手を負うてサブウェイ  
朝顔の種を分け合ふ間柄  
目覚めぬて海鼠のごとく縮む床  
白息の一条やがて透明に  
ポールペン掠れ始めぬ十二月  
壁際につんつるてんの冬着垂れ  
さざんかの空に大気の張りつめり  
寄せ植えの要に紅白ミニ葉牡丹  
ようそろと鴉添ひ翔ぶ冬の航  
冬至湯にざぶと一物沈めけり  
ビニールにつつまれ湯屋の扇風機  
大玻璃に風の響かふ十二月  
秋霖に打たれながらも沖かもめ  
秋霖を突っ切るかもめの優頭

景気づけ百円シヨップの聖樹かな  
あらぬこと言ひては払ふ牛膝  
妻の引き連れ来しゐのこづちを見す  
ゐのこづち払ふ女のこゑ荒げ  
ひっそり咲く八つ手と鉄扉領事館  
翳さして頭上に迫る冬鷗

ぎよっとする何處ぞに雨の鴟の居る

● HAIKU200512sonoi

銭湯の湯子を閉じこめ布袋  
銭湯の柚子頬に触れにつこりす  
銭湯の柚子の徘徊あちこちに  
銭湯の柚子をこもごも手にとりて  
柚子の辺に今年も無事な顔泛かべ  
冬至湯の柚子にこゑかけ上りけり  
冬至湯の柚子にこゑかけ上りけり  
杉田湯の槽（ふね）の柚の数半端でなし  
冬至湯の柚子と戯れいい大人  
終い湯の柚子にあやかりよき睡り  
濡れ髪の上よりらくだのシャツ着込む  
気泡湯にもんどり打ちて冬至柚子  
銭湯の柚子に鼻先もつてゆく  
気泡湯に柚子の大きく浮き沈み  
枯れを来て柚子のぷかぷか浮ける湯に  
柚子風呂に男だんまりきめこんで  
銭湯に柚の黄心に点りけり  
雨の银杏落ち来て居すくむ石畳  
じろじろと見て水仙の副花冠  
物見遊山杉の香の沁む焼松茸  
秋霖の葉に突き刺さる音終日  
カヤックで湖心へピチャと水の秋  
錦秋の湖上にぽんと駒ヶ岳  
建売の三棟買い手を待つ良夜  
海上を蜻蛉流れモノレール  
冬いちめん渚に石蓴打ち上げて  
土破る鋭き芽に水仙植えし人  
渡り蟹の食べ殻を捨つ十二月  
橋下の潮透き通る根釣かな  
モノレール岸釣あんな所にも  
対岸に横たふドック鯊を釣る  
末枯れの百草を刺す野路の雨  
華やぎて冬越さんためストック植う

旭川にて初氷観測す  
清流を下るがごとく菊見かな  
なるほど頭赤く丹頂てふ金魚  
ペット屋の金魚いろいろ見て買はず  
店頭の秋刀魚は氷に埋もれて  
爛すれば辛口地酒の角とれて  
十二月一日の風に頬染めて  
コンピニを出づる鼻先空つ風  
ライターのカチと音して夜寒の辻  
焼鳥屋啣え煙草の店開き  
霜旦の睫毛ぴくんと目覚めけり  
冬麗の汀に伸びる波の脚  
冬麗の砂山一つ作り去る  
黒凍みの渚延々たる暮色  
父と子と冬の渚の砂あそび  
十二月八日の沖の海のいろ  
消灯の紐の音霜でも踏むやうに  
はりはりとして霜の日の白障子  
息弾ませ櫟紅葉が檜紅葉が  
手の空くを見計らひみて柿所望  
冬日輪子犬の歩み小刻みに  
海苔ひびの翳ひよろひよると浦磯に  
冬潮に石蓴の舞のたのしげに  
十一月末も詰まりて診療日  
例のひとつもたらす鉢のシクラメン（お歳暮とて）  
煤の日の熱湯に浸りだるま髭  
銭湯の雪不二あふぐ後頭部  
防寒具引つ被り出づ町銭湯  
銭湯をふらと出づれば冬三日月  
夜の白雲とつても低くつめたさう  
リンゴの香一気に冬のくるごとし  
大船駅線路の間の草紅葉  
種子採るとよれよれの蔓抜かずおく  
毛皮臭き御仁と同車東京まで  
葉痕を指もて撫づる枯れ日向  
腋の下締めて降り立つ冬鷗  
「おはよう」と霜でも降りてゐさうな朝  
星を見て取り込むシクラメンの鉢  
むかしから肥れぬ質（たち）よ干潤目鯛（ほしう  
るめ）

頭が冴えて師走半ばの床の中  
寒最中厠で使ふ水の音  
蒲団より出てゐる頭がさむい朝  
えへへと咳払ひして朝の床  
冬が来る睫毛のいっぼんいっぼんに  
寝床より瞬き見上げ冬灯  
柔肌のその下は骨冬が来る

● HAIKU200512son02

崖椿すらりと山の日を欲りて  
びんしゃんと背筋を立てゝ水仙花  
汐風に香り飛ばされ水仙花  
薄氷春光封じ込めにけり  
崖つばき高々空に目は吸はれ  
金盞花産声挙ぐる風の底  
鈍痛に腰部襲はれ流行風邪  
吾見上げ上目使いのスイトピー  
椎の実の朽ちかけてゐる金比羅社  
烈風にひつつる水舎の薄氷  
口衝いて御苑の梅はまだかいな  
銀鼠に沈んだ水面風邪兆す  
すうすうする蒲団の肩口今昔  
水仙は起立国語の授業中  
山梔子の実のひっそりと路地暮るる  
老人の一日長し雛あられ  
蒲団にて手足くつろぐ風の夜々  
大海の端に水仙塊りて  
冬ふとんわが身うち延べ等身大  
餅を焼く祖母は心の埋火よ  
お茶の間を彩どるものに雛あられ  
水鳥の首を埋めて茶の羽毛  
水仙にばったり倒れ込む波濤  
抱えくる五郎八といふ濁酒  
日本晴れ咳の一つもしたくなり  
新聞でくっさめ一つ囿ひ切る  
風邪抜けずひとりくよくよしてゐては  
腰だるしさでは取り憑く風邪の神  
慣れ親しむ薄着ふとんに滑り込む  
冬暁の耳に眼鏡のつるひやと  
電気毛布妻に勧めて受け入れられ  
冬の洗面真水を顔に打ちつけて

隣室てふ一語に冬の響きあり  
寒に覚む九十六翁隣室に  
放映の蓮掘りの景お茶の間に  
大年の空窺へば鳶の居る  
東京湾数え日の日を敷き詰めぬ  
年の瀬の改札くぐる人の群れ  
頓挫して御用納の日のクレーン  
数え日の銭湯に四肢伸ばしけり  
行年の湯屋に遊んで高天井  
バサと氷る濡れ髪湯屋の戻り道  
数え日の日向を走るモノレール  
湯屋を出づ縁のつめたき金盃  
病葉一つ手にとりて見つ昼の月  
小晦日掃除日和となりけり  
行年の星見渡して佇むも  
寒靄をカヌーイストの貌押しして  
新年号付録の如き夢を見て  
凧一つ海邊のあをぞらに